歴史のさんぽみち

平山善之著

序文

えみし学会会長　柴田弘武

本書は史遊会の機関誌「史遊」とその後継「史遊会通信」・「史遊会サロン通信」に発表されたものが大部分です。史遊会とは、昭和五七年（一九八二）に四五才以上の定職を持った歴史好きの者（当初は著作の有る者）が集まって作った団体で、毎月一回集まり研究発表を行い、その研究成果を月刊で発表してきました。その史遊会も会員の高齢化が進み、残念ながら平成二八年（二〇一六）一月に解散し、「史遊会通信」も二五〇号で幕を閉じ、現在は残った者が「史遊サロン」と称して二ヶ月に一回の割で集まり、その通信を出しています。

平山善之氏は平成一九年（二〇〇七）に史遊会に入会しますが、その一年前には史遊会友の会に入っていて、本書の劈頭を飾る《「親王任国制」について》を発表されています。平山氏は千葉県で生まれ育ち、住友銀行に奉職したのち佐倉市の佐倉商工会

議所専務理事をなされた後退職します。その後私も会員である「えみし学会」にも入会し、現在は佐倉市にある国立歴史民俗博物館友の会の会員でもあるそうです。即ち氏は千葉県とは切っては切れぬ関係があるようなのです。従って氏の研究も自ずから千葉県と関わりの多いことになったことは頷けます。

冒頭の《「親王任国制」について》からして上総国が何故「親王任国」なのかという疑問を解明しようとするものでした。続けての論文はその名もずばりの《「総の国」について》であり、さらに《平山武者所季重とその末裔》、《老中の城》、《佐倉の秋祭り》《千葉家の人びと》等と続いていくことはご覧の通りです。

氏の真骨頂は、何れの論文でもいわゆる定説、通説を鵜呑みにせず、「本当にそうなのか？」「なぜそう言えるのか？」と疑問を設定し、その疑問に対して「私はこう考える」と自説を展開し、疑問を解明していく爽快さにあるように思います。私が特に感銘したのは、《桓武天皇と続日本紀》や《続日本紀に書かれた伊治公呰麻呂（これはりのきみあざまろ）》でした。これらは私の関心のある蝦夷（えみし）の解明にとって極めて重要な疑問の解明であるだけでなく、一般の読者にとっても、いわゆる「正史」の持っている危険性を明らかにして

くれるものと思わない訳にはいきません。

氏が漢文に造詣が深いことにも驚きましたが、《六然会のこと》を読んで納得がいきました。また能にも通じていて、随所にその紹介があり、大いに学ばされます。

本書が多くの読者に迎えられることを期待しております。

目次

はじめに……1
「親王任国制」について……4
「総の国」について……8
平山武者所季重とその末裔（講演要旨）……11
能［羽衣］と日本人の起源……27
老中の城……30
失われゆく地名……33
維新への胎動……36
佐倉の秋祭り……39
千葉家の人びと（講演要旨）……43
松虫寺伝説……64

再び「総の国」について……69
「チャンコロが来たど」……71
熊野三題　その一「神武東征」……75
その二「熊野神社」……80
その三「起請文」……84
多賀城碑の「蝦夷国界」はどこか？（講演要旨）……89
討論会「勝海舟と福澤諭吉」要旨
「痩せ我慢の説」は是か非か……109
佐倉藩　柏倉陣屋……120
続日本紀に書かれた伊治公呰麻呂（これはりのきみあざまろ）（講演要旨）……123
桓武天皇と続日本紀（講演要旨）……149
六然会のこと……164
大老堀田正俊の死……167
三たび激戦した臼井城……171

称徳天皇と嶋足……174
異　端……178
熊野神社と道興准后……196
上総と下総のさかい……201
あとがき……205

（表紙・佐藤ひさよ）

はじめに

子どものころ、家にあった「平家物語」や「中等国史」という父の使った日本史の教科書を、退屈紛れによく読んでいました。戦後ですから、学校教育では皇国史観は払拭されていたのでしょうが、私の日本史はそれに近いものだったと思います。

大学の教養部で、高橋富雄教授の日本史を受講して、一種の衝撃を受けました。高橋教授の講義は、朝廷を軸とした通史といった日本史と、全く別のものでした。

思うにこのころ高橋教授は、地方から見た日本史というものを構築されつつ、思考中の学説を、或いは発掘されたばかりの出土品について、我々学生に語っていたのだと思います。日本史というのは天皇家や都の話だけではない、列島には様々な人々が、多種多様な歴史を紡いできたのだ、と初めて教えられて目からウロコという感じでした。

教授が教壇から、とつとつと、絞り出すような感じで自説を陳べられるのを聞きな

がら、大学とはこういうところなんだ、と体が震えるような思いをしたのを覚えています。

退職してから、誘われて「史遊会」という会に入会し、著名な方々に混じって毎月の例会に出席するようになりました。そこで柴田弘武氏にお会いし、「えみし学会」にも入れていただきました。また、国立歴史民俗博物館友の会にも入会し、その自主サークル、「古代東国の歴史探訪学習会」の一員にもなりました。歴史愛好者の様々な会でいろいろと勉強する機会を得たことは、大変幸運であり、今も生活に彩をそえてくれています。

ここに書かせて頂いたのは、主として史遊会の機関誌「史遊会通信」に掲載されたものです。今回、手を加えたところもあります。

私は、歴史に向き合ったとき、できるだけ、「なぜ?」という疑問をもつようにしています。そして、自分なりの答を出そうとしています。私の説は往々、通説と反対のことがあります。「それは、あなたの推測にすぎない」と片付けられることもしばしば

です。けれども、史遊会というところは、「独断と偏見を懼れず」がモットーと聞きましたので、自由に発言し、書いたりしました。そのまま載せています。

事実認識が違っていることもありましょう。また引用の仕方で誤解や礼を失したところがありましたならば、ご容赦いただきたいと思います。

平成二十八年十二月

平山善之

「親王任国制」について

淳和天皇の天長三年（八二六）九月六日付太政官符は、上総・常陸・上野の三国に限って国守に親王を任命する旨定めた。

大守と称し在京のまま（遥任）実務は次官の介が行う。この三国の介は他の国守なみの官位とする。適当な親王がいなければ、国守は闕官のままとする。所謂「親王任国」制である。

慣習法となり、近世まで続く。文政六年（一八二三）、有栖川宮幟仁親王が上総大守、元治元年（一八六四）山階宮晃親王が常陸大守に任ぜられている。

この制度はなぜ創られたのか。また何故上総・常陸・上野に限られたのか。

定説は第一に親王の任官をめぐる弊害除去、即ち各省の卿に不適任な親王が就くことを減らす為、第二に親王家の財政維持のためとする（千葉県史、群馬県史、茨城県史）。

その根拠は、制度創設を献策した時の実権者、中納言清原夏野（舎人親王の曾孫）の奏上文である。「類聚三代格」記載の奏状を引用する。

八省を設置し職寮相い隷し、百官職を守り世務倶に成る。一事闕あらば万事皆緩む。今、親王八省の卿に任ず。此の人地望素より高くして職に就くを得ず。砕務を知ること無し。仍って官事自ら懈り、政迹日無し。是れ庸愚の致すところに非ず。地勢の然らしむるに因る也。凡そ官人の選代は必ず解由に署す。欠物有るに至りては物を償うことを免れず。是に居するの費、現に其れ此の如し。望み請うらくは、数国を点定し、親王国と為し、迭りて彼の国に任じ、身は京都に留めん。意に京官に居さんと欲せば、一両人は聴せ。もし守闕有らば他人を補せず、その料物は別倉に納置し無品親王の要を支えん

これを読む限り、定説は安当であろう。

残念ながら、当時の廟議で如何なる議論がなされたか、知る手立てはない。六国史の「日本後紀」は応仁の乱で散失したとされ、当該時代の記録はない。

しかし、私はこう考える。

任命される人の側からだけでなく、それら三国にもっと注目すべきではないか、と。なぜ、この三国が親王国とされたか。この答えがもうひとつの、制度の目的の答えに

もなるのではないか、と。

今年、私は国立歴史民俗博物館に質問状を出し、三国を選定した理由を尋ねた。その回答は

「この三国は、特別視されて親王任国とされたわけではありません。というのも他の旧国を見ますと、広さと豊かさが格段に違っていたからです。常陸は米等農産物、上総は鮑等海産物、上野は山菜等山の産物が多く都に運ばれていました。豊かさは長屋王家木簡を見ていけば分かります。耕地面積、特産物収穫量は、この三国を併せると相当な量になるため、親王任国となりました。」

物なりが良く、豊かだった上国であることは必要であったと思われるが、関東のこの三国はやはり「特別視」されて決められたように思えてならない。

四道将軍・日本武尊以来、大和朝廷は関東・陸奥の制圧に注力していたが、この時代未だ騒乱がたえず、淳和天皇の父桓武天皇の時代は、兵を送り関東諸国の物資人員を集めて関東以北の蝦夷と一退一退の戦争を繰り返した。（宝亀五年から弘仁二年＝八一一年まで三八年の蝦夷戦争）その後も何度も「俘囚の乱」や「将門の乱」が起きている。畿内政権にとって、関東諸国、中でもこの三国は特別視すべき国であった。

ただ豊かというだけでなく、それなりに文化も高く、独立意識旺盛な地域で「関東でもっとも早くひらけた三カ国は、いわば地元経営というに近かった。」（司馬遼太郎・街道をゆく㉝奥州白河・会津のみち。）。

朝廷としては、かかる枢要の地はやはり皇族で抑えていくことが不可欠と刊断したのではないか。単に無能親王を京官から追い払ったり、親王家の台所を考えての制度ではなかろうと私は思う。

九州大宰府は「遠の朝廷」と呼ばれ、大宰府は親王が多い。九州も畿内政権にとって向背定まらず外国の脅威もあった。親王任国制度は大宰府に準ずる意味があったのではと思われる。

加えて、国守は親王だということは、住民綏撫の効果もあったであろう。丁度、イングランド王がウェールズを征服の後、住民慰撫の為、そこを皇太子領とし、以後「プリンス・オブ・ウェールズ」が皇太子を意味する称号となったように。

（２００６・１１）

「総の国」について

N君

先日は私の郷里、千葉県佐倉市を訪ねられたそうですね。佐倉の名の起こりは「麻倉」であったとする説があります。私も同意見です。麻は戻総に縁の深い植物です。

佐倉近辺は、海抜二十米程度の卓状台地と低湿地が入り組んだ地形をなし、北総台地と呼ばれます。縄文人は台地で狩りをし、低地で魚や貝を採集してくらし、弥生人は低地で米を、台地で麻を生産していたと考えられます。縄文、弥生期の遺跡や多くの古墳が各地にみられ、豊かな経済力と進んだ文化を窺がわせます。

大同二年（八〇七）斎部広成が、「古語拾遺」を著わし、その中で「阿波の国の忌部氏が東国へ赴き、麻を植えたらよく採れたのでそこを総の国とした。古語に、麻を総と謂う。住んだ所を安房郡と名づけた」とあります。これに対し、地名研究家吉田茂樹氏（日本古代地名辞典の著者）が平成十六年十一月、日経紙上で異論をたて、「私は

総は、塞（フサ）を意味すると考えた。すなわち内陸部では土砂流で小さな河川が塞がれて沼ができ、沿岸部で入り海が塞がれて干潟ができる。沼や干潟といった塞がれたところの多い「塞の国」というわけだ。それは千葉の地理的条件にも合致していると思う。」（平成16・11・11朝刊文化欄）。

麻を総と言うとは「古語拾遺」のみで他書にはない（岩波文庫本脚注）そうです。総も房も植物繊維を束ねた状態をいうもので麻と同義諸ではないでしょう。しかし、国名が考えられた当時、庶民の衣服は麻が主流であったと思います。ふさふさしたものをみれば麻が連想されたでしょう。天下は麻の如く乱れ、というように総は麻こそふさわしいのです。千葉県史は、「総」には「麻」の意味はない、として、「古語拾遺」は簡単に信ずることは出来ないとしていますが、藤原京出土木簡に「上捄国」とあるを見出し、この「捄」は和訓で「ふさ」とよみ、木の実か房状に実るさまをいうので古語拾遺の麻の国というにふさわしい、といいます。（麻の実も葡萄のように房状に実るそうです。）そして諸国が毎年貢納すべき調・庸の品目、数量をみると房総三国の場合麻が抜群に多い（九二七年延喜式巻二四・主計上）ことを指摘しています。

亦上総の国望陀郡産の「望陀布」という麻は律令に固有名詞で記されるほどであっ

た、として詳しく紹介しています。

佐倉の鎮守は式内社で麻賀多神社といいます。祭神は稚産霊神（わかむすびかみ）で五穀豊穣、子育ての神です。神紋は麻の葉。私は参詣のたび、麻の豊作を祈った古代人を思い浮かべます。

また、千葉の地理的条件は塞という概念に全く合致していません。

印旛沼は昔、海であったのが沼になったものです。河川が塞がれて沼ができたわけではありません。また総の国は千葉・東京・茨城にまたがる関東平野の中心、塞ぐという様な概念と程遠い、広濶たる空間です。

私は新聞をみて、すぐに吉田氏に反論の手紙を出しました。氏の回答は「麻は総ではない。古語拾遺の誤りだ。手賀沼・印旛沼は土砂流で塞がれた、せき止め湖と認識している。時が経てば総の国は塞の国との認識になろう」、というものでした。

（２００７・５）

平山武者所季重とその末裔　（講演要旨）

昔、ルーツという言葉がはやりました。アフリカ系の若いアメリカ人がその先祖を求めて旅をする物語で一時「ルーツ」は流行語となりました。今日は、私のルーツについて話をしたいと思います。他人のルーツなど、関心ないという方が多いものですが、お聞き頂ければ幸いです。

一

平安末期から鎌倉時代にかけて活躍した侍で、平山武者所季重というものが居ました。本姓は日奉氏といい、源平のように天皇家の血筋ではなく、古代から多摩川沿岸で勢力を振るった豪族のようです。

日奉というのは太陽を祀る神官であったようです。

日本書紀・敏達天皇六年（五七七）に職業集団の一つ日奉部が太陽祭祀を任務として設置され、中央と地方に配置されたとあります。この時武蔵国では東方が開けた日野

の地に日奉部が置かれ、古代氏族としての日奉氏が誕生した、というのです。
また、一説には、日奉氏はそれより遥か以前から日野の地で太陽祭祀を行っており、敏達天皇が太陽を祀る品部をつくるとき、助言をしたのだ、といいます。
「日奉姓平山萬世系譜」という系図が現存しています。
それによれば、天御中主尊、高皇産霊尊を祖とし、武蔵に土着し国造を務めたとあります。先代旧事本紀によれば武蔵国造は出雲系だそうで、後にお話する下海上国（後の下総国香取郡）の国造が出雲系であることと考えあわせると興味深いものがあります。
ところで、日奉は「日祀」とも書きます。こちらを音読みすると「にし」で、西に通じます。武蔵七党の一つに西党というのがありますが、日奉一族を指して言ったといいます。（余談ですが、戦前ロス五輪の馬術競技で名を馳せ、硫黄島で戦死した西大佐が日奉宗家の当主ということです。）
日奉直季という者が武蔵国多磨郡平山村に住みました。平山村の日奉氏と云われているうちに平山氏になったとされています。ですから、この直季という人が平山家の初代とされています。

日本人の姓の多くは地名がそのまま姓となったようで、千葉（平氏、）足利（源氏）、新田（源氏）、北条（平氏）、徳川（源氏）、みな地名です。

平山村は現在の日野市の一部、京王線の「平山城址公園」という駅がありますが、その一帯を平山村といいました。当時も城と呼べるものではなく、丘陵を背に館をかまえていたのでしょう。いまでも丘の頂に祠があり、平山神社または季重神社といいます。ここから見下ろすと堀のように浅川がながれ、高幡不動で多摩川に合流します。村名の語源は知りませんが、さして高からぬ多摩丘陵の穏やかな形から付けられたものでしょう。

二

直季の子が季重です。京へ上り、平山武者所季重と名乗っていたそうです。

白河上皇が院政を始めた際、院の警護の為に、地方出身の屈強の若者を集め「武者所」としました。上皇としては宮中の政治勢力と無関係の私兵を置きたかったのでしょう。無位無官の者ばかりですが、呼び集められたのは武勇優れたもの、とされ、名誉とされたようです。ですから官名の代わりに名乗ることもあり、季重の名があまり高まったため、武者所といえば季重、と固有名詞化したものと思われます。一方、季

重は源氏の家人でもあり、「平治物語」によれば、悪源太義平と共に平重盛らと戦って敗れ、平山村に逃れ帰っています。その後、頼朝が挙兵するや、直ちに随身して、以後、佐竹攻めの戦、木曽義仲討伐戦、平家追討戦、奥州征伐と全ての戦いに出陣して大功をあげました。「吾妻鏡」や「平家物語」ではよく熊谷次郎直実と併記され、ライバル視されています。

ただ、熊谷次郎は、敦盛を討ったのち、世の無常を感じて出家する、というエピソードを残したために、有名になりました。日本人の心の琴線にふれ、能、歌舞伎や文楽の主人公として後世に喧伝されました。

（平治物語・待賢門の軍の事）

義朝見給ひ、「悪源太は候はぬか、源太冠者はなきか。信頼といふ不覚人が、あの門やぶられつるぞや。あれ追出せ。」とのたまいければ「承候」とて向かわれけり。続く兵には、鎌田兵衛、後藤兵衛、須藤刑部、長井齋藤別当、岡部六弥太、猪俣平六、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上総介八郎、片切小八郎太夫等一七騎くつばみをならべ、門の口へおめきたり。

（吾妻鏡・巻一）

七日乙卯、広常以下の士卒、御旅館に帰参し、合戦の次第及び秀義の逐電、城郭放火等の事を申す、軍兵の中、熊谷次郎直実、平山武者所季重、殊に勲功宥り、所所に於いて先登に進み、更に身命を顧みず、多くの兇徒の首を獲たり、よって其賞傍輩に抽んずべきの旨、直に仰せ下さると云々

（平家物語・巻九）

あっぱれこの山の案内者やあるらんと面々に申しければ、武蔵国住人平山武者所進み出で申しけるは、「季重こそ案内は知りて候へ」御曹司「わどのは東国育ちのもの、けふはじめてみる西国の山の案内者、大にまことしからず」との給へば、平山かさねて申しけるは、「御ぢやうとも覚え候はぬものかな。吉野・泊瀬の花をば歌人がしり、敵のこもったる城のうしろの案内をば剛の者がしる候」と申しければ、是又傍若無人にぞ聞えける。（中略）

ここに平山、しげ目ゆひの直垂にひおどしの鎧きて二ひきりやうのほろ

をかけ、目糟毛といふきこゆる名馬にぞのったりける。旗さしは黒かは威しの鎧に甲いくびにきないて、さび月毛なる馬にぞのったりける。「保元・平治両度の合戦に先駆けたりし武蔵国の住人、平山武者所季重」となのって、旗さしと二騎馬のはなをならべておめいてかく。熊谷かくれば平山続き、平山かくれば熊谷つづく。

「二ひきりゃう」というのは平山家の家紋で丸に横線二本、私の家も今に使い続けている紋所です。

後に官位を得て右衛門尉（一説では左衛門尉）と称し、承久元年（一二一九）、八十二歳で没したといいます。

墓は平山城址公園駅近くの宗印寺にあります。

三

鎌倉時代、平山家は目立った動きを見せません。ただ、元寇の役当時、九州防衛に千葉氏など関東の武士団が多数動員されました。平山氏も長く北九州に陣屋暮らしをしていたようです。今でも九州や中国筋に平山姓の人が見られるのはその流れだといいます。

室町・戦国時代になると平山の名は現在の檜原村、青梅市などで見られます。檜原村は五日市の西の山村ですが、当時の甲州街道の要地で城があり、その城主が平山氏です。檜原村や青梅は、入間や秩父に近く鎌倉街道も青梅を通る道があり、現在よりも人の往来は盛んであったようですが、なぜ本拠の平山村から移動したのか不明です。北条得宗家は、ライバルを倒すことに注力し、畠山、梶原、和田、三浦など次々と葬りました。平山も、鎌倉に近い平山村から、西多摩の地に体よく追い払われたのかもしれません。

檜原城は現在も村役場のすぐ近くに城跡があります。この城は秀吉の小田原攻めの時、前田・上杉らの軍に攻められ落城しました。

また青梅市藤橋という所にも城跡があり、この城主も平山氏で同じ一族でした。先述の「日奉姓平山萬世系譜」によれば、この藤橋城主が我が家の先祖らしいのです。この藤橋城主、直季から数えて十九代目の光義という人の時に、下総国香取郡へ移り住みました。

なぜ平山光義は青梅市藤橋から、現在の千葉県香取郡多古町へ移住したのでしょうか「日奉姓平山萬世系譜」の所持者である、旭市鏑木の平山家の家伝なるものを「檜

原村史」が次のように紹介しています。

「檜原城主平山右近太夫の娘鶴壽姫は東青梅の藤橋城主平山七郎衛門尉光義に嫁いだ。当時青梅は勝沼城主三田氏が勢威あった。光義は城が隣にあった為か、これに臣従していた。三田弾正忠綱秀は当時小田原北条氏に随身していたが、元来は管領上杉家の柱石の家臣であったから、永禄四年上杉謙信が越後から出て来て長躯小田原城を囲んだときには、北条氏に叛いて謙信の軍に従った。（略）そのために北条氏の怒りを買って、永禄六年その討伐を受けて二俣尾の辛垣城に滅亡してしまった。平山光義も藤橋城を攻め落とされ、城主は小田原に拉致される憂き目をみた。光義の室鶴壽姫は当時身重であったが、親もとの檜原城に引き取られた。」

檜原城主で鶴壽の兄、平山氏重は北条氏側にいたために、光義は死を許され、下総香取郡嶋（現在多古町）へ追放となった、というのです。その後、鶴壽姫も多古に行き二人は昔千葉一族が築いた嶋城に住みました。永禄七年、子の光高が生まれます。

小田原北条氏は千葉一族も傘下におさめ、関東一円の覇者として君臨していました。天正十八年（一五九〇）、秀吉に敗北し滅亡した後、二人の間の子光高は武士を捨てて

帰農し、嶋から二里ほど離れた香取郡鏑木村（現・旭市鏑木）へ移住しました。ここにも古い城跡があり、明治期には古城村といいました。その跡を屋敷として、代々豪農として今に至っており、「萬世系譜」の所持者です。

私の先祖は、嶋から移る際分家して、半里ほどの林村という所に移り住んだようです。林村平山家、つまり私の父の生家の墓は山中に固まってありますが、その初代の墓には承応二年（一六五三）の年号があります。徳川家綱の頃です。（庶民が墓石など建てるようになったのは、この頃からと云われます。）鏑木の平山家、林の平山家、ともに丸に二つ引きを家紋としています。余談ですが、私の祖母の実家は多古町島の戸村という家ですが、戸村姓は鏑木にも数軒あり、共に島から移転したようです。平山と戸村、代々の縁を感じます。

父の生家は昔から「荒屋敷（あら）」と呼ばれていました。私は「新屋敷（あら）」つまり分家して新たに立てられた家という意味だったのでは、と考えています。

四

ところで、青梅藤橋城主であった光義は、追放処分になるとしても、なぜ下総の、それも多古の地だったのでしょうか？

抑々、平山氏はこの下総の地と、昔から繋がりがあったふしがあります。

第一は、飯高平山氏の存在です。

嶋村と鏑木村の中間に飯高村（現・匝瑳市飯高）という所があり、ここに城跡があります。中世の城で、最後の城主は平山刑部少輔常時といいました。小田原北条氏に臣従していましたが、小田原が落城し関東地方が徳川領となった時、武士を捨て城を日蓮宗の寺に寄付してしまいました。この一円は旧領主の千葉氏以来法華と縁が深く、中山法華経寺の末寺が多かったのです。（日蓮宗では城の本丸を教学の場とし、「飯高檀林」と名付け全ての檀林の筆頭におきました。従って、立正大学発祥の地とされ、境内にその石碑が建っています。）

この飯高平山氏が青梅から来た平山光義とどのような関係になるのか、判然としません。光義と常時は同じ時代であり、光高の室は常時の娘といいますから、親交があったことは間違いありません。鏑木平山家では同族としていますが、千葉氏の流れだとする説もあります。千葉氏三代目平常兼の子孫がこの地を領し、後に平山を名乗った、という説です。

第二は、先述の「日奉姓平山萬世系譜」の八代目平山季信の所に、「下総国壺丘城主」

という肩書があることです。（檜原村村史研究第四号・野中富雄）壷岡というのは、多古町の、島と向かい合う丘の字名です。季信は光義の一一代も昔の人ですから、事実とすれば鎌倉時代から平山一族は多古にいた、ということになります。

第三の理由は、事実や文献ではなく、神話の世界の話です。ただ、全く根拠のない話ではありません。

武蔵国とか、下総国という国名が定められる前、大和政権の勢力がこの東国に及ぶ前に最初にやってきたのは出雲族だったというのです。彼らは海人族で、遠く縄文時代に出雲地方にあった本拠地を離れ、日本海を北上し、各地に上陸して大河があるとそれを遡り内陸へと進みました。その一派は翡翠で有名な糸魚川から姫川をたどって安曇野に入り（安曇イコール海人族です）、諏訪に至り、やがて武蔵の日野あたりにやってきた。更に多摩川を下り房総半島につきました。

ここに、大海上国（うなかみ）ともいうべき大きな勢力を築きます。後に大和政権が、各地の豪族を「国造」に任命しましたが、「武蔵国造」と「上海上国造」「下海上国造」の先祖は同じで出雲系であったということを、先代旧事本紀の「国造本紀」は書いています。出雲族の築いた大海上国は、後にやってきた大和族の印波国（いにわ）や武社（むさ）国に挟撃され、上

と下に分断、屈服しますが、これが五～六世紀にかけてのことといわれます。諏訪大社、大國魂神社、氷川神社、みな出雲の神様を祀っていることからも明らかだと思われます。（原島礼二「古代東国の風景」吉川廣文館一九九三）ついでですが今の千葉県夷隅郡は昔の「伊甚（いじみ）国造」の故地ですが、これも出雲族の地であったことは出雲に伊甚神社があることからも推定されます。後に大和族にやられたのが「日本書紀」に出てくる伊甚屯倉の話（安閑天皇元年）でしょう。

要するに日野にいた平山氏は出雲族であり、多古（下総即ち下海上国）は同族の地であったというわけです。長い歴史を通じて両地間の交流があったとみるのが自然でしょう。季重が源平の戦いで乗った愛馬は下総の牧の産であったといいます。

五

さて、次のお話は、平山武者所季重顕彰碑の話です。

新宿駅を出た京王線が多摩川を渡り、高幡不動を過ぎると平山城址公園駅という駅に着きます。駅前広場に面して大きな石碑が建っています。これが、嘉永五年（ペリー来航の前年）に、下総国鏑木村の名主であった平山正義という人が建てた季重顕彰碑です。

平山正義は、武蔵から下総に流されてきた平山光義から数えて九代目の子孫、当時鏑木村の名主として、領主である旗本原田左近から、知行所の差配を任された人でした。大原幽学に就いて国学を学び、度々江戸に上り、本所の男谷道場の弟子でもありました。

この正義が平山村を訪れ、季重顕彰碑建立を思い立ちました。彼は、碑文起草を剣術の先生である旗本男谷信友に依頼し、次いで彫刻を京橋の二見屋久七に頼みます。これらの経緯を、正義は詳しく記録し、残しており、それを平山家から見せて貰った郡司金章という方が「平山季重遺跡建碑のうら話」として書かれたものをご紹介します。（日野史談会「日野の歴史と文化」第六号昭和四八年三月一日）

「嘉永四年二月二十八日、季重公御墓之碑石建立支度、平石求、碑文者　本所男谷精一郎様え相願、石工え申付け、夫より平山村え行　村役人えも右之段申入置」

「二見屋久七請負建申段申罷り候間一切の事頼み置候処、船にて海上より六合の川え登らせ候処　川浅く通船差し滞り候に付大勢にて陸を持たせて平山村え行」

彫刻代として二見屋に二〇両払い、更に運搬建立費用として一〇両払ったそうです。ところが苦心惨憺持ち込むと、

「村役人え申談じ候処故障申し建立ならず、久七も数度右村方へ罷り越し掛合候へ共兎角故障のみにてらちあき申さず。」

思うに、平山村の方では、碑文がやや正義の宣伝臭あるところから、「それなら少し、カネを出したらどうだ」とでも思ったのでしょうか、碑を建てる事にウンと言わなかったらしいのです。正義はカネは持っていましたが、季重の栄誉に傷がつくと考えたのか、また、同じ旗本領の差配などしていて、どこを押せばいいのかよく承知していたせいか、平山村を知行所とする二人の旗本、中山、遠藤の両家に男谷を通して掛合い両家から村役人に申し付けるという約束を得ました。（両家からの手紙が残されているそうです。）男谷精一郎は後に講武所頭取など勤め、威勢あったのでしょう。彼は勝海舟の叉従兄弟に当たります。

碑は季重の館址といわれる現在地に嘉永五年の夏に建ちました。碑文は漢文ですが、読み下し文にして読んでみます。

「平山武者所季重は、寿永元暦の役に源義経に属して屡殊功を建つ。かつて

平氏を一の谷に襲う時、衆を導き険崖を降る。また、単騎敵陣を衝き期せずして直実らに遭い、共に先登して奮戦し敵なし。その他、戦略最も多し。古史、具にこれを載せたり。故にまた贅せざるなり。蓋し保元・平治より当時に至るまで勇士猛卒は人乏しからずといえども、徒にその勇武を恃み節義を全うせざる者あり。季重の如きは然らず。終始源家に忠を致す。実に感賞すべきなり。今を距つる六百有余年、世系連綿として郷の豪族たるは、あに祖先忠烈の余沢ならずや。ここに、その裔、平山正義性篤実、好んで書を読みまた剣法を余の門に学ぶ。今ここに祖宗の古墟を思い、石を建て以て不朽に傳えんと欲し余に記するを請う。余、幼きより武事をたしなみて文辞拙し。然りといえども、正義の懇請辞しがたく依りて記し銘するなり。

物かわり星移る　六百余年　威霊赫々　英名永く傳う。

嘉永辛亥年暮春

静齋　男谷信友　撰幷書

碑の裏面に

「下総国香取郡鏑木村

」

二十五世孫　　平山信一郎日奉正義　　建石　　」

とあります。

石を建てた場所は大福寺という寺の敷地内でしたが、後に寺は近くの宗印寺と合併し、跡は村の小学校、更に日野市立図書館となり、その裏手にひっそりと建っていました。

今は京王線の平山城址公園駅の駅前広場に堂々と建っています。正義は石が建ったあと村を訪れ、寄付などもして村人と手打ちをしたらしく、石は今も無事に立っています。

この正義氏は文久二年、五六歳で病没しましたが、子孫は広大な屋敷地にそのまま現住して居られます。当主、高書（たかふみ）氏に、家宝とされている「日奉姓平山萬世系譜」を見せて頂こうとお訪ねしたことがありますが、他所に預けてあるので、ということで叶いませんでした。しかし、紋どころや、多古町島の縁などから、一族であること間違いなし、と言われました。この辺で終わります。ご静聴ありがとうございました。

（２００７・１１、２０１６・８改稿）

能［羽衣］と日本人の起源

日本人の起源を者えるとき、私はよく羽衣伝説を思い浮かべる。

世阿弥の能「羽衣」は、いつとも知れぬ遠い昔から伝えられた民間伝承を、能という形に什上げたもので、世阿弥の時代の話ではない。能は駿河の国三保松原に住む白龍という漁師の登場で始まる。彼は三保松原の美しい景色や、春ののどかさを謡った後「虚空に花降り音楽聞こえ、霊香四方に薫ず。これただ事と思わぬところに、これなる松に衣懸かれり。寄りてみれば色香妙にして常の衣に非ず」という。持ち帰り家の宝にしようとすると、「なう、その衣は此方のにて候。何とて召され候ぞ」と天人に呼び止められる。天人は、その衣がないと天に帰れないと嘆き、哀れに思った白龍は舞を見せてくれるなら、と衣を返す。天人は羽衣（能では長絹という寛やかな上着）を着て、天人の舞を見せる。太鼓入り序の舞という静かではあるが華やかさを感じさせる舞である。

羽衣伝説は、駿河・丹後・近江などに伝わるという。駿河のものが現型に近く、最

も詳しいのは丹後のものという。

私見では、何れも古代日本に舟で大陸や南洋諸島からやってきた人々がたどり着いた場所であったろう、と考える。黒潮の急な流れはさしたる航海術なしに南海から日本に至る。藤村の椰子の実の如くに。また、朝鮮半島から丹後、出雲は一衣帯水の地。羽衣伝説が駿河・丹後と日本列島の東西にあるのは、これらの地に先進地からの舟による来着がしばしばあったことを伝えているものと言える。記紀をはじめ、風土記や説話の類はすべてが創作ではなく、歴史的事実を内包している。著者の意図的強調や書かれなかったこと等は注意を要するが、証拠がないとして無視すべきではないと考える。

丹後の羽衣伝説について柴田氏の「丹後の天女伝説」（史遊三七号）に詳しい。地名や神社名を詳細に考証し、天女は産鉄母神であったとされる。先進地から来た人々は製鉄技術や稲作技術、養蚕、機織等のテクノロジーをこの列島にもたらした。従って天女が産鉄民の母神ということは全く矛盾ぜず、むしろ私の考えの証明ではなかろうか。古代から来着はしばしばあったが最も頻繁だったのは縄文後期から弥生前期、それから七、八世紀ではなかったか。

先進民族の衣装は透けるような薄物であり、良い香りを放っていたであろう。その出会いを原住民サイドから見たのが羽衣伝説である。

では、白龍に代表される原住民はどこからきたか。約一万年前までは氷河期で海水面は百米も低く、列島は大陸と地続きであったという。また現代日本人の直系の先祖と思われる最古の人骨は港川人で約一万八千年前のものという。（人類学者・埴原相郎）同教授によれば港川人は縄文人に似ており同時代人では広西省の柳江人やボルネオのニア洞穴人に近く、河北省の上洞人とは異なるそうである。従って港川人は東南アジアや東アジア大陸南部の集団と近縁性を持つという。

大陸と地続き時代に大陸東南部から来た原日本人に、その後舟で南北からやってきた人々が温血して現代日本人が形成されたと私は考える。

（２００７・１１）

老中の城

N君　佐倉城址の散策は如何でしたか？　本丸の桜が見ごろだったでしょう。あの城の城主は、初代土井利勝から明治の堀田正倫まで八家二十人でした。そのうち八人が老中を勤めています。大老、老中という徳川幕府の閣僚が何人いたかを「柳営補任」という幕府諸役人の名簿で数えると百六十人でした。その内八人というのは小田原、古河と並び最多です。

八人の内六人は川越・唐津・岩槻・高田・淀・山形の城主時代に任命され、即時或いは数ケ月で佐倉転封を命ぜられています。宛も佐倉は老中の居城とみなされていた如くですね。

しかし見ておわかりのように、石垣もなく、天守閣（文化十年焼失）なども質素なものでした。二代将軍秀忠時代の築城で、戦闘を想定しなかったということもありますが、私は「天下の政を執る者は、質素であるべし」という哲学があったのではと推測するのですが、如何でしょうか。

二の丸の「常盤木や冬されまさる城の跡」という句碑を見ましたか。これは明治二十七年十二月、県下初の鉄道が本所から佐倉まで敷かれた時、佐倉を訪れた正岡子規が詠んだものです。子規はまた「霜枯の佐倉見上ぐる野道かな」という句も詠み、これはＪＲ佐倉駅近くの城南橋畔に句碑があります。

三の丸に入った所に、裃姿の十九代城主堀田備中守正睦（まさよし）の銅像があります。（初めは正篤（まさひろ）といったそうですが、天璋院篤姫に遠慮し正睦と変えたそうです。）

今年は安政五年（一八五八）に「日米修好通商条約」が調印されてか百五十年に当たります。正睦は老中首座として岩瀬・井上ら幕府の官僚を指揮して、ハリスとの折衝にあたり条約案をまとめ上げました。

この条約は不平等条約で、その改定に明治政府を苦心惨憺させましたが、当時の日本人全体の知識・経験不足からみればやむを得なかったと思います。今、井伊直弼が開国の父などと言われ、横浜の掃部山公園に波の巨像が建っていますが、本当の開国の父は堀田正睦ではないでしょうか。近世史の宮地正人教授（東大）は「彦根と佐倉と比較すると、家臣団の相違が人きい。直弼の家臣でその後活躍した人を知らないが、佐倉藩は順天堂の佐藤秦然、その子で軍医総監松本良順、西村茂樹、津田梅子、浅井

忠など明治各界の人材を輩出した」と述べています。直弼には「世界の中の日本」といった経綸はなく、徳川家の威信回復のみであったから、新時代に向けて家臣を教育する事など眼中に無かったためと私は思います。安政五年二月、正睦は条約調印の勅許を求め上洛します。所謂京都入説（にゅうぜい）です。しかし公家の無知蒙昧・優柔不断は如何ともなしがたく、勅許は得られず帰府します。四月大老に就任した直弼は強行策をとり、六月に調印、正睦は老中を辞任し世は安政の大獄へとすすみ幕府の終焉を早めました。

数年前、私はＮＨＫの「その時歴史は動いた」の松平定知アナの講演を聞きました。内容は忘れましたが、講演後のパーティーで話をする機会を得ましたので、正睦の話をし、番組で取り上げてくれるよう頼んだのですが、「折を見て」とかわされてしまいました。余談ですがその時、同アナが下総国多古藩主久松家の出身と開き、父の故郷が多古なので親しみを覚えました。

長くなりました。では、また。

（２００８・４）

失われゆく地名

平成の大合併とやらで、市町村の再編がかなり進められた。グローバルな時代に小さな行政区画で経費ばかり掛けるのは愚かな話で、合併自体は私も大賛成である。

しかし、合併後の新市名を決めるに当ってもう少し歴史を尊重して貰えなかったものかと残念に思う。

☆

平成十七年七月、千葉県海上郡海上町（かいじょうぐんうなかみまち）が旭市に吸収された。その結果、古事記や日本書紀等にしばしば登場した「菟上（うなかみ）国」・「海上国造」ゆかりの地名は地図から全く姿を消した。

五世紀以前、戻総半島北部に「海上国」という国があった。今の銚子市・、旭市など大平洋に面する地城から、千葉市、市原市など、東京湾岸にまで及ぶ広大な国であった。五～六世紀に大和政権の影響が及んで、新たに「武社（むさ）国」が建てられ、海上国も西側は「上海上国」、東側は「下海上国」となり、「国造」たちが統治していた。古

事記では両国造は出雲系という。また最近の研究では、武社国はその名前から蘇我氏と関係していたらしいといわれる。

律令政治に入って「くに」は郡となり、香取郡、匝瑳郡、山辺郡など新しい郡も多数設けられたが、上海上国は上総国海上郡、下海上国は下総国海上郡として存続した。

明治に、千葉県が置かれた時、下総の海上郡のみ残された。郡下には銚子町・本銚子町・旭町・飯岡町の四町と、十四の村が属した。平成十七年にその全てが銚子市と旭市という二つの市になり、由緒ある海上の名は消えたのである。

☆

平成十八年二月、岩手県に「奥州市」が誕生した。水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村が合併してできた新市である。旧水沢市の北郊、北上川のほとりに胆沢城址がある。この城は延暦二十一年(八〇二)桓武天皇のときに坂上田村麻呂が造宮し、蝦夷制圧の根拠地とした。阿弖流為(あてるい)や母礼(もれ)らが敗れて降伏したのは此処である。間もなく胆沢・江刺・磐井の三郡が置かれ胆沢城はその中心であった。旧水沢市が遺跡の南に立派な「埋蔵文化財調査センター」を設け、今も情報提供や企画展ほか様々な催しを行っている。しかし奥州市という新市名はいかがなものであろうか。胆沢市では

なぜいけないのか。ここに胆沢城址があると、誰がわかるであろうか。そもそも奥州市では奥州四県のいずれにあるかさえ、判然としないのではなかろうか。市町村同士の面子から立案されたとしたら、地域エゴというべきである。由緒ある地名の消失は、地元が胆沢城の観光に注力しているだけに余計惜しまれる。

☆

平成十七年三月、栃木県の喜連川町が消えた。氏家町と合体して「さくら市」となったのである。千葉県佐倉市と紛らわしいことこの上ない。しかし、それだけでなく、「喜連川」も由緒ある地名なのである。

ここに唯一、五千石ながら十万石の格式を持つ「大名」がいた。名門足利の家が絶えることを惜しみ秀吉、家康が古河公方の流れをここに封じ、「御所」の称号を許した。喜連川氏である。明治後、足利氏に復した。

「きくら市」ではこうした歴史を思い起こす、よすがもない。

（２００８・９）

維新への胎動

N君　ご無沙汰しています。お元気ですか。

私はまだ社団法人佐倉市社会福祉協議会の諮問委員を拝命しておりまして、時々佐倉へ行きます。協議会のY会長は、元陸上自衛隊の将官で温厚かつ毅然とした紳士ですが、先日会長室で雑談のおり、興味深いお話を伺いました。

Y家のご先祖は野州真岡の郷士だったそうです。寛永四年（一六二七）、春日局のもと夫、稲葉正成が大名に列せられ真岡二万石を領し、家臣を徴募した際これに応じて、稲葉家の家来となりました。正成と春日局の間に生まれたのが嫡子稲葉正勝、累進し小田原城主になり、その子正則は老中にまで栄進。その子正往は小田原から越後高田に移封、元禄十四年（一七〇一）、同じく老中に就任し、すぐ佐倉移封となります。この時、Y家のご先祖も主君に従って初めて佐倉にきたというわけです。

ところか、享保八年（一七二三）、山城・淀城主松平乗邑（のりむら）が老中となり佐倉へ、稲葉家は淀へと移封されると、Y家はなぜか佐倉にそのまま残ったそうです。普通は浪人

するか武士をやめるのですが、そのまま松平家に仕えました。乗邑は八代将軍吉宗の享保改革を補佐し、実権を振るいました。

延享二年（一七四五）、山形城主堀田正亮が老中に就任、松平家と入替えに佐倉城主になると、またＹ家のご先祖は佐倉に残り、新城主の堀田家に仕えます。

かく二度にわたり主君を変えたというのはどうしてか。名臣として新城主に請われて残ったということもあり得ますが、しかし「都度、禄高は減らされたそうですがね」と、Ｙ氏はいわれたので、どうもＹ家から希望したようです。余程佐倉が気に入っていたのでしょうか。或いは偶々二回とも旅が出来ぬ事情でもあったのでしょうか。

以後は堀田家が相次いで明治に至り、明治初めの頃、Ｙ家当主はアメリカで写真の修業を積みました。帰朝後、初め東京で、その後佐倉で写真館を開業されます。新時代に即応していったのは日米修好通商条約の立役者、堀田正睦の家臣教育の結果でしょうか。佐倉には連隊がありましたから、兵士や面会家族の記念写真をとる人が多かったようです。私が子どもの頃もＹ写真館は盛業を続けていました。

さて、私が右の話で興味深く感じたのは、封建時代の「忠節」という観念の変化、亦「藩」の法人化というものをそこに観ることができると思うからです。

司馬遼太郎は言います。「幕末の志士たちが使う〝藩〟ということばには〝法人〟というニュアンスが含まれている。徳川初期には、福島左衛門太夫家来何の誰兵衛、細川越中守家来何の誰兵衛であって、肥後藩、熊本藩の何の誰兵衛とは言わない。〝肥後藩・熊本藩〟と言い出したころには、すでに藩主は象徴化され制度化されて藩主も藩士たちも自然人ではなくなっている」（「手掘り日本史」・集英社文庫）。

明治維新の原動力となった西南雄藩ほどその傾向が強かったといいます。封建制を打破するには、主君個人への忠節を脱皮し、藩或いは日本国という「組織」への忠という概念をもつことが必須で、これこそ明治維新の源だったのではないでしょうか。

なぜ「法人としての藩」という見方がでてきたかについては長くなりますので、また。

（２００９・３）

佐倉の秋祭り

N君

肌寒さが忍び寄る十月、良い季節です。お元気ですか。

十月は、佐倉の秋祭り、麻賀多（まかた）神社の祭りがあります。前は十月十四日から三日間でした。今は中頃の金・土・日の三日間です。土・日にする件は長年、市民や神輿の担ぎ手から要望があったのですが、数年前宮司が代わって、実現しました。前宮司は「例祭を人が勝手に変えられない」と頑なでしたが現宮司は「神前のおまつりは私が従来どおりやります。市民の秋祭りは皆さんの宜しいように」と、捌けたものです。山形県酒田市でも頑固な宮司に市民が困り果て、五年程前佐倉商工会議所に、どう説得したのかと聞きに来ました。結局は宮司が変わったお陰と聞いてがっかりして帰りました。宮司は勝手に変えられないようです。

佐倉の総鎮守、麻賀多明神は、式内社ですから、千二百年以上の歴史があります。昔印波国造がいたと思われる、印旛沼を見下ろす高台（成田市台方）に今でも本社

はありますが土井利勝が佐倉城を築いたとき、大手門近くに勧請し鎖守としました。神社仏閣は城の防衛機構としても重要でしたから、歴代城主は篤く尊崇・保護しましたので、かつては本社以上の社域を誇りました。

麻賀多明神の大神輿は氏子が白丁で担ぎます（前は被った烏帽子は、邪魔にして最近被らなくなっています。）掛け声も「わっしょい」とか「ソイヤ」などとは言いません。「明神まつりイ」と片棒が叫ぶと反対側が「さらば久し」と応じます。さらば久しは見物人には「さっ」としか開こえないので「何と言っているの？」とよく開かれたものです。

ところで、麻賀多神社という名前は何に由来するのでしょうか。実ははっきりとしたことは解っていません。【神社辞典・東京堂出版・平成九年刊】には

「古く千葉県印旛郡一帯は麻の産地として知られ、麻県（まあがた）といい、これに因んでこの社名がつけられた」という説と「麻賀多は真若田（下毛野君の弟）であり祭神・稚産霊命は真若田の訛ったもの」とする説を紹介していますが、確証はない、としています。

また一説にはマカタは「真潟」で印旛沼をさす、とする人もあるようです。

柴田弘武氏は著書【産鉄族オオ氏・新編東国の古代】（崙書房・平成二十年）の中で

「マガタはマクタやモウダと同じ言葉とされます。この点からも馬来田国造と印波国造との親縁関係がうかがわれます。」と、書かれています。

麻賀多、馬来田、望陀、いずれも当て字で漢字は表記に使われたにすぎず、音がさきにあったものでしょうか。とすれば、この音は何に由来するものでしょうか。

上総国望陀郡という郡がありました。今の木更津市、袖ケ浦市近辺です。和名抄では「まうた」と訓じています。更に古くは馬来田国(うまくた、または、まくた)という、クニでありました。この地方は良い麻が採れることで有名でした。

【千葉県史】は上総の望陀布という一節を設けて上総の麻は質、量ともに他国を圧倒的に凌駕していたことを論証しています。

「延喜式」記載の諸国の「調」で上総の麻は、質・量ともに他の国々を圧倒していました。望陀布は、美濃?(あしぎぬ)と並んで律令に固有名詞で記載されているほか、践祚大嘗祭の垂れ幕や幌は望陀布が使われる規定があり、また遣唐使が大唐皇帝への贈答に用いた品でもあったそうです。

麻の字は、音読みでは「マ」です。「マウタ」も「マクタ」も良い麻の採れる所という意味があったかもしれません。

私は、馬来田国造と印波国造との親縁関係はよく解りませんが、麻賀多神社も麻に由来する名前だという思いを捨てきれません。その根拠は、佐倉の名前の起こりは、「麻倉」だったという説です。

（２００９・１０）

千葉家の人びと　（講演要旨）

今日は、平安末期から戦国時代まで、北総地帯に威を振るった千葉一族についてお話させて頂こうと思います。

千葉氏について書かれた書物・文献は沢山あります。「千葉実録」「千葉傳考記」「千葉家世紀」「千学集」「妙見実録千集記」「千葉大系図」「松蘿館本千葉系図」等々ですが、内容がいろいろ食い違いがあり、どちらが正しいのか分らないことが多くあります。

最近、千野原靖方さんという研究家が「千葉氏」という上下二冊の大著を出され諸説を考証したうえで、通史を完成されました。今日はこれを参考に、あとは私の推測を交えてお話をさせて頂きます。

一

そろそろ九世紀も終わろうという宇多天皇の寛平元年（八八九）、ひとりの男が都

から総の国へ下ってきました。彼は高望王、桓武天皇の曽孫です。臣籍降下し、平という姓と上総介の地位を賜って、はるばると坂東の地へ来たというわけです。

在原業平の「伊勢物語」も、ほぼ同時代の話です。

「むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。」

高望の心境もこんなところであったかも知れません。この頃、都の公卿などが吾妻に下るのは一種の流行だったのではないかという気がします。フロンティアたる広大な天地は、若者が都の藤原氏専制の閉塞感から脱するに、恰好の土地だったと思うのです。

上総は「親王任国」で皇族しか国守になれず、適任者なければ「守」は置かれませんから、「介」がトップです。昔から「総の国」は人口も多く物成りが豊かで、ということは税収も多く、平安貴族にとって魅力的な土地だったようです。上総の国府は現在の市原市ですが、高望がどこに住んだかは不明です。

彼は子沢山でした。嫡男良望（国香）以下良将、良兼、良文等の子を育て、子供たちは常陸、下総、武蔵、相模などに分散して、その子孫は在庁官人として都にいる荘

園領主たちの代官役を勤める一方、新田開発などの指揮をとり、現地豪族化しました。北条、畠山、三浦、土肥、大庭、梶原、長尾、みな高望を祖とする平氏です。坂東八平氏といいますが、どれをいうのか説が分れます。要は、八とは「沢山」ということなのでしょう。

高望の長男・国香の流れが嫡流といわれ、八代の後が清盛です。

次男良将の子が将門です。承平五年（九三五）、将門は自ら新皇と称し坂東一円を暴れまわりましたが、藤原秀郷らに討伐されました。

五男良文は村岡五郎といわれました。高望の晩年の住居が相模国村岡だったそうですから、良文は晩年の子だったのでしょう。千葉氏は良文の子孫です。

良文の孫、上総介忠常も、大規模な反乱を起こしましたが、長元四年（一〇三一）、源頼信らに制せられ、都に連行される途中美濃で病没しました。五六歳でした。ところが何故かわかりませんが、子孫はなんら咎めを受けず、その子常将が下総国千葉郡に住み「千葉小次郎」と称します。千葉氏はこの常将を初代と数えていたようです。

二

ここで、「千葉」という語についての説をご紹介しましょう。

桓武天皇などよりずっと昔から千葉という地名はありました。上総も下総もない、つまり国郡制が定められる前、大和政権は「国造」制という地方組織をつくり各地の豪族を国造に任命しました。千葉国造という字が日本後紀に見えます。（なぜか「先代旧事本紀」の中の「国造本紀」にはみえません。）

万葉集巻二十、「下総国防人部領使少目従七位下縣犬養宿祢浄人の進れる歌」

「千葉の野の　児の手柏のほほまれど　あやにかなしみ置きて誰が来ぬ」

という歌があります。千葉の字は“知波”の字を使っていますが「右一首　千葉郡大田部足人」とありますから、奈良時代にはこの郡名があったことは明らかです。千葉氏の歴史を書いた古書の中には、あたかも千葉氏が来てからそれが地名になったように記述したものがありますが、誤りです。

千葉市史では

「必ずしも千葉という漢字にあてて草木の繁茂する意味に解する必要はない。チとハの複合語で、（中略）『畏敬する神を同祖とするものの血縁集団、または

その居住する所』という程の意味があるのではないかと思われるのである。」とあります。

柴田弘武氏からご教示頂いたところでは、「日本語のアイヌ語地名」（大友幸男・三一書房）に「チバ＝幣場＝イナウサン＝ヌサ場」とあるそうです。

私も、地名については漢字不信論者で、地名を考える際、漢字の含意から考えると誤ることがあると思っています。元明天皇の「佳字を使え」という勅で決められた地名が多いが、漢字伝来以前からあった地名も多いであろうと考えるからです。

三

話は平忠常、その子で初代千葉氏の常将の頃にもどります。

忠常が居住したのは始め上総国大椎（千葉市緑区土気）、その後下総国大友（千葉県香取郡東庄町）と言われます。忠常の反乱は二年にわたり、上総下総安房の三国はすっかり荒廃したと古文書は伝えています。平忠常を討伐したのは清和天皇の曽孫・清和源氏の源頼信ですが、両者の関係がよくわかりません。主従だったという説もあります。忠常は、都から頼信が下ってくると一戦に及ばず降伏し、共に都へ上る途中で没し、子供たちは罪をゆるされ、その後も繁栄しているのです。忠常の子常将は源頼信

の子・頼義に従って前九年の合戦を戦っています。江戸期に書かれた「千葉家世記」によれば、「頼義・義家、常将をみること猶子の如し」とあります。「その子常長は義家の烏帽子子にしてその間常に父子の親しみあり。」

余談ですが、私どもは、源平といえば対立するもの、相いれざるもののシンボルとみなしがちです。おそらく後の「平家物語」やゲームの「源平かるた」の影響でしょう。この見方は、あまり正しくはないように思います。

関東、東北の地で桓武平氏、清和源氏の子孫は時に主従となり、時に姻戚関係を結び領地も入り混じっていたようです。源頼信の武勇に感じた平直方（国香流・北条の祖）は、頼信の子・頼義を婿とし、鎌倉の所領を譲ったと言われます。頼義の子が義家で彼は八幡太郎義家とよばれるようになります。この頼義、義家父子に従って多くの平氏一族が東北の地で、前九年・後三年の合戦を戦っています。平景政は鎌倉にいたので鎌倉権五郎景政といわれ、後三年の合戦で、武勇をたたえる逸話を残しています。合戦のおり、顔に立った矢を抜くために家来が顔に足をかけたらひどく怒ったというお話です。歌舞伎「暫」の主人公です。

常陸国は平国香以来平家の牙城かと思えば、義家の弟義光の子孫が佐竹氏、武田氏

として常陸に勢力をはりました。また、義家の曽孫・義朝は上総の御曹司と呼ばれたという記述もあります。子の頼朝が石橋山の敗戦のあと、房総の地をたよったのも、その縁によるものでしょう。頼朝が妻としたのは、伊豆北条の平時政の娘政子でした。

要するに、関東では源氏だ平家だと拘っていなかったようです。頼朝の幕府を支えていたのは北条、千葉、上総、大庭、梶原、三浦、畠山等、多くが桓武平氏の子孫たちでした。この時代は都への反発、京都何するものぞという気概が関東の地を覆っていた、従って源平両家の侍はその一点で大いに意気投合していたものでしょう。

余談が長くなりました。

常将は千葉郡に移って千葉小次郎と言われたことは先述の通りですが、場所ははっきりしません。「千葉家世記」では「蓋し猪鼻丘なるべし」としているのみです。

四

千葉小次郎常将から五代の孫が上総介広常、下総介常胤で、二人は又従弟の間柄です。常将の嫡流とされたのは広常だったのではないでしょうか。高望が任命されたのが上総介でした。又従弟同士とはいえ、片や国名である上総氏を称し、片や郡名である千葉氏を名乗りとしました。動員兵力も広常が上回っていました。しかし、頼朝が

石橋山で敗戦し、命からがら房総半島にたどりついた時の対応が二人の運を分けます。

常胤は、いち早く六人の子息と三百人の手勢で馳せ参じました。頼朝は大いに喜び、

「武衛、常胤を座右に招かしめ給ひ、須らく司馬（常胤）を以て父と為す可きの由おおせらるる」

（吾妻鏡治承四年九月）

上総氏を称していた広常が大軍を率いて味方についたのはしばらく後、大勢が決してからのことです。

「二万騎を率いて墨田河辺に参上す。武衛頗る彼の遅参を瞋り、敢て以て許容の気がなし。」

（同）

頼朝はその後も常胤を重用します。奥州征伐のあと、その功により一族のものが東北各地に領地を与えられ、移住しています。

常胤は「人となり重厚にして勤倹、衣服器用質素にして奢らず」といわれました。頼朝が、華美な服装の家人をとがめ、「常胤を見習え」と言ったという逸話が残っています。また頼朝は「功臣を賞するには当に常胤を以て首位となすべし」としたそうです。常胤は建仁元年、八四歳で没しました。

又従弟の上総介広常ですが、彼は最初の参陣に遅れて以来うまくいかず、態度も大

きかったようです。広常が出先で頼朝に出会った時、下馬の礼をとらず、「公私共に三代の間，未だその礼をなさず」と嘯いた、と吾妻鏡にあります。（治承五年六月）上総の御曹司義朝らとの交遊がそうさせたのかも知れません。彼は謀反の疑いをかけられ、誅殺されてしまいます。命により、誅殺したのは梶原景時。

「景時ガカウミヨウイウバカリナシ。　雙六ウチテ。サリゲナシニテ盤ヲコヘテ。ヤガテ頸ヲカイキリテ・・」　　「愚管抄」（慈円）

とあります。後に冤罪と判明するのですが、誰かが讒訴したものでしょう。

私は、北条氏あたりが怪しいと考えています。北条氏はこの頃幕府内で実権確保のために、次々と家人たちを破局に追い込んでいました。畠山、比企、梶原、三浦、和田、全て倒されております。謀反の陰謀あり、といいますが、皆、北条氏の策略でしょう。先述したように桓武平氏の同族なのですが、頼朝が従弟義仲はじめ、義経ら兄弟を次々と抹殺していったのに比すれば何ということはなかったでしょう。

広常の所領と上総氏の名跡は、常胤の孫、常秀に与えられました。両総平氏の頭領たる地位は常胤に移り、常胤の勢力は拡大したわけです。両総平氏の力を削ぐのが目的とすれば、中途半端な結果に見えます。しかし常秀の子秀胤が、三浦氏から嫁を迎

えていたため、宝治合戦と呼ばれる三浦一族殲滅戦の際、連座して滅ぼされてしまいます。上総氏の所領は足利氏等、千葉以外の御家人に分け与えられ、北条の目的は達するのです。

宝治の合戦ですが、北条にすれば、三浦氏より千葉一族の勢力を弱めるほうが狙いであったのではないでしょうか。三浦を挑発すれば上総秀胤は必ず三浦方につく、と読んだ北条時頼の戦略だったのでは、と考えています。以後千葉氏は完全に北条氏の下風に立つことになります。それは歴代千葉介の名前が、頼胤・胤宗・貞胤等、時の北条執権の諱を一字貰っていることからも窺えます。

五

元帝フビライの日本攻撃の際、全国の武士は日本防衛に動員されました。千葉氏も、当時の当主千葉介頼胤以下、多数の将士が北九州へ赴きます。元来、常胤の時、頼朝から鎮西の抑えとして肥前国小城郡晴気庄に領地を貰い、その地頭職を兼ねていましたから、足場はあったわけです。

頼胤は、文永十一年（一二七四）冬、蒙古軍と戦って負傷し、翌年三十七歳で没します。子が二人あり、宗胤、胤宗といいました。

弘安の役のあとも、いつ来るかわからぬ元軍の為の防衛陣は維持しなければならず、千葉氏も惣領の宗胤は九州に駐屯し続けたのでしょう、留守の下総の本領は弟胤宗の継ぐところとなってしまいました。以降胤宗の系統が千葉介を継ぎ、宗胤の系統は肥前千葉氏となります。代々小城郡の領主でしたが戦国末期、歴史から姿を消します。

しかし、宗胤の子、胤貞という人は下総でも名を売っています。

日蓮宗史上、千葉胤貞という名前は有名です。中山法華経寺三代貫首、日祐上人は胤貞の子、或いは猶子といわれます。胤貞は法華経寺に大変肩入れし、千葉家所領の内、穀倉地帯の三庄（千田、臼井、八幡）から、かなりの土地を、同寺に寄進したというのです。日蓮宗勃興の大檀越として伝えられています。（現在も千田庄、すなわち香取郡多古近辺は日蓮宗の大根拠地です。とりわけ不受不施派という日蓮の正統をつぐと自負する一派が多いのです。）

思うに、千葉一族にしてみれば、苦々しいことであったに違いないのです。このまま胤貞が惣領として居られたのではみな寺に寄進しかねない、そう考えた一族は彼の叔父に当たる胤宗を千葉介に担ぎ、胤貞を態よく九州へ追い返したのではないかと私は思うのです。

六

ここで、呼称と領地の話をします。

千葉介、と言いましたが、正式には千葉下総介、つまり下総国の守につぐ次官でありますが官職のように言い習わされたのには理由があります。

江戸時代末、伊勢貞丈という旗本がおりました。室町時代は将軍の側近にあって、小笠原氏と共に営中の礼式を司った家柄です。江戸期にも有職故実を専門としました。この人に「貞丈雑記」という書物があり、中に八介の話があります。

「八介と云う事、

出羽国に秋田城介、鎮守府又は按察使を兼ぬる重き官なり。

相模国に三浦介、下総国に千葉介、上総国に上総介、古三介と称す。

伊豆国に狩野介、加賀国に富樫介、周防国に大内介、遠江国に井伊介、

これを八介という。

侍の面目とする官なり。上総介、秋田城介は古代の正名なり。その余は武家の俗に言い習わしたるなり。」

とあります。これらの介は、官職ながら、それぞれの家の世襲名とされたから「侍の

面目」となったのでしょう。就任早々は新介、隠居すれば大介、とよばれました。

次に、千葉氏の領地、その本城や支城を見てみましょう。

初代常将は始め銚子のとなり、香取郡東庄町（とうのしょうまち）の大友というところに居り、その後千葉郡に移り千葉殿と呼ばれたのですが場所の詳細は不明です。その後、曽孫・常重（常胤の父）が猪鼻城を築きましたが、常将が来たのも多分このあたりだったでしょう。築城は大治元年（一一二六）のことでその地は、千葉市亥鼻一丁目、現在の千葉大学医学部辺とされています。以後、三三〇年間、千葉氏はここを本城としました。南北朝の騒乱を乗り越え、室町時代も千葉氏はこの猪鼻城に居住していました。（現在、亥鼻公園の中に千葉市が江戸時代風の天守閣を建て、郷土資料館として使用していますが、歴史上こんな物は存在しませんでした。戦国時代以降、このあたりは一寒村と化していました。）

皆さん、東京から成田空港へは東関東自動車道か、鉄道で行かれるでしょう。どちらも、しばらくの間、台地の住宅地を行きますが、佐倉のあたり、即ち印旛沼近辺に至って水田が姿を現わします。昔は臼井庄、印東庄と言った土地です。空港はその先、北総台地と呼ばれる広大な畑作地帯に建設されています。飛行機が離陸すると、眼下

にまた広大な水田地帯が見えます。この水田地帯が香取郡多古町、昔の千田庄です。現在も「多古米」は県下一のブランド米として有名です。

房総半島の北部は海抜二十から三十メートルの卓状台地と、低い水田地帯が入り混じり複雑な地形をしています。畑作より米中心の時代ですから、千葉氏にとって、佐倉と多古の水田地帯は最も重要な土地であったことがわかると思います。台地の上は牧場として馬が多く飼育されました。本城は猪鼻城で、佐倉・多古近辺の、水田を見下ろす台地の上にはいくつも出城を築きました。城、というより砦のあとで土塁・空堀が今も残っています。

七

室町時代の中頃、千葉氏に内紛が起きます。

南北朝から室町時代というのは、天皇家から貴族・武家を問わず一家の中で相続争いを起こしそれが戦乱となった歴史、と言ってよいかと思いますが、千葉氏も例外ではありません。

胤直という当主が、一族の原胤房・馬加（まくはり）康胤らに攻められ本城を焼かれ、子の宣胤と多古の嶋城に走りました。なぜ多古へ逃げたのでしょうか。先述の通り佐倉と多古

には支城が多くありましたが、おそらく佐倉は康胤の勢力圏だったので、多古となったのでしょう。しかし、この胤直は嶋城を攻め落とされ討死を遂げ、その子宣胤も多古城で殺されます。二つの城は広い水田を隔てて向かい合う丘の上にありました。享徳四年（一四五五）のことです。

殺した側の大将馬加康胤は、胤直の叔父に当たる人物です。原因は諸説ありますが、鎌倉公方成氏と関東管領上杉氏の対立にからみ、上杉禅秀の外孫たる胤直が上杉方につき、重臣たちが成氏方と別れたことが背景にあるようです。

胤直は三七歳、「千葉家世紀」という本では「性粗暴にして群下に礼なく、為に人心を失う」とあり、康胤については「「才文武を兼ね威厳ありて諸人に重んぜらる」。また、「千葉実録」なる本では康胤を「主君の家を滅ぼし奉りて栄華を極むること天罰恐るべしとて世人挙ってにくみけり」とあります。著者の立場の相違、書かれた時にもよるのでしょう。

胤直の甥は武蔵に走り、上杉の重臣、大田道灌を頼り、武蔵千葉家（板橋区赤塚に館跡があります。）の祖となり、この系統は上杉方として働きました。一方、康胤の子孫は古河公方家に忠実でした。

しかし、この康胤も一族の東常縁（とうのつねより）という武将に殺され（一四五六）、康胤の子の胤持、次いで輔胤というものが千葉介の名を継ぎました。輔胤は猪鼻城には戻らず、佐倉の、通称将門山という所に新城を築いて千葉家の本拠としました。彼は岩橋殿と呼ばれていたそうで、岩橋というのは将門山の隣ですから、自分の根拠地に築城したのでしょう。以後の千葉氏は「将門山時代」と呼ばれています。将門山時代は天正十八年（一五九〇）、小田原落城により千葉氏が滅亡するまで約百三十年間続きます。

八

ここで、康胤を破った東常縁の話をします。

常胤の六男胤頼は銚子の近くの東庄（とうのしょう）という所を所領とし、東（とう）氏を名乗りました。その孫が承久の乱で功をたて、美濃国郡上郡に領地を得ました。以来この系統は、下総の東庄と美濃の郡上（ぐじょう）の二か所を行き来していたようです。代々歌道に堪能でした。

常縁という人も有名な歌人でありました。古今集の伝授をする資格を二条家から得て、有名な連歌師・宗祇などに古今集を教えたということです。郡上八幡に行きますと、宗祇水という井戸か泉があるそうです。この傍らに宗祇が庵をむすび、城主である常縁のもとへ通って古今集を習ったと伝えられています。

常縁は文武両道に優れ、千葉家に内紛が起きた時に、将軍足利義政の命を受けて千葉へくだり、康胤を市原の八幡宿というところで破って殺しています。しかし、美濃国の守護代に所領を奪われ、郡上に帰ります。（守護代齋藤某は歌道の誼で所領を返還し美談と言われました。）おかげで千葉氏は康胤の子胤持が千葉介となり、本家を継ぐのです。

美濃の東氏も常縁の孫の代に、一族の遠藤盛数というものに乗っ取られ遠藤氏は元禄のころ無嗣断絶するまで郡上八幡二万七千石の大名でした。その後一族が近江国で一万石で名跡をつぎ、明治になって東氏の姓に復したそうです。

九

将門山時代という千葉氏の新時代を開いた、輔胤のお話をしましょう。

輔胤は康胤の庶子でした。嫡子の胤持が一年ほどで早逝したので千葉介となりました。彼が将門山に築いた城を、本佐倉城といいます。印旛沼の南岸にあり現在は土塁と空堀のみ残っています。沼には港を設け、舟運盛んであったようです。また沼の周辺には臼井城、師戸城など幾つもの支城を築きました。

関東における古河公方と上杉方の争いでは公方方として働き、本佐倉城は古河と舟

運でも連絡があったようです。

古河公方が古河を逃れ、佐倉に半年ほど滞在していたことがあります。文明三年（一四七一）五月、上杉方に古河を攻められ、翌月落城、成氏は脱出して千葉輔胤を頼りました。翌四年二月、結城氏広等が古河を奪回し、成氏は帰りました。

その半年間、成氏はどこにいたのでしょうか？

確証がなく、四つの説があります。多古町史は同町内の「御所台」を、千葉県史は佐倉市内の「小篠塚城」を、佐倉市史は同市内の「寺崎城」を、千野原靖方氏は「本佐倉城」をそれぞれ主張しています。御所台は名前に由来するものですが、あまりに遠すぎます。県史は「千学集」という文書に「公方様ご発向ありて篠塚に御旗たたせられしとき」とあるにより、市史は当時まだ本佐倉城は未完成で輔胤は寺崎城にいた、という解釈によります。

私は、第四の説、「本佐倉城」説です。

本佐倉城内に、今も地元の人が「セッテイ山」と呼ぶ一郭があります。堀と土塁に囲まれ、外からは窺いにくい郭です。城中で最も警戒厳重な一郭で「おそらく、人質でも置いたのでは」と言います。（酒々井町教委・学芸員）しかし、セッテイは接待のな

まりでありましょう。公方滞在は半年間の事ですから、後には人質も置いたかもしれませんが、人質を接待する、とは言いません。この城は天正十八年、小田原北条と共に千葉家が滅亡して家康関東入部の後、その子や譜代大名が封ぜられました。土井利勝が家康の命で鹿島台上（現在、歴博が建っている場所）に新城を築き、元和二年（一六一六）頃移転したので廃城になりました。従って、発掘調査しても殆ど遺品は出ないのですが、セッテイ山からは碁石、火箸、茶壺などが出土したそうです。

余談ですが、貴人をもてなす事を古くから「接待」すると言いました。お能で「攝待」という曲があります。平泉へ落ち延びる山伏姿の義経一行を、佐藤継信・忠信兄弟の母親が、一晩泊めてもてなし、戦の模様を聞いて涙する、哀切に満ちた物語です。老母の感情表現が難しく、稽古では重き習いものの一つとされています。

いずれにしても、輔胤という人はかなりの器量人であったようです。七十余歳まで生きましたが、五十歳のころには子の孝胤（のりたね）に家督を譲りました。その後も古河公方と幕府の和睦に尽力したといわれます。

＋

将門山時代の千葉氏は孝胤以下六代の間九人の千葉介がいましたが、いずれもパッ

としません。とみに家勢衰え、利胤が北条氏康の妹を室とし、その子親胤が氏康の娘を室としたころは、完全に小田原北条氏の配下にありました。北条氏は関東の名家と姻戚関係を結ぶことによって、短期間に関東八州を支配下に収めたのです。城内で二人も当主が家臣によって斬殺される等、家政も乱れ、北条の家臣団が進駐していたようです。

最後の千葉介は重胤といいました。十歳で家督を継ぎました。母は北条氏ではなかったのですが、北条氏政は彼を小田原に留め、天正十七年ころ、五男直重を本佐倉城へ送り込んだといいます。しかし、翌十八年には、秀吉の小田原城攻めが始まり、千葉衆も防衛にあたりましたが、やがてその落城とともに滅亡しました。重胤は十五歳、家康により命は助けられましたが、その後寛永十年、江戸の陋巷で嗣子なく死んだといいます。墓は千葉氏の菩提寺、佐倉市海隣寺にあります。

関八州は家康に与えられ、関東各地の旧来の豪族の多くはその家来になるか、帰農しました。千葉家は何故か徳川家には従いませんでした。重臣は庄屋クラスとして土着しました。椎名、木内、粟飯原、志津等、みな現在も地域に根付いています。（佐倉宗五郎という人は、千葉氏の旧臣、木内家の出身で庄屋として四代将軍家綱に直訴、

妻子もろとも刑死しました。藩の悪政による百姓の難儀を救うためと言いますが、堀田家の中では、「藩の悪政を訴え出たのではなく、千葉氏再興を直訴したのだ」と言い伝えてきたそうです。）

最後は現代のお話です。

千葉商工会議所の会頭を勤められた千葉滋胤氏は、私の高校の先輩で、一族だそうです。千葉銀行の元副頭取。千葉会という会を催し、旧臣の末裔が集っているようです。どの系譜に属されるのかお伺いしたかったのですが、機会を逸しました。

千葉氏は代々、妙見様（北斗七星）を信仰し、紋どころは九曜星。各地に妙見神社や星神社が残っています。九曜星の紋は千葉銀行も行章としています。

（２０１０・７，２０１６・５改稿）

松虫寺伝説

今年七月十七日、北総鉄道が東へ延び成田空港に達する。この新線の、印旛沼を渡る橋の北側に、鄙びた古刹がある。

摩尼珠山医王院松虫寺という。天平十七年（七四五）行基の開創で本尊は木造薬師瑠璃光如来坐像、平安後期の作。重要文化財に指定されている。

この松虫寺に一つの伝説がある。

昔、聖武天皇の皇女松虫姫が重病にかかり、夢の中で「下総国印旛郡萩原郷の薬師仏に詣でれば治る」とお告げがあった。そこで奈良の都から遥々と下り、印旛沼を渡り参詣したところ快癒し、その後都へ帰ったというもの。

私は、天平という遠い昔、奈良から若い皇女が旅をして来るなど考え難い、よくある効能宣伝の一種だろうと思っていた。

しかし、先頃「房総と古代王権」（〇九・三、高志書院刊）の川尻秋生氏の所説を読

んで、これはありうる話だと考えるようになった。
氏は「古代房総の国造と在地」という論文の中で、正倉院文書「駿河国正税帳」に言及している。
正税帳は税の出納記録だが、天平十年駿河国正税帳に
下総国印波郡采女丈部直広成　上一口、従二口、
六部別食、為単壱拾捌日、上十六口、従十弐口
という記事がある。采女一行の通行にかかった経費を記したものだが、川尻氏は「采女には、郡領の子女が任じられることになっていた。但し、采女の交通に正税が用いられることは珍しく、特別な恩典に預かった可能性があると考えられることから、この女性は、時の聖武天皇と関係があったのではないかとの推測もある。」と書いている。
世阿弥の能に「采女」という曲がある。
大和物語に題材をとったもので、奈良時代、天皇の寵愛を受けた采女がその寵を失ったことを嘆き、猿沢池に身を投げて死ぬ。
後世、池を訪れた僧の前にその幽霊が現れ在りし日を物語るという筋書きで「序の

舞」という優艶な舞を伴う佳曲で、わりとよく演じられる。

天皇の名は出て来ないが、奈良時代は元明帝から光仁帝まで七代、うち女帝が四代、男の淳仁帝は早く廃され、光仁帝は老年の即位だから、この話の主人公は聖武天皇以外にない。

正倉院文書に登場する印旛郡出身の采女は、聖武天皇と特別な関係があったのでは、とする川尻氏の推測は「大和物語」やこのお能の話からしても、根拠のあるものと言えよう。

また、印波国造丈部直が、大和王権と極めて近い関係を持っていたことは様々な研究者によって明らかにされている。その娘が宮廷の女官たる采女にあがり、天皇の寵愛を得て、子をもうけたことは大いに考えられる。その子が重病にかかったとき、采女は子をつれて、故郷の印旛沼のほとりに帰ろうと思ったのではなかろうか。

松虫姫の生没年は明らかでないが、天平十年ころは十五、六歳と推定されている。

続日本紀第十二巻天平九年の記述末尾に

「是の年の春、疫瘡(えきそう)大に発(おこ)る。初め筑紫より来りて、夏を経て秋に渉(わた)る。公卿以下天下百姓相継ぎて死ぬること、あげてかぞふべからず。近き代よりこの

かたこれ有らず。」

とある。疫病が流行したのである。

正史によれば聖武天皇の子は光明皇后との間に安倍内親王（後に孝謙天皇）、基親王、県犬養広刀自との間に井上内親王、安積親王、不破内親王の五人。

松虫姫は、不破内親王の幼名だという。県犬養広刀自がいかなる人か不明だが恐らく印旛出身の采女ではあるまい。しかし、不破内親王が本当は、井上内親王らと異腹ということも有りうるのではないか。

いずれにしても光明子は藤原氏の出身、その子安倍内親王が世継ぎとなり、安積親王は皇太子になれず、十七歳で逝去した。井上内親王は光仁天皇の妃となったが宝亀六年（七七五）暗殺されたとされ、不破内親王も塩焼王妃となったが、塩焼王は恵美押勝に連座して殺され、自身も流罪になる等、この姉弟は薄幸の生涯を送っている。

（２０１０・７）

再び「総の国」について

N君

以前、私は上総・下総という国名のもと、「総の国」について、語源の話を書いたのをご記憶でしょう・か。ある地名研究家が、総の国は「塞がる」のふさである、と書いたのに反論し、植物繊維を束ねたふさで、弥生から律令国家にかけて房総半島が、麻や絹の繊維産業が盛んであったことに起因するということを主張しました。（史遊会通信一五四号）文献にも、斎部広成が、大同二年（八〇七）に氏族の来歴を明らかにする目的で書いた「古語拾遺に」の中で、

「阿波の斎部を分ち東の土に率往きて、麻・穀を殖う。好き麻生ふる所なり。故、総国と謂ふ。（古語に麻を総と謂ふ。今、上総・下総の二国と為す。）

と明記されていたため長く通説でありました。しかし、麻を総とは言はないというので最近様々な説が出て、「塞」が元だという珍説まで出るようになったのです。

近年、考古学が進歩し、出土品の研究も進みました。木簡や墨書土器の解読がなさ

れ、従来の説を覆すような発表もされるようになりました。総の国もその一つです。

藤原京跡から出土した木簡に「上捄国」という文字が判読されました。「捄」は和訓で「ふさ」といい、匍萄や山椒の実などが房状に垂れ下がっている様を表すということです。そこで「ふさのくに」とは半島が海に突き出た、その形態から来た名前で、伊豆の国が、半島が海に「出ず」から来たのと同例である、というものです。古代日本史が専門で木簡や墨書土器研究の第一人者である国立歴史民俗博物館の平川南館長がこの説で、昨年十二月、同館でご講演があり、私も改めてお説を拝聴しました。

県史にも書かれ、通説化しつつあります。しかし、私は以下の理由で、やはり従来説を採りたいと思うのです。

一、　六～八世紀ごろ、房総の地が半島であるという認識は、一般的には無かった。当時も海上交通は想像以上に盛んであり、半島と認識していた人もいたではあろうが、それをもって国名とするには一殻民衆の常識化していなければならず、地図や、まして人工衛星の無い時代にありえない。伊豆半島くらいなら、住民全体の常識といえなくもない。

二、　下総は、内陸部の古河・結城まで含み、海に突き出た国とするのは無理がある。

三、　「捄」の字が書かれているのは二つの木簡のみで、その他には土器であれ、紙

であれ、発見されていない。もし、「捄国」が本来であるとするならば、もっと多くの例があってしかるべきである。広成が書いたのは国名定まって間もない大同頃であるから、信用してもいいのではないか。

四、当時、一般人がどのくらい「捄」の文字の字義を理解していたか疑わしい。果物のふさは「房」であり、私は安房国の国名こそ海に突き出た半島の形からきていると思う。（安は美称接頭語）

五、木簡に書く時、書き難いのと、判読しやすいように和訓が同じならば画数の少ない文字を使ったのではないか。秀吉の手紙など見ると、そんな字が溢れている。

六、総の国が都へ送る「調」は、麻が断然多く、全国でも抜きん出ていた。上総の望陀郡で織った「望陀布」は当時の最高級品として中国へ送られたり、大嘗会の如き重要儀式には指定されて使われた。繊維の国というにふさわしい。

七、広成が「古語に麻を総という」と書いたのは誤りとしても、麻ほどふさふさしている植物はなく、「麻の如く乱れ」というくらいである。

長くなりました。春立つとはいえ余寒厳しき折、風邪などひかれぬよう。ではまた。

（２０１１・２）

「チャンコロが来たど」

大正の中頃、片田舎の農家。昼下がりの庭先で数人の婆さん達が茶飲み話をしていた。鶏が何かついばみ、男の子が地面に絵を描いて遊んでいる。そこへ一人の若い中国人の行商人が商いにやってきた。

（当時の農家は衣食住の殆ど、味噌・醤油に至るまで自給自足しており、魚肉類や小間物などは行商人から買うことが多かった。そして、行商人は、中国人が結構いたそうである。華僑は当時、大商人ばかりとは限らなかった。）

一人の婆さんが周囲に、「オラ、チャンコロが来たど」と言った。支那人の行商人が来ましたよ、と皆に声をかけたのである。

途端にその行商人が血相変えて

「ナニ。もいぺん言てみろ、チャンコロとは何だ。オレタチも人間だ。」

その剣幕の凄まじさに、男の子は飛び上がって母親の後ろにかくれた。

右の話は、亡父が何度か私に語った話で、そこに居た男の子が私の父親である。

大きな農家は商業や商人を軽んじる風もあったが大正のころ既に中国、また中国人に対する蔑視の風潮が日本中に蔓延していたこと、そして、それに対する中国人の反感がわかる。必然的に激しい反日運動へと進展したものであろう。欧米における日本人蔑視の裏返しである。

何故、他のアジア人に対する蔑視が起きたのか。日本の片田舎にまで拡がったか。

幕末に阿片戦争の結果を聞いた日本人は、それまで師と仰いでいた国がイギリスに敗北したことに驚愕した。

維新後、列強の侵略を防ぎ植民地化されることを免れるには「脱亜入欧」しかないと、攘夷を叫んできた志士達は豹変する。

植民地にされるより、する方になれ。明治十八年三月十六日の時事新報は「脱亜入欧論」を掲げた。著者は定かではないが時事新報は福沢諭吉の創刊であり、彼の主張であったことは間違いなかろう。

私は、昭和二十年の敗戦の主因は国民の間に蔓延していた驕慢・思い上がりにある、と考えている。「脱亜入欧論」がこうした思い上がりを形成する上で果たした役割は決して小さくはない。

勝海舟は別の考えを持っていた。
彼は、アジア諸国が結束して西洋列強の侵略、植民地化に対抗すべきであると考えていた。中国に対しても、然るべき敬意を失わなかった。「海舟座談」などを読むとそれがよく解る。日清戦争にも彼は反対であったという。諭吉の論に比べ卓見というべきであろう。しかし、彼の説は採られなかった。そして、北清事変、日清戦争で常に敗走した中国人の姿は更に中国人蔑視の風潮をもたらした。農村における、華僑の姿もこれを助長したかも知れない。
そして戦争が無ければ尊敬されない職業軍人は自らの保身・栄耀のために、この風潮に乗って対外戦争へと突き進んだ。昭和に入ってはもはや誰も第二次大戦への日本の参加を止められなかった、と思う。罪は一部の人間というより、国民全体にある。
山本七平に「空気の研究」という論稿がある（昭和五十七年四月）。日本人は戦前のみならず、戦後も世を覆う「空気」というものに抵抗できない、ということを様々な事例をあげて検証している。まさにこの「空気」が日本を滅ぼした。自由に自主的に物事を判断できない国民性が亡国の犯人だった。
だからといって当時の指導者が免責されるわけでは決してない。指導者たるもの、国民の驕慢を抑える為に命を投げ出す義務があった。時代の空気を変えるだけの見識

と勇気、死んでもこの空気を変えるのが我が務めと遇進することこそ、求められる。迎合はゆるされない。しかし、不幸にしてそうした指導者を昭和前半の日本は持ち合わせなかった。勝海舟もなく、日露戦争当時の児玉大将のような軍人も居なかった。政・官・軍いずれの分野も、所謂学校秀才の、二流の小物ばかりだった。

昨今の空気は「増税反対」「脱原発」らしい。そして政治家はこの「空気」にふれることを極度に恐れている。大衆迎合主義、ポピュリズムは戦前よりひどい。

福祉と財政、震災復興、いずれの為にも増税は必至であるにも拘わらず、次回選挙で自分が落ちる、自党が敗北する、と言って増税を言い出せない。エネルギー問題・二酸化炭素問題を考えれば原発は不可欠であるにも拘わらず空気が脱原発だからと国民を説得しようとはしない。

それぞれの前提となる、「無駄遣い停止」「腐敗・汚職撲滅」「安全性の確保」「災害補償」などをきちんと約束し具体策を示せば国民は納得するはずである。

我々はいつ、「殺されても信念を貫く」という指導者を持てるのだろうか。

（２０１２・５）

熊野三題　その一「神武東征」

平成二十三年七月、歴博友の会のツアーに参加して初めて熊野三山を巡る旅をした。歴博で民俗学の研究をされている松尾恒一先生がご案内役で、お教えいただくことが多かった。

七月十四日は、那智大社の例祭「那智の火祭」で、我々一行も間近く拝見した。この祭りは、山腹にある那智大社から、那智の滝の滝壷近くにある飛瀧神社まで、石段を駆け下ってきた十二基の神輿を、飛瀧神社側から十二本の大松明が出迎え、道を火で清めつつ先導する、という勇壮なものである。神輿の出座が十三時という真昼時。松明は一本が四〇キロもあり、二人がかりで抱え、火の粉を撒いて乱舞する。

神輿は朱と金で飾られた扇神輿である。縦長の長方形の板に扇を散らしたもので一基を十数人で担ぐ。

もともと、那智大社は瀧を祭神とし、飛瀧神社の場所にあったが、のちに現在地に移ったもので、いわば里帰りのようなもの。

双方で祝詞をあげ、還御まで約三時間、道筋は観光客であふれ、昼なお暗い杉木立の中まで立錐の余地もない。

真夏の日中に火祭というのは珍しい。縁起では神武天皇の東征軍と熊野の女王ニシキトベとの激戦を伝えたという。

この神輿を見ていて、古代の武人が携えた楯を連想した。通常神輿といえば屋根の上に鳳凰を飾った鳳輦型であるが、こちらは大きな板一枚なのである。そして、巨大な松明は暗い熊野の山中の道を、松明の明かりを頼りに吉野、大和をめざして北上する大勢の軍隊を彷彿とさせるものであった。

熊野三山の神紋は「八咫の烏」である。

記紀によれば神武天皇の大和入りにあたり、天照大神の命令で、その先導役を勤めたといい、三本足である。（八咫の烏が日本サッカー協会のマークになっているのはなぜだろう？サッカーといえば足、それが三本あるからであろうか。）牛王宝印の神符にはこの烏で文字を描いてある。

あれこれ考え合わせると、記紀の伝える神武東征の話は、事実であったと思える。勿論記紀の話が全て事実とは言えない。創作もあれば、誇張もあり、著者や権力者が

捻じ曲げた部分や故意に書かれなかった事もあろう。一方で長年炉辺で親から子へと語り伝えられてきた民族の歴史が、初めて文字に記されたことも疑えない。

神倭伊波礼毘古命（かむやまといわれひこ）が、兄、五瀬命と高千穂を出て、豊の国・備の国を経て浪速に至り、生駒方面から大和を攻めたが長脛彦に敗れる。太陽に向けて攻めたのが間違いと熊野へまわり、八咫烏の導きで熊野から吉野に入る。そして宇陀から大和に入り、初代天皇になる、というのが古事記である。（熊野の女王というのは日本書紀に「熊野の荒坂津亦の名は丹敷浦に至る。よりて丹敷戸畔（にしきとべ）という者を誅す。」とあるのがそれか）

推測するに九州から近畿へやってきた部族があり、恐らく何世代かかけて瀬戸内海を東上、途中岡山辺にも寄留しながら大阪湾に着いたであろう。大和の原住民に負けて、紀州半島を廻り、那智あたりから上陸し、山中を苦労しながら北上して、吉野を越え宇陀地方から大和盆地に侵人したであろう。ついには原住民を従え、新王権を築いたであろう。記紀の話は大勢の人の何世代もの話をひとりの話にしたものか。

那智大社の東隣に新宮がある。新宮から熊野川を遡ると、本宮に至る。これらは、その軍勢が一時的にもせよ本拠或いは宮殿をおいた場所ではなかろうか。そして本宮から吉野へ至る道は峻険な難路である。

吉野には吉野山金峯山寺や金峯神社がある。ここも修験道の中心で、熊野が天台系で本山派というのに対し、吉野は真言系で当山派という。

両派の修験者が競って修業に励んだのが本宮と金峯山を結ぶ「大峯奥駆」と呼ぶ道である。熊野から吉野へ行くのを「順峯修行」、吉野から熊野へ行くのを「逆峯修行」と言うそうである。順逆は、修験道の開祖であり、「大峯奥駆」を開いた役行者（六三四～七〇一）が熊野から吉野へ最初に行ったからそちらを順としたという。順のほうが険しいというから、東征軍は大変だったであろう。鬱蒼とした山中を長蛇の列をなし、松明をかざし、重い木の楯を携えて、あえぎつつ進む軍勢の姿が目に浮かぶ。

吉野からは、大和は近い。記紀の神話が数多く残るのは宇陀市、桜井市であるから、この軍勢は今の明日香村経由ではなく、宇陀市側から、桜井市を経て大和盆地へと下りてきたと思われる。書紀でいう「神日本磐余彦天皇」の磐余というのは桜井市駅の南をさす地名という。一帯に古墳の多い地域であるが、ここにある茶臼山古墳は最古に近いものといわれ、出土品の中に王者が持つ玉杖があったことで有名になった。

（２０１２・９）

熊野三題　その二「熊野神社」

私の住む国分寺市内に、所々に昔の鎌倉街道が残っている。かつて、畠山、比企、新田、足利等関東の諸侍が鎌倉へと馬を駆った道である。

その道沿いに恋が窪という所がある。畠山重忠に恋した遊女が身を投げた池があった所、という地名伝説がある。日立中央研究所のあたりである。

近くに熊野神社がある。創建年代は不明だが、新田義貞の戦乱時に兵火に焼かれたという記録があるから、鎌倉時代以前であることは間違いあるまい。この神社は六月三十日に「水無月払え」、別名「夏越しの払い」をやっている。拝殿前に茅の輪をしつらえ、参詣人は二回この輪をくぐり、「なごしの払い、する人は、千歳の命延ぶというなり」と唱える。宮司が祝詞をあげる。半年間の悪を払い、あと半年の無事を祈るという行事だが、今は珍しくなった。

この神社の境内に石碑が一つひっそりと建っている。和歌である。

朽ちはてぬ　名のみ残れる恋が窪
今はたとふも　契りならずや

万葉仮名を使って書かれており、読みにくいが、詠者は聖護院道興准后、筆者は有栖川宮幟仁（たかひと）親王とある。

聖護院道興椎后という人は、左大臣藤原房嗣の子で、聖護院の門跡をつとめた。文明十八年（一四八六）の六月から約十ケ月間、北陸から関東、駿河、甲斐、奥州松島まで旅をして、「廻国雑記」という紀行記を書いた。名所、旧跡を訪ねては和歌や漢詩を詠んでいる。その中に「恋が窪といへるところにて」と題して詠んだのが右の歌で、明治以降誰かがこの境内に石をたてたのであろう。有栖川宮は慶応の征東大総督、明治になって参謀総長など務めた熾仁親王の父。明治天皇の書道の師範を勤めた。碑文を揮毫した顛末は不詳である。

私は、道興という人は、単に東国名所めぐりに来たもの、と思っていたが、実はそうではなかった。彼が門跡として首座にあった聖護院は、熊野神社と深い関係のある

寺であった。
熊野信仰が盛んになったのは、平安時代に、宇多上皇が初めて御幸されて以来、と言われる。白河上皇の御幸に先達をつとめた園城寺の増譽という僧が洛東に聖護院を賜り、境内に熊野三所権現を勧請し、修験道の鎮守とした。
その後、後白河法皇の皇子、静慧法親王が第四代住職となって、宮門跡として勢力を張り、熊野三山検校を兼ねた。以来何人もの皇子が宮門跡を勤め、聖護院は修験道における中心的地位を確立していった。道興も皇子ではなかったが太皇太后、皇太后、皇后に次ぐ准三后という高い位に補せられ熊野三山及び新熊野検校、園城寺長吏に任じた。時の後土御門天皇や足利将軍の加持祈祷も勤めた。
この文明十八年という年は応仁の乱後九年、都はまだ焼け野原であった頃、関東は太田道灌が主君上杉定正に殺された年でもある。その東国巡行にどんな政治的意図があったかは記録にないが、熊野三山検校として各地の熊野神社を巡察して歩いたことは確かである。恋ケ窪の熊野神社もその道程であったのであろう。そして遊女の故事を聞き感興を催して詠んだとみられる。

ところで、聖護院は仏教の寺であり、熊野神社は神道である。熊野三山は熊野権現とも言われる如く、神であると同時に仏でもある。本宮の祭神は家津美御子大神、本地仏は阿弥陀如来、新宮の祭神速玉之男神、本地仏は薬師如来、那智大社の祭神伊邪那美大神、本地仏は千手観音、ということになっている。従って修験道、山伏というのは祭神、本地仏の双方に仕えている。

この神仏習合、或いは本地垂迹という理論は、いつ頃、そして何人が唱えだしたものであろうか。

仏教を積極的に導入したのは蘇我一族や聖徳太子で、六世紀半ばと言われる。また、それは文献上のことでもっと早くから伝わっていたという説もある。いずれにしても伝来後百年も経ないで、両者の融合が図られていたと私は推定している。そして共通基盤が両者間にあったにしろ、中心となって融合を推進したのは藤原氏ではなかろうか。藤原氏は元来、大和王権にあっては祭祀を司る家であった。神道の元締といっていい。であればこそ、習合説を言い出しても反対を受けない立場であった。

平城京建都は七百十年、仏教を国是として政治は進められた。時の権力者藤原一族は、氏寺として興福寺、氏神として春日大社を奈良に造営した。

仏教上の諸菩薩、如来たちはみな日本の固有の神様となって日本に天下ってきたという説は、藤原氏に最も都合が良く、政治的にも必要だったのではなかろうか。

明治となり、藤原氏が名実共に権力を失った時、「廃仏毀釈」運動が起きたのは象徴的である。

（２０１２・１１）

熊野三題　その三「起請文」

「正尊」というお能がある。

土佐坊正尊という男が頼朝の命を受け、秘かに義経を暗殺するのため上洛するが、弁慶に義経の前に引き立てられ、「熊野参詣のための上洛」と偽り、起請文を書く。

「敬って白す起請文の事。上は梵天帝釈。四大天王閻魔法王五道の冥官泰山府君。下界の地にハ伊勢。天照大神を始め奉り伊豆箱根。富士浅間。熊野三所。金峰山。王城の鎮守。稲荷祇園賀茂貴船。八幡三所。松の尾平野。総じて日本国の……」

謡いの習い物、聞かせどころである。

起請文や誓紙というのは、天地神明に誓って嘘偽りではない、というものであるから、寺社の発行する神符が用紙として使われた。東大寺、薬師寺、熊野権現などの神

符の裏面に書いた。

此の時、正尊が何に書いたかは明らかではないが、熊野参詣というから、熊野大社の牛王宝印かもしれない。

直木三十五著「大坂落城」という小説がある。関ケ原前夜、諸大名懐柔のため、家康の謀臣本多正信が伏見城内で誓紙を書いている場面。

本多佐渡守正信は、何も聞えないかのやうに、小さい部屋の中に、机を置いて、物を　書いてゐた。

一筆啓上候、今度以御肝煎内府罷移之
由満足に被存候向後何而彌々可被仰談
議御尤に候、（後略）

「熊野々々」。

と、云って左手を出すと、一人の家来が「はっ」と、答えて、手文庫から、朱の三羽鳥の印を捺した熊野権現の誓紙をもってきた。正信は、それへ、神文を認めて、

慶長四己亥年閏三月

本多佐渡守正信

堀尾帯刀殿

筆を置いて、「これを、帯刀の邸へ持参いたせ」

このシーンから二つのことがわかる。

当時は起請文といえば熊野権現の牛王宝印が一般的に使われ、「熊野」がその代名詞になっていたことが一つ。また誓紙といっても戦国乱世の世の中、乱発され、出した方も破っても平気のものとなっていたことが「手文庫」の中に用紙が大量にある様子から窺える。

何故、熊野権現の牛王宝印が誓紙に最も多く使われるようになったのか。いつ頃からそうなったのか。

熊野には、熊野比丘尼という人たちがいて全国を廻って、「熊野観心十界曼荼羅絵図」という仏画の絵解きをして歩いたそうである。

比丘尼たちは諸国を巡り歩き、牛王宝印の神符やお守りを売って歩いた。ささらを

摺り歌を唄って地獄・極楽を説き、熊野について語る強力なセールスウーマン。即ち、熊野のお札は商品として、それも比丘尼という販売力ある行商人によって全国にばらまかれたであろうことが想像される。彼女らは江戸時代ころになると、紅白粉をつけ春をひさぐ者も現れたという。

また、那智の滝の神秘性から発祥した熊野の山岳信仰は、密教の影響をうけ、修験道として、熊野山伏集団を生んだ。山伏は、山岳地帯を隊を組んで渡り歩く。

屈強な体力が無ければ修行は覚束ない。全国の山野を跋渉し、これも布教活動にも余念なかったであろう。曼荼羅絵解きと同様、商品として神符の行商人の役割を勤めたであろう。現在、熊野神社は全国に三千杜以上あるというが、これも比丘尼や山伏の活動の結果とも言える。

山伏は勧進帳の「山伏問答」にもある如く刀を帯し、足ごしらえも厳重な武装集団であった。宗教者であると同時に戦士として頼られる存在でもあった。平安以降、後白河法皇三＋三回、後鳥羽上皇二十八回という度重なる熊野御幸は、その武力を味方につける為の政治的なにおいがする。承久の変において熊野はあげて官軍についた。そのため、別当は北條氏に処分されている。つまり、武士階級と山伏は近い関係にあ

った。そして起請文とか、誓紙を最も利用したのは武士階級であり、戦国乱世の世になって、一層その需要は高まった。ここにも他の寺社の神符にも増して、熊野牛王宝印が誓紙の代名詞になっていった理由がある。

一方で、戦国時代は、権謀術数只ならぬ時代であって、合従連衡はしばしば、昨日結ばれた同盟も今日は破棄されるような日々であった。起請文は、用紙が商品として大量販売されると共に、その価値を下げていった。本多佐渡守は事務的に誓紙を相手方に送りつけており、直木の小説は、いかにもという雰囲気をもっている。

（２０１３・１）

多賀城碑の「蝦夷国界」はどこか？　（講演要旨）

多賀城碑とよばれる石碑に刻まれた、「蝦夷国界」とはどこか、という話をします。通説では、岩手・宮城両県の県境付近とされています。しかし、私は宮城・福島両県の県境だと考えています。この説をとる人は、私の知る限りでは古田武彦氏くらいです。私なりにその理由を、独断・偏見・管見を恐れずにお話したいと思います。

一

まず、多賀城の話です。

仙台市の北東約十二キロ、塩釜港の裏山のような所に、大和朝廷が築いた陸奥国の国府が、多賀城です。石碑の文言によれば、神亀元年（七二四）大野東人が創建しました。

文献では天平九年（七二七）、続日本紀（以下、続紀と略す）に「多賀柵」、宝亀十一年（七八〇）「多賀城」の記述があります。

その存在は早くから知られていましたが、本格的な発掘調査は昭和三十年代以降で、

その後も新しい発見が多くなされています。

少し横道にそれますが、多賀城は東の大宰府だったという説があります。以下、発掘調査に深くかかわった、前国立歴史民俗博物館館長平川南教授の説のご紹介です。

多賀城の近くに「多賀城廃寺」という寺の址があり、寺号不明でした。昭和五十八年、国司館あとから、「観音寺」と書いた墨書土器が発見されました。九州の大宰府に、観音寺があります。この廃寺も観音寺だったのではないか。これが東の大宰府だったのではと類推される理由のひとつです。また、この頃の城柵が地名で呼ばれたのに、この土地は多賀といいません。常陸国多賀郡の多賀ではないかと言われてきました。多賀郡からの移住者の居た所ではないかと。しかし、多賀郡は「高国造」の高で、茨城県の高地の意が、元明天皇の好字二字を地名とせよという勅で付けられた郡名、とされます。平川教授は大宰府が中国古代の官名であるように、多賀も中国に典拠を求むべきとされ、中国の古鏡に

四夷服　多賀国家人民息　胡虜殄滅　天下復

（四夷が征服され、多く国家に賀あり。人民安んず。胡虜は滅び、天下元通り）

とあるのから取ったのではないかと言われます。対蝦夷最前線にふさわしい銘です。

また、多賀城所在の「宮城郡」ですが、八世紀前半の窯跡から出土した須恵器に書かれており、多賀城創建時には建郡されていた、従って、多賀城イコール「遠の朝廷」即ち天皇の居るところ、ということになるのではないかというわけです。

さて、考古学上の発掘調査の結果、創建は七二〇年代前半、その後七六〇年頃、七八〇年、八六九年と三回建て替えられていることが判明しました。三期の七八〇年は伊治公呰麻呂（これはりのきみあざまろ）が焼き払ったため、四期の八六九年は貞観大地震で倒壊したため、と明瞭です。

二期目の七六〇年頃、というのが、まさに石碑を建てた藤原朝獦（あさかり）の事業ではと想像されます。石碑に刻まれた天平宝字六年はまさに七六〇年に当たります。

二

次に多賀城碑の話に移ります。多胡郡の碑、那須国造碑と並んで三大古碑と言われます。

多賀城へ行ってみますと、南門の前に小さな鞘堂に覆われて、高さ二メートル幅一メートルほどの石碑が建っています。彫られた文字は懐中電灯で照らさないと読めま

せんが次の通りです。まず上部の真ん中に大きく「西」と一字が書かれています。その下部に

西

多賀城　去京一千五百里
去蝦夷国界一百廿里
去常陸国界四百十二里
去下野国界二百七十四里
去靺鞨国界三千里
此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守将
軍従四位上勲四等大野朝臣東人之所置
也天平寶字六年歳次壬寅参議東海東山
節度使従四位上仁部省卿兼按察使鎮守
将軍藤原恵美朝臣朝獦修造也
天平寶字六年十二月一日

と刻まれています。

江戸時代の万治・寛文の頃、出土状況は不明ですが、この石が陸奥国宮城郡で発見

されました。元禄年間、水戸のご老公・光圀が、領主伊達綱村に親書を送り、大事なものだから、鞘堂を作り保護したほうが良いと勧めたという話が残っています。彼は修史に注力し自領から出土した那須国造碑の保存にも注力しています。価値が分っていたのでしょう。

平安時代、寂蓮法師の歌に

みちのおく　壷のいしぶみ有ときく　いずれか恋のさかひ成らん

という歌があり、他にも慈円、西行なども「壷のいしぶみ」を詠んだ歌があります。

壷の石とは、陸奥国の境界か中心かに立っている石、とされ、歌枕となっていたようです。発見された当時の人は、この石碑を「壷のいしぶみ」と思い込んだらしく、芭蕉は出土から約三十年後に「奥の細道」の中でこの石を「壷のいしぶみ」と呼んでいます。

しかし、文面からすれば、多賀城修復記念碑であることは明らかです。

発掘のときから、この石が本当に奈良時代のものか否か、真贋論争がありましたが、明治の歴史学者や書家が偽物であると断定したため、戦後まで誰もまともに研究するものがありませんでした。しかし、多賀城の発掘調査が進むにつれ、本物説が高まり、

現在はそれが通説となり、国の重要文化財に指定されています。

標題に掲げたテーマ、「蝦夷国界はどこか」というのは、この石に彫られたように多賀城から一百廿里の所にあった「蝦夷国界」、それは現在のどこか、という話です。

一百廿里という距離は、奈良時代は「唐尺」が使われていましたから、現在の尺度に直すと約六〇キロです。これは歩いても二日くらいの行程ですから、都や靺鞨とは違ってこの碑を見る者は誰でも「ああ、あそこだな」と理解出来たはずの距離です。極めて具体的なところを差しています。碑の前に立ってこれを読んだ人達が、どこを思い浮かべたでしょう？

冒頭に申し上げたように、通説では岩手県と宮城県の境近辺、としています。

しかし、私は以下のような理由から、宮城県と福島県の境、伊達郡国見町と考えます。

① 碑面上部に大書された「西」は、その下の境界は西に向かって測る事を指示する。

② 「蝦夷国」とは律令国家の支配圏とは無関係である。

③ 国造制度が及ばぬ地域に住む人を蝦夷と呼んだ。国造の北限は宮城県南部。

④ 平泉藤原氏は蝦夷であり、彼らは、国見町を以て自領の防衛ラインとした。

⑤　国見という地名と、国境にふさわしい地形。

以下、各項ごとに説明します。

三

碑に書かれてある内容は幾つも不明な点があります。「多賀城碑　その謎を解く」（安倍辰夫・平川南編　雄山閣出版）という本がありま す。何人かの専門家がそれらの謎に答えようとされています。

中でも一見して不思議なのは、大書された「西」の一文字でしょう。石碑は数多くありますが、西に限らず、東でも南でも、方位をこのように大きく、しかも頭部に刻まれた例は他には見られないそうです。平川教授は右の本の第七章「碑文の検討」を執筆されて「里程」・「蝦夷国と靺鞨国」・「東人と朝獦の官位」・「その他」と四項目に分けて先人の説も含めて詳細に論じておられます。「西」の問題は「その他」の中で次のように述べられています。

碑額の西については、従来、専らその意味を類推することにとどまっている。例えば、「西は京都を尊崇するの意なり」《山田聯「多賀城碑面考」》、「西と書きたること、此石西に向きたればいふと、方角をしらすべきためなり」（角懸俊郷「府

土万葉集」巻四、宮城郡）など種々の憶測が述べられている。この西の意味を断定する決定的根拠が見当たらない現状では、これ以上の憶測を加えることを避けたい。ただ、古代において、碑額はわが国では多賀城のみであるが、中国では古碑のつねである。しかし、碑額に「西」と記された碑は管見の限り、例を知らないことを記しておく。

根拠がないから、謎は謎のまま、というわけです。

しかし、古田武彦氏は昭和六一年の講演で次のように憶測しています。

「西に向いているから西と書くんだったら、どの石碑だって、東とか北とか書いてあってよさそうなものですが、他には全くないです。（中略）私が思いますのは、これだけ大きく西と書くというのは、読者に、下の文章を読む場合【西】を忘れてくれるなという注意を喚起した書き方だと思うのです。それともう一つ。〇〇里、〇〇里と書いてあります。倭人伝から古代史に入った私にとって、特に印象的なんですが、これには必ず方角がつくんです。」（後略）

この見解はなぜか現在まで全く無視されているようですが私は納得性あるように思います。古田説について平川教授も全く触れていません。専門外の人間の発言は取り

上げない、という雰囲気が感ぜられます。
古田武彦氏は史学界では異端とされ、私も賛同しかねる説もありますが、本件については最も合理的な説であると思います。理系の歴史学者として著名な新井宏博士は「確かに、ベクトル表示でなければ、場所は特定できませんね。」と私に言われました。
多賀城から西に蝦夷国界を求める場合、岩手県側に求めるでしょうか。福島県側にもとめるでしょうか。どちらも真西というわけではありませんが、岩手県は北と言ってよく、福島県は南西でしょう。西に括ってよい方角です。下野・常陸の方角とも矛盾しません。

四

次に、この石碑に書かれた「国」の概念はどういうものか？です。
京は平城京、即ち奈良の都のことで何ら疑問の余地はありません。「下野国」も「常陸国」も、それぞれ首長、つまり、守、介（次官）掾などが任命され、首府である国府が定められた版図を差し、国境線も明確で問題ありません。蝦夷国と靺鞨国というのが明らかに異質な概念です。靺鞨国は大陸の沿海州にあった国で外国ですが、当時

は近代国家とは見方が違って、外国という認識はあまりなかったから、ここに登場したのでしょう。問題は蝦夷国をどう定義づけるかです。

平川教授も　先にあげた「多賀城碑その謎を解く」という本のなかで詳細に論じておられます。ただし、靺鞨国は七ページ、蝦夷国は二ページと蝦夷国についてはむしろ簡単です。

教授は江戸時代はこの蝦夷国界を桃生郡のあたりとされていた、と述べ、

「むしろ問題となるのは蝦夷国界という認識である。つまり、律令国家の支配に服しない民を蝦夷と呼称しながらも、そこに蝦夷国という政治認識を持ちえたかどうかという問題である。

当時の『続日本紀』などの文献からは、蝦夷国の把握の仕方をはっきりとうかがうことはできない。」

とされています。そして、日本書紀の崇峻天皇二年七月と斉明天皇五年三月のくだりに「蝦夷国」という表現があることにふれて、

「斉明紀の記載などはまさに八～九世紀にかけての蝦夷征討と対比されるべきものだけに、その記事に明確な蝦夷国の表現を確認できるとするならば、碑の蝦

夷国界も当時の律令国家側の認識として、不自然なものとはいえないであろう。むしろ、律令国家の版図を示す意味でも、ことさらに蝦夷国と規定するところに意義があるのではないだろうか」。

と書かれています。

要するに、通説は「律令国家の版図をしめす意味で、未だ従わざる地域をあえて蝦夷国と規定した。」として、今の岩手県以北を蝦夷国としています。

私は、蝦夷国は「大和政権から蝦夷と呼ばれた人たちが主に住んでいたところを、朝獦（あさかり）は蝦夷国と言った。」と理解したいのです。律令国家の版図を示したものではない、と。

五

蝦夷とはなにか。字面からすれば東方の化外の人への蔑称であろうと思います。ただ、その特性は剽悍で強い、と理解され、蘇我蝦夷の場合は、強さにあやかりたいと、名前として用いたのでしょう。

蝦夷の概念について、国造制と結び付けて説明される説が多いようです。

今泉隆雄東北大教授は

「大化改新の段階で倭政権が国造制の施行された外側の住民を蝦夷として把握していた」（「宮城県の歴史」山川出版社）

熊谷公男東北学院大教授は、

「国造制は六世紀前半から半ばの時期にかけて成立したとみられるが、これに右の綾糟の服属儀礼の記事を考えあわせると、国造制の成立にともなって蝦夷観念が形成されたとみるのが、もっとも可能性の高い想定のように思われる」（「蝦夷の地と古代国家」山川出版社）

と書いています。お二人とも国造制を意識しています。

そこで国造制ですが、「先代旧事本紀」巻十によれば、最も北の国造は伊具、亘の二つ、いずれも宮城県の最南部です。

菅野静観氏（中尊寺仏教文化研究所）は

「伊具・亘理の両地域こそ遡れば国造制の北限地帯。つまり、伊具・亘理の両地域は蝦夷地の南限にして境界の要地にも相当した。」（「古代蝦夷と古代国家」高志書院）

菅野氏のいう蝦夷地の南限が即ち、朝獦のいう蝦夷国界というのが私の見解です。

井上通泰という人が

「鎮守将軍の職はただ辺境を戍るのみにあらで、漸次蝦夷を駆逐するにあれば、征討功を奏せば蝦夷国家は次第に加遠せむ。之を常陸下野の国界の如く固定のものとせるは何の意なるかを知らず。」（上代歴史地理新考）

と述べたそうで、加遠とは、段々に北上した、という意味でしょう。現在の通説もこの線上にあります。

しかし、思うに律令国家の版図に編入された後も蝦夷たちの多くは原住地に住み続けたに違いありません。皆が北へと駆逐されたわけではないのです。大和政権は、戦前の日本軍が中国でそうであったように点と線を抑えていたにすぎません。面は蝦夷たちのものであった。面を自分たちのものとすべく移民政策がとられますが、それはこの後で、しかも激しい抵抗を招き、いわゆる三八年戦争を引き起こしています。朝獦から五十年近く後に、征夷大将軍坂上田村麻呂は戦争準備を、遠く下総国印波郡（成田市江弁須）に本陣を置いて始めたということは、版図内といえども宮城県あたりはまだ敵地であって、兵站や補給には不適であったことを証明しています。

通説論者は言うかもしれません。「朝獦は征夷の功を誇るべく、この碑を建てた。も

し多賀城も蝦夷国の中だったら、版図を広げたことにならないではないか?」と。
私は、多賀城は蝦夷の勢力圏にある、その土地の中で築城・大改修という仕事を成し遂げた、その偉業を人に知らせるためにこの碑を建てた、と思います。敵の勢力圏に深く進み入ってこの偉業を立てたと。征夷の功というより、城修築の功です。遥々も来たるものかな、というのが彼の感懐だったのではないでしょうか?それを実感してもらうために京や靺鞨国からの里程まで刻ませたものではないでしょうか。

六

次にお話したいのは、時代が三百年ほど下がりますが、平泉藤原氏との関連です。藤原泰衡が、北上する頼朝軍を迎え撃つべく防衛陣地を築いたのは阿津賀志山、即ち福島県伊達郡国見町です。「吾妻鏡」にその戦闘の様子が詳しく記録されています。平泉府は白河から青森県の外ヶ浜まで支配したといいますが、白河は陸奥国の境ではあっても、藤原氏の実効支配は宮城県以北だったのでしょう。代々、境を固めていたのは、佐藤庄司という腹心の侍でした。義経に従って平家追討で名を挙げた、佐藤継信・忠信の実家です。彼らは秀衡が義経に付けてやった侍です。
平泉藤原氏は蝦夷であった、と私は考えています。

通説は京の藤原氏の子孫が在庁官人として勤務しやがて土豪として支配権を握った、だから蝦夷ではない、としています。

東北大学高橋富雄教授は

「清衡の父常清がおそらく国司の一員（權守もしくは介）として下向し、そのまま土着し、安倍氏の婿となり土着化していったのである。」（「奥州藤原氏」・吉川弘文館）

とされていますが、同書の中で

「藤原氏のように、在地の立場や利害を、全面的に組織した族長氏族が、歴史的に蝦夷であるという点は、それによって何ら変更されるところがないのである。」

とも書かれています。血族的には藤原秀郷流の坂東武士だが、やはり蝦夷だと。

蝦夷とは「奥羽の辺境にあって、中央とは著しくその政治・文化の性格を異にする人たちに対する古代人の侮蔑を示す呼称」と定義づけられています。

工藤雅樹元東北歴史博物館長も

「経清は藤原秀郷の5代の孫で、父を頼遠といった。経清は『造興福寺記』によって、永承二年には陸奥に在国していることが知られる。」（「平泉藤原氏」無明

舎出版）

「造興福寺記」とは藤原頼道が、氏寺・興福寺再興のため、一族に寄付金を募ったなかに、五位の部に「経清六奥」とあり、六奥とは陸奥のことで、経清も一族として応分の寄付をした、というものです。

私は一歩進めて、血族としても都の藤原氏ではなかったであろうと考えています。藤原頼長の日記「台記」で基衡を《匈奴》と呼び、（仁平二年九月十四日）九条兼実の日記〈玉葉〉で秀衡を《夷狄》と呼んでいます。（嘉応二年五月二十七日）

極端にいえば、蝦夷の頭領が東北の財力を以て、カネで買ったのではないかと。これは、安倍氏、清原氏も同様です。安倍氏について秋田大学の新野直吉教授は

「貞観末から元慶二年まで鎮守将軍に赴任した安倍朝臣比高（ちかたか）、元慶八年から二年ほど将軍であった安倍三寅あたりが最も結びつきやすい存在である。少なくとも彼らを中心に八世紀の延暦期から十世紀半ば天慶ごろまでの間に、現在の岩手県南部に行政・軍事の権力を掌握行使していた安倍氏と在地の豪族勢力がむすびついたものと考えられる。」（「多賀城と古代東北」吉川弘文館）

都の安倍氏と、在地豪族勢力の合体という折衷的な考えかたでしょうか。

前九年の合戦時の亘権太夫藤原経清は安倍頼時の婿でした。この三氏は蝦夷の頭領を名乗っていますが、都の貴族が東北の地へやって来て、蝦夷を統べる頭領になれるでしょうか？文献をみると、前九年合戦を描いた「陸奥話記」には安倍氏を「東夷の酋長」と記しています。有名な「中尊寺金堂落慶供養願文」の中で藤原清衡は自ら「東夷の遠酋」「府囚の上頭」と称しています

前九年、後三年の合戦のころ、この三氏は、北上川、雄物川、阿武隈川という交通の要路を抑えて、勢力を分かち合っていたように思います。お互いに通婚もしていました。いわば広域連合を結んでいたのです。都から下った経清一代の話ではないでしょう。

これは桓武天皇が対奥州戦争をやめたのち、今度は蝦夷内部で激しい勢力争いが続き、統合を重ね、二〇〇年ほどを経てこの三氏に収斂した結果ではないでしょうか？そしてこの頃になると、かつてアテルイとかウクツハウとかモレとか呼ばれていた蝦夷たちも畿内政権との交流を通じて名前を変え、都の貴族名を冒用するようになった、というのが私の考えです。冒用するにあたって都と折衝し、それなりの対価を払うという条件で取引したであろうことは想像に難くありません。都のそれら貴族にとって

も、己の家名を名乗る者が出羽・陸奥に君臨することは勢力拡大に資するうえに、東北の金や馬、鷹の羽、毛皮等々の貢ぎ物の魅力には抗しがたく承認したものでしょう。大体、都風を吹かす官人が、下向早々に蝦夷たちの頭領として権力を握れたはずがないと私は考えるのです。

さて、前九年・後三年の合戦を経て藤原清衡が奥羽の覇者となり、平泉に府をおきました。平泉は実質自治政府の首都であり、鎌倉幕府に先立つ、平泉幕府と言ってよいものであったと、高橋富雄教授が詳細に論じています。高橋教授はなお清衡を藤原秀郷流とする視点を捨てていませんが、私は蝦夷幕府であったと思っています。平泉は多賀城以下の征夷の為の諸城と全く異なる、正反対の性格を持つ、と唐木順三氏はいいます。背後から脅かす者はなく、北方に対しての防備は不必要であった、と。（続あずまみちのく「清衡考」）

畿内政権に対峙するが北は全て同族という安心感があった為でしょう。芭蕉が「奥の細道」で「泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり」と書いたのは唐木説に反しています。芭蕉の誤りと思います。

この藤原氏が敵を迎え撃つ防御陣を敷いたのが国見町、ということは、伝来の蝦夷

国の境界であったればこそ、と私は考えています。

七

私は国見町を四度訪ねて、阿津賀志山にも三度上りました。この山の上から見下ろして、その都度、ここが、いかに要害の地であるか、また国境と言うにふさわしいかという思いを深くしました。

昔の東山道（奥州街道）現在の東北自動車道、東北本線、東北新幹線、あらゆる道が二キロほどの狭い地域に集中しています。東に阿武隈川、西に奥羽山脈がせまり、喉首のようになっているからです。

国見という地名、これも東山道の宿駅として古くからの地名です。およそ、国見というのは六十余州それぞれの国境の地に付けられる地名・山の名でした。舒明天皇の国見の歌は、都にあって支配下の国を見る、人民の暮らしを見やるというもので、意味が違います。

ここは陸奥国の真中で国境ではありません。人もあまり住んではいなかったでしょう。大和人がやって来て、そこから先は「蝦夷びとの住む国だなぁ」と感慨を込めて見やった土地という思いがします。だから国見町なのです。

国見町は伊達郡ですが、伊達には「いでたつ」という意味がある、とする説があります。これも国境にふさわしい地名のような気がします。（ついでながら、伊達政宗の先祖は常陸の中村氏、藤原秀郷流と称して頼朝の配下でしたが、阿津賀志山の合戦で戦功をあげ、この地をもらい、苗字にしたということであります。）

また、通説で蝦夷国界とされている岩手県との県堺も度々足を運びました。多賀城から六十キロというと、栗原市あたりです。栗原市は大きく広がる水田地帯です。一関まで行けば山や川があり、国界らしい風景がありますが、少し里程があいません。

以上五つの理由から、私は、蝦夷国界は国見町だ、と推測します。

（２０１２・７，２０１６・８改稿）

討論会「勝海舟と福澤諭吉」要旨

「痩せ我慢の説」は是か非か

司会（平山善之）　今月は討論会で、海舟と諭吉について皆さんに議論して頂きますが、論点を絞り、明治二十四年に諭吉が海舟と榎本を非難して書いた「痩せ我慢の説」は是か非か、を討論します。本説は九月例会で配布済みです。

始めに、告発した側、諭吉の代理人中山さんに冒頭陳述をお願いします。

諭吉側　中山喬央氏　諭吉は、痩せ我慢の精神が無ければ、我国の独立は維持できないと考えた。この説は、直接には勝海舟と榎本武揚の幕臣としての出処進退を問題にしたものだ。海舟は戊辰戦争の際、国内平和を優先し自らイニシアティブを取り幕府消滅を実現させた。諭吉は、その成果を評価しても、維新後薩長の人々と共に「名利の地位」についたことは容認できない、とした。

国の利益名誉への固執、忠君愛国も私情だが、諭吉は忠君愛国を、世界の事情を考えればやはり美徳と考えた。彼は三回渡航し、海外事情に実によく通暁していた。故

に、国やその属する共同体が危機や滅亡に瀕した場合はたとえ勝算に乏しくても命を犠牲にしても護りぬく、これこそ痩せ我慢だとする。特に弱者が強者に対して弱者の地位を保つにはこの、痩せ我慢しかない、という。諭吉はこの痩せ我慢のモデルを三河武士の精神にあったと考え、海舟の戊辰戦争期の行動は、日本武士の気風を損なったと結論付ける。痩せ我慢は国民を基盤とする国民国家を樹立する為に、国民レベルで発揮されることが必須なのに、海舟の行動はマイナスになりかねない。

司会　この非難に対する、海舟の答弁を諸橋さん、お願いします。

海舟側　**諸橋奏氏**　学者、評論家と政治家では立場が全く違う。学者は理屈が多い。勇ましい、恰好いいことを言う。発表したのも海舟死後、三国干渉で熱中しやすい日本国民が沸騰している時に、タイミングよく勇ましいことを言った。

新政府後、名利の地位についたと言うが、西郷や大久保が、静岡に隠遁していたところへ再三再四、頼みにきたのだ。考えれば海外のことなど何も知らぬこの連中に任せておいては日本が危ない、と思ったまでだ。

また、徳川家臣団を路頭に迷わせてはならぬ。将軍への責任、家臣への責任、国家の行く末を見定め、老獪な欧米諸国にやられないようにする義務、それらから已む無

く新政府に協力したまでだ。

諭吉は将軍に、外国勢力を借りてでも長州を叩き壊せと具申している。彼は欧米の老獪さを理解していない青二才だ。江戸無血開城は、海舟の知識と知恵を見込んで慶喜が慶応四年一月、全権を委任するというから決心した。海舟が変わったのは、長崎で諸藩の若者と共に暮らし、咸臨丸で渡米して、西洋との格差を知り、これからは能力主義でいくしかない、と感じてからだ。腰抜けの解決と言われようとも、何も言わない。諭吉は個人的に合わないから、嫌っていたから、色々言うのだ。

中山　諭吉は将軍に直接意見具申するほど大物ではなかった。中津藩の下級武士だ。

諸橋　彼は西周を通じてやっている。

司会　議論を整理すると、諭吉の海舟非難は①江戸無血開城②新政府に仕えたの二点のようです。まず①の平和主義。痩せ我慢しなかったのは、勝算無くても戦うべきところ戦わなかったのは国民精神作興のうえからは、大変好ましくない、ということだが、海舟にかわり蘇峰が反論し、戦争は諸外国が付け込む因となったろうと論じた。諭吉はすぐ、弟子をして反論させ、当時の諸外国は日本を乗っ取ろうという意図も余裕もなかった、海舟の言い逃れだとしました。この点はどうでしょう。

諸橋　当時仏公使ロシュは慶喜に援助するから戦えといい、英公使パークスは無傷のまま日本を手中にしようとした。海舟の最大の課題は列強の代理戦争をしてはならない、ということにあった。英仏の代理戦争になる可能性は確かにあった。

司会　外国脅威論をめぐって活発な討論参加を求めます。戦争してたらどうなったか、推測しかできませんがご自由に発言を。

中山　それについて諭吉も書いているが、公使連中はいろいろなのがいたが、本国から見れば痩せこけた日本より中国のほうが遥かに魅力だった。幕府を脅かして利権だけとればよい、入り込んでどうこうする気はなかった。

諸橋　諭吉はその程度にしかみていなかった。

西を通じて家茂に、フランスの力を借りて長州をやっつけて徳川首班政府を作れといった。

司会　諭吉は佐幕論者ですか？

中山　いや、佐幕というわけではないが攘夷論者から暗殺されることを恐れていた。暗殺と借金が大嫌いだった。

諸橋　彼は明治十一年、慶応義塾が生徒減少したとき海舟に借金を申し込み手痛く

断られている。まず私財を投げ出せ、と。

中山　義塾経営は確かに行き詰ったが、甥で三井の中心に居た中上川などの尽力で、月謝だけに頼らず寄付を募って凌いだ。

諸橋　海舟が諭吉を評して「金儲けが好きな男」など言ったから諭吉は怒った。

司会　外国脅威論に戻りましょう。戦争していたら諸外国から借金をしたでしょうし、後々まで首根っこをおさえられたのでは？

中山　ナポレオンの対露戦役のとき、ロシアはモスクワを焦土とした。我々も昭和二十年全国を焦土として、そこから立ち上がった。借金もせず、立派に復興した。日本人はそういう民族で諭吉はそれを信じていた。

三戸岡　慶応から明治になる頃、諭吉は何をしたか。何もしていないではないか。英仏には大きな戦略があった。日本を守ったのはやはり海舟だ。

諸橋　海舟が首尾一貫守ったのは諸外国に隙を見せない、ということだった。徳川や家臣のことは、後で考えればよい。列強の犬にはならない、これだけを命をかけて守った。

中山　諭吉は人材を育てた。

三戸岡　それは明治以降。維新前は何もしていない。

司会　諭吉は中津藩士、譜代藩士として徳川中心の政府を思考したのは事実のようですね。

中山　だから、命も狙われたし、昨今は評判悪い。

三戸岡　幕末に命をかけて国を守ろうとしたのは海舟で、比較にならない。

司会　確かに年齢も違い、又、かたや言論かたや政治と活躍分野も違うので比較は難しいと思います。

では次に②の問題、明治以降ですが、海舟は二君に仕えたのでしょうか？

諸橋　日本国の明日を考えている時にそんなことを言っていては国はできない。言っている人は救いようが無い。

中山　明治以後国を興した企業、三井銀行、日本郵船、横浜正金、これ等の主要幹部はみな慶応義塾出身者だ。貢献している。

諸橋　武楊だが、当時国際法を知っていたのはオランダがえりの彼くらい。こういう人材を活用すべしと黒田らが命乞いして、箱館後間もなく対露交渉に当たらせた。松本良順も土方が「君は生きて働け」と言ったので後に軍医総監にまでなった。歴代

東大総長も賊側が多い。

司会　洋学を学んだ、数少ない人材は活用すべきではなかったでしょうか？

中山　武楊については諭吉も影ながら助命に尽力した。

司会　惜しいと思ったからでしょう。ただ山野に引っ込めというのは、首切るも同じじゃないですか？

中山　海舟は正二位という高位についたが諭吉は無位無官で大変なシンクタンクを作った。武楊だって同じことはできたはずだ。

三戸岡　明治政府は人材不足で、人材は賊側に多かった。諭吉は六十歳ぐらいになって、つまり儲けちゃってからこれを書いている。

中山　憂国の至情だと思う。

三戸岡　憂国というが何もやってない。

諸橋　痩せ我慢の説は諭吉の嫉妬だ。女偏だ。

中山　それは人格を貶めるものだ。

高橋　諭吉の人格はどうか？誠実か嘘つきか。慶応義塾の一万二千坪の土地の入手経緯も不明朗と聞く。

中山　合法的に入手した。いち早く情報を手に入れただけ。

三戸岡　それには政界とのコンタクトが必要。教育産業を商売とみれば、商売がうまかったということだ。

司会　諭吉は三回目の海外渡航の際、幕府の公金を自己のために使って、帰国後謹慎処分に遭っています。また翻訳方であったが、少しも役に立たなかったと、当時の団長小野友五郎が言ってます。

諸橋　海舟も咸臨丸のときはいろいろあった。

中山　私は日露戦争は、言い方悪いがうまくいったと思う。二〇三高地に突っ込んでいく兵を、国のために役だつ国民を造った。これこそ痩せ我慢だ。

司会　その精神論が昭和二〇年につながったという説もあります。

諸橋　善し悪しは別に戦中の、小国が大国と戦う大儀名文論にはなった。

太田　二人の対比表を作ってきたので見て欲しい。結論をいえば諭吉は教育者。海舟は政治家。二人を同じ土俵で論ずるのは難しい。

司会　仰る通りと思います。それで今日は論点を「痩せ我慢の説」に絞り、これの是非を論ずることにしたわけです。

この「痩せ我慢の説」を書いたことで諭吉は男を上げた、と思う人？（挙手中山氏のみ）では、男を下げた、書いたことは妥当ではない、と思う人？（ほぼ全員挙手）

中山　中山は断固反対だということは記録しておいてもらいたい。

司会　この辺で、皆さんお一人づつご意見を。

三戸岡　海舟は慶喜の身代わりだったと思う。慶喜は自由に動けない分、代わって動くものが必要だった。だから海舟は実に多彩な動きをしている。異例の出世をしているのもその為だ。

太田　海舟は大人物。栄達のためとか、支配意欲で働いていない。明治政府をコントロールする役割を果たした。

長島　田中正造の足尾銅山事件で、諭吉は銅生産を優先し農民の陳情を鎮圧しろと言った。

村上　スケールの違いを感ずる。諭吉は学者で徳川幕府あるを知って日本あるを知らなかった、人間としてのスケールの差だ。

神津　中公新書に福澤諭吉と中江兆民を書いたのがある。同じ年に二人亡くなっているが私は兆民に親近感を持つ。脱亜ではない。当時はそうだが。日清戦争後、償金

で日本経済の基をつくったのは承知しているが、富国強兵、必ずしも強兵なんだろうか？諭吉とは、そんなに優れた人かなと疑う。

笹森　海舟は江戸で、諭吉は中津で育った。その違いが二人の違いと思う。

柴田　二人は見る世界が大分違う。中国、朝鮮などに対する見方で、今から見れば海舟がいかに優れていたかわかる。

鯨　疾風怒濤の時代によくぞこんな凄いやつが、特に海舟だが、居てくれた。今日は諭吉劣勢だが永い目で見ると諭吉の功績も大きい。大阪大学も彼が作った。

千坂　批判するなら対案を出すべき。無いのに批判すべきではない。代案出したとしても実践してない。やった人を批判すべきではない。中津藩は鳥羽伏見で寝返った。海舟は全部終ってから、新政府に仕えた。全く違う。

漆原　足尾の事や、征韓論、脱亜入欧論などから見ると、諭吉は列強に早く追いつきたくて頑張ったのかなと思う。

新井　諭吉は学者、評論家と言われるが私はジャーナリストと思う。西南戦争のとき、西郷を擁護したのはジャーナリストの立場、諭吉の本質だ。自分もジャーナリストになりたかった。諭吉はある時期からおかしくなったと自分は思う。

司会　では時間が来ましたのでこの辺で。皆さんありがとうございました。

（２０１４・１）

佐倉藩　柏倉陣屋

N君、ご無沙汰しました。お元気ですか。

今日はまた、私の郷里、佐倉の話です。

私が佐倉商工会議所にいた平成十五年一月、元佐倉市長堀田正久氏が亡くなりました。旧佐倉藩主堀田家の当主で四期にわたり市長を務めた方ですから、市民葬ともいうべき盛大な葬儀で私も会議所から何人か引き連れて裏方を勤めました。此の時、山形県から三〇人ほどの人が団体で会葬されたのをみて、「どういうご縁なのかな」と思ったものです。

明治四年、廃藩置県が実施されたとき佐倉藩は山形に飛び地四万石を持っていました。

山形城主堀田正亮は延享二年（一七四五）十一月、老中に任ぜられ、翌年一月、前任老中の佐倉城主松平乗邑と入れ替わりに佐倉城主となります。宗吾事件の正信以来八十七年ぶりに戻ってきたわけです。（以後維新まで後期堀田氏として五代続きます。）

正亮の移封の際に、出羽国村山郡四五カ村が飛び地として佐倉藩領とされました。江戸時代、山形という土地は左遷の地の傾向があり、領主の変遷は多かったそうです。また村山郡内諸村は諸大名の石高調整の場に使われたようです。一時また幕領になったりしますが、堀田正睦が老中に任じられた時、復活しました。佐倉藩は領内統治のため、柏倉村に陣屋を置き約七十名ほどの家来やその家族を常駐させていました。藩校・成徳書院の分校も陣屋内に設置し、領民の入校を許し勉学を奨励したと言われます。

正久氏の葬儀に現れた山形県民は、この百五十年も前の旧領民の子孫でした。それにしても大名と領民という繋がりが切れてから百五十年も経つのに、しかも雪深い出羽と下総と離れた土地で、この結びつきがあるのは何故だろうか、不思議に思いました。一度、山形へ出掛けて行って、その辺を探ってみたいと思いましたが、つい機会を得ず十年近く経ってしまいました。しかし、昨年、「えみし学会」のゼミが米沢で開かれた折、足を延ばして柏倉（今は山形市）へ行ってきました。

山形市柏倉は好い所です。市の中心から西南に六㎞ほど、路線バスで約二十分、東や南は広々と田畑が広がり、西は徐々に高まって朝日岳に列なる農村地帯です。さく

らんぼなどの果樹栽培も盛んなようです。陣屋あとはいまは民家や農地でそれらしき跡は何もありません。小字を「館」というのは名残でしょうか。南北百余間、東西六十余間の長方形で周囲を石垣でたたみ、東面に堀があり渡ったところが表門といった造りでした。約四十棟の建物があったそうですが其の内一棟だけ今に残っています。東向き斜面の、小高いところに祠があります。この祠が陣屋時代の建物だというのです。見ると、「堀田永久稲荷神社」と石柱に記されています。そこが陣屋のおよそ真中であったそうです。

近くの農家で聞いてみました。

「そうだ。佐倉の堀田さんの稲荷様だが、何で永久とついているかは知らん。年一回くらい、この神社のお祭りのときには佐倉から来るようだ。」

廃藩置県以後も、旧領主はこの神社によって住民との絆を保っていたわけです。藩校を住民にも解放していた先進性も評価されていたのでしょう。

葬儀のあと、葬儀委員一同に、堀田家から桐箱に入った家紋入り袱紗を下され、大名家は違ったものだと感じたものです。

向寒の候、ご自愛下さい。　　敬具

（２０１４・１）

続日本紀に書かれた伊治公呰麻呂（これはりのきみあざまろ）（講演要旨）

宮城県栗原市城生野に、「伊治城跡」とされている場所があります。この城が築かれたのは神護景雲元年（七六七）、称徳天皇の時でした。伊治は地元では「いじ」と呼ばれてきたようですが、多賀城遺跡から発掘された漆紙文書に「此治城」という文字があり、伊も此も「これ」と訓よみされるところから「これはり」が正しいのでは、ということになり、今は通説となっているようです。当時も郡名は「栗原」でしたが、「これはり」が「くりはら」になったと大槻文彦博士が主張されています。通説に従い題名のルビを振りました。

伊治公呰麻呂は郡の大領、即ち郡長の官職にあった蝦夷の名前です。大和朝廷は帰服した蝦夷の首長には、ところの名前プラス君（後に公）という称号を与えていました。アテルイは正式には太墓公阿弖流為（たものきみあてるい）、モレは盤具公母禮（いわぐのきみもれ）といいました。

伊治公呰麻呂は、伊治城で反乱を起こし、按察使兼陸奥守紀広純を殺し、次いで多

賀城を襲いました。国司を殺し、国府を焼き払ったのですから大事件です。

その経緯が「続日本紀」という朝廷の正史にどのように書かれているか、がテーマです。以下「続日本紀」を「続紀」と略します。原文は漢文ですが、読み下し文は岩波の「新日本古典文学大系」により、難しい漢字はひらがなに改めています。

伊治城は一か月もかからずに完成した、といいます。称徳天皇は詔勅を以て関係者を褒賞しました。

「陸奥国の奏する所を見て、即ち伊治城作り了れることを知りぬ。始めよりをはりに至るまで三旬に満たず。朕甚だ嘉す。」

翌年、伊治・桃生への移住を促す勅語がだされました。

「陸奥国の管内と他国の百姓の、伊治・桃生に住まむとねがふ者は、こころにねがふに任せて、到に随ひて安置し、法に依りて復をたまふべし。」

「復」とは減税する、という意味です。更に二か月後にもまた、

「陸奥国桃生・伊治の二城は、営造已におわりぬ。その土沃壌（どよくじょう）にしてその毛豊（もうほう）饒（じょう）なり。坂東の八か国をして各部下の百姓に募り、もしこころに農桑を好みてかの地利につく者あらば、即ち願のまにまに移徒し、便のままに安置せしむべし。法の外に優復して、民をして遷ることをねがわしめよ。」

移住者はどこでも希望するところに住んでいい、法の規定以上に減税してやる、というのですから、いかに移住に力を入れたか分かります。しかし、坂東の人々にとっても僻遠の地、移住者は少なかったらしく、また三か月後、続紀には

「神護景雲三年六月丁未、俘宕の百姓二千五百余人を陸奥国伊治村に置く。」

という記事が現れます。住所不定の輩をつかまえて、島流しのようにここへ送り込ん

だのだからひどいものです。しかし、この地は無人の土地ではありませんでした。朝廷から、蝦夷と呼ばれた、縄文の昔からの住民がいたわけです。縄文時代の人口密度は東北地方が日本列島の中でも最も高かったというのが通説です。移住者と元からいる住民との間に緊張が生じたであろうことは想像に難くありません。この頃から桃生（ものう）城から伊治城にかけて騒動が頻発したようです。

（現代中国は西域のウイグル人の土地に漢民族の大移住を推進しています。ウイグル族がテロ活動にはしるのは、中国政府に責任があると思います。）

二

称徳天皇は神護景雲四年に薨去、光仁天皇が即位しましたがその五年目、宝亀五年（七七四）七月、次のような詔勅が出されました。

「将軍ら、前日征夷の便宜を奏して、一（ある）は伐つべからず、一は必ず伐つべしとおもへりと申す。朕、その民を労らむが為に且つ含弘を事とす。今将軍らが奏を得るに、蠢ける彼の蝦狄、野心を悛めず、屡辺境を侵して、敢て王命をそしる。事已むこと得ず。もっぱら来奏に依りて、すみやかに軍を発して時に応り

て討ち滅ぼすべし。」

この勅令の直後に陸奥国から

「海道の蝦夷、にはかにに徒衆を発して、橋を焚き道を塞ぎて既に往来を絶つ。桃生城を侵してその西郭をやぶる。鎮守の兵、勢支ふること能わず。」

と言ってきました。桃生城は天平宝字二年（七五八）伊治城より九年前に、現在の石巻市、旧北上川を見下ろす丘の上に築かれた城です。

この年から弘仁二年（八一一）まで続いた東北地方の動乱は、三八年戦争とよく言われます。弘仁二年、征夷将軍文室綿麻呂から嵯峨天皇への上奏文の中で「自宝亀五年至于当年惣三十八歳、辺寇屢動」という表現を使ったからです。

宝亀七年から八年にかけて、陸奥国、出羽国からの謀反の知らせ、これに対し坂東諸国の兵・軍船・食糧の動員の記事が続紀に相次いで見えます。

宝亀八年九月葵亥、陸奥国から

「今年四月、国を挙げて軍を発し、山海両つの賊を討つ。国中忿劇にして百姓艱辛す。望み請はくは、今年の庸調あわせて田租を復して、以て民をやすめむことを。」

と奏請してきました。「これを許す」とあります。

三

呰麻呂の記事は、宝亀八年（七七七）一二月に初めて出てきます。何人かの叙位叙勲に混じって

第二等伊治公呰麻呂に並びに外（げ）従五位下

とあります。二等というのは当時蝦夷に授けられていた位、「外」というのは五位以下には内位と外位と二種類あり外位は必ず外と表示したものです。宮中・畿内から離れた地域の人で勲功有った人に授けられ、内位より一段低いものとされました。呰麻呂

の「外従五位下」は翌年六月にも記載がありますが、重複と思われます。
宝亀一一年（七八〇）二月、陸奥国から覚鱉城（かくべつのき）という新城を造ることが献策され、これを許可したという記事があります。この城がどこであったかは現在分っていませんが一関近辺と思われます。
翌三月二二日に、

「陸奥国上治郡大領外従五位下伊治公呰麻呂反く。」

上治郡とあるのは、伊治郡の書き間違えで、これはり郡即ち栗原郡のこと、というのが通説ですが、東北学院大学の熊谷公男教授は「上治郡」という別の郡があった、という説を取っています。栗原郡は建郡以来、これはり郡とは呼ばれていない、加えて栗原郡は移民主体の郡で、蝦夷主体の郡は田夷郡（遠田郡など）とされて、明確に区別されていた、従って蝦夷である呰麻呂が栗原郡の大領になるはずがなく、田夷郡のひとつ上治郡があったのだとされています。説得力ある説ですが、上治郡というのが、ここしか登場していないというのが難点です。以下、反乱の記事を続けます。

「徒衆を率いて按察使参議従四位下紀朝臣広純を伊治城に殺せり。広純は、大納言兼中務卿正三位麻呂の孫、左衛士督従四位下宇美の子なり。宝亀中に出でて陸奥守と為り尋ぎて按察使に転(うつ)さる。職に在りて事を視る事、幹済と称へらる。伊治呰麻呂は本是れ夷俘の種なり。始め事によりて嫌ふこと有れども、呰麻呂怨を匿していつはりて媚びつかふ。広純、甚だおもひもちゐて、殊に意にはさまず。

また、牡鹿郡大領道嶋本楯（大楯の誤記）、毎に呰麻呂を凌侮して、夷俘を以てあしらふ。呰麻呂、深くこれをふくめり。

時に広純、議を建てて覚鱉柵を作りて、以て戍候を遠さく。依りて俘軍を率て入るとき、大楯・呰麻呂並に従へり。是に至りて、呰麻呂自ら内応して、軍をときいざなひて反く。先ず大楯を殺し、衆を率て按察使広純を囲み攻めて害せり。

独り介大伴宿祢真綱を呼びて、囲の一角を開きて出し、護りて多賀城に送る。」

呰麻呂の反乱の原因は、大領二人の間の確執が原因であったように書かれていますが、私は真因はそんな小さなことではなかったと思います。

前に見た如く、大和朝廷の移住推進政策によって、既に数年、蝦夷と陸奥国府との間に騒動が繰り返されてきました。蝦夷であって郡長という官職についている呰麻呂の苦悩はいかばかりであったでしょう。住民から信頼を受け、一方その住民を大和朝廷側に立って抑圧しなければならない彼の苦しみは、察するに余りあります。

想像するに、彼はトラブルが起きる度に、国府官人や国守と争論を繰り返したのではないでしょうか。この日もそうした争いの結果、行きつくところ国守殺害まで至ったと考えています。彼は、朝廷のやみくもな移民政策の再検討を求めて、自分の意志を朝廷に伝えさせるために、わざわざ次官たる大伴真綱を呼び、説明し、そして国府まで送り届けたと思います。自分の思いを都へ報告せよ、と。そうでなければ真綱らも皆殺しにしたでしょう。

なお、私は大楯も蝦夷の出身と考えてきました。しかし、現在の通説は、道嶋一族はもとの姓を丸子といい蝦夷ではない、上総から移住してきた一族だということで、その根拠の一つとして、大楯が呰麻呂を蔑んだというこの一文を挙げています。

続紀は更に続けます。

「その城、久しき年、国司治る所にして、兵器・稂蓄、あげてかぞふべからず。城下の百姓、競ひ入りて城の中にまもらむとすれども、介真綱、掾石川浄足、潜に後門より出てにぐ。百姓遂に依る所無く、一時に散り去りぬ。後数日にして、賊徒乃ち至り、争ひて府庫の物を取る。重きをこぞりて去る。その遺れるものは、火を放ちて焼く。」

蝦夷に攻められて落城、というより、みな逃げて空っぽになったと聞いて、蝦夷たちはやって来て略奪した、という感じではありませんか。

焼かれたのは事実で、多賀城の発掘調査で考古学的に確認されました。

四

呰麻呂叛くの報は六日で都につきました。

広純が殺されたのは三月二二日、その二八日に征東大使が任命されています。いかに衝撃が強かったかがわかります。また、道路と駅の制度の充実ぶりも窺えます。

「癸巳、中納言従三位藤原朝臣継縄（つぐただ）を征東大使とす。正五位上大伴宿祢益立・従五位上紀朝臣古佐美を副使。判官・主典各四人。」

「甲午、従五位下大伴宿祢真綱を陸奥鎮守副将軍とす。従五位上安倍朝臣家麻呂を出羽鎮狄将軍。軍監・軍曹各二人、征東副使正五位上大伴宿祢益立を兼陸奥守とす。」

藤原継縄は兵部卿でしたから、任命されたのでしょう。武人ではありませんし、陸奥へは赴かなかったようです。更に六月八日に

「従五位上百済王（くだらこにきししゅんてつ）俊哲を陸奥鎮守副将軍とす。従五位下多治比真人宇美を陸奥介。」

という人事発令をして、実務的な補強をしました。そして六月二八日、現地からの上奏に対し、益立らに詔勅をだしました。

「去る五月八日の奏書にいわく、且つは兵根を備へ且つは賊の機を伺い、まさに今月下旬を以て進みて国府に入り、然して後、機をうかがひ、変に乗じて、恭みて天誅を行はむといへり。既に二月を経たり。日をはかり程なずらふるに、とどまりて俘をたてまつるを待つがごとし。其れ軍を出し賊を討つは国の大事なり。進退動静、続けて奏聞すべし。何ぞ数旬を経るまで絶えて消息無き。宜しく委曲をもおすべし。もし書、意を尽くさずは、軍監已下のわきまふるに堪ふる者一人をえらびて馳駅して申したてまつれ」

遠方のことをとて事情がつかめず、いらだちが窺えます。宛名が益立になっているところをみると、征東使継縄は現地には行かなかったのでしょう。

しかし、これに対する返奏の記事はありません。

「癸未、征東使、甲一千領を請ふ。尾張、参河等の五国に仰せて、軍所に運ばしむ」

「甲申、征東使、襖四千領を請ふ。東海・東山の諸国に仰せて、すなわち造り送らしむ。」

藤原継縄という人は、後年、桓武天皇から命ぜられてこの続日本紀の後半二十巻を編纂した人物です。自分に関したことは細かい事でもしっかり書き込んでいるのです。

同日また、

「勅して曰く、『今、逆虜を討たむが為に、坂東の軍士を調へおこさむ。　来る九月五日を限りて、並びに陸奥国多賀城にゆき集わしめよ。そのもちゐる軍粮は、官に申して送らしむべし。兵集るに期あり、粮おくるに継ぎがたし。より て路の便近きを量りて、下総国の糒六千斛、常陸国の一万斛をさき、来る八月廿日より以前を限として軍所に運びいだせ』とのたまふ。」

この、九月五日の集結はどうなったでしょうか？続紀には記載ありません。

朝廷は、総司令官の更迭を決め継縄に代えて藤原北家の小黒麻呂を征東大使とし、現

地に送り込むことにしました。九月二三日、

「従四位上藤原朝臣小黒麻呂に正四位下を授け、持節征東大使とす。」

持節とは、節刀を授ける、即ち天皇にかわり、部下の生殺与奪の権限を持たせる、というものです。戦地で直接指揮を取れ、ということに他なりません。

ところが、一〇月二九日付けで激しい叱責の詔勅が出されます。小黒麻呂は到着していたのか、或いは赴任の途中だったかは明確ではありません。

「今月廿二日の奏状をみてしりぬ。すなわち延遅して既に時宜を失へることを。将軍たち赴きて久しく日月を経、集まれる歩騎数万余人なり。加以　賊地に入る期、上奏度多し。計ることおはらば発ち入りて、狂賊を平らけたたむ。しかるに今奏すらくは、今年は征討すべからずとまうせり。夏は草茂しととなへ、冬は襖乏しと言ふ。巧言を縦横にして、遂に稽留を成す。兵を整へ糧を設くるは将軍の為す所なり。而るに兵を集むる前に弁備を加へずして、かへりていわ

く、城中の粮末だまうけずといへり。然れば、何の月何の日にか賊を誅し、城を復せむ。まさに今、将軍、賊の為に欺かるるか。ゆえに緩怠してこの逗留を致せり。また、未だ建子（十一月）に及ばず。以て兵を挙ぐるに足れり。而るに勅旨にそむきて、尚入ることを肯にす。人馬悉くつかれば何を以て敵にむかはむ。良将の策、豈此の如くならむや。教喩を加へて、意をおきて征討すべし。もし今月を以て賊地に入らずば、多賀・玉作等の城に居りてよく防禦を加へて、兼ねて戦術を練るべし。」

凄まじい叱責です。天皇からこうまで叱られたら、辞任ものでしょう。十月廿二日の奏状は誰が書いたか。小黒麻呂か、益立か。小黒麻呂は赴任途上であったろうから、おそらく益立だろうという人もいますが、私は小黒麻呂が書いたと思います。状況が状況ですから、小黒麻呂は任命されて直ぐに陸奥へ下ったでしょう。そして現地の状況をみて、これは戦える状態ではない、と判断したのでしょう。前から居る副使らが今更言えぬことを、小黒麻呂は新任であるが故に、天皇に直言できたに違いありません。

しかし、十一月までは戦えという勅命が下ったのですから、とにかく、戦いは継続しました。十二月十日、再度上奏しました。

「蠢けるこの蝦虜、まことに繁くともがら有り。或は言を巧みにして誅をのがれ、或は隙を窺ひて毒をほしいままにす。是を以て二千の兵を遣わして、鷲座・楯座・石沢・大菅屋・柳沢等の五道を経略し、木を斬りて径を塞ぎ、溝を深くして険を作り、以て逆賊の首鼠の要害を断たしめむ。」

これに対して、天皇は

「聞くならく、出羽国大室塞等もまた是れ賊の要害なり。つねに間隙を伺ひてしばしば来りて寇掠す、と聞く。将軍と国司とに仰せて、地勢を視量りて非常を防禦がしむべし。」

と指示しました。しかし、「非常」を防ぐことはできません。一二月二七日付けで副将

軍百済王俊哲が敵の包囲に遭い、やっと囲みを破って逃げ帰った、という報告が来ました。

「百済王俊哲ら申さく『己ら賊の為に囲まれて兵疲れ矢尽きぬ。しかれども、桃生・白河等の郡神一一社に祈りて、すなわち囲みをやぶること得たり。神の力に非ざるよりは、何ぞ軍士を存らしめむ。請はくは、幣社に預からしめむことを』とまうす。」

「これを許す」と一言あるだけですが、おかしな事件です。

地元の神々に祈ったら助かったので、神様にお礼の祭祀料を出して下さい、というわけです。

えみし学会元副会長の宮野英夫氏は「えみし風聞」という本を書かれて、呰麻呂は俊哲を捕虜にして、身代金を要求してきた、小黒麻呂は、聖武天皇に黄金を献じた陸奥守百済王敬福の孫を死なせる訳にはいかず、支払ったというお話にしています。産金の業務は当時鉱山技術を持った百済人が握っており、俊哲を無為に死なせては問題

が大きくなる、というわけです。私は大いにあり得る話と思います。要するに勝ち戦などとは縁遠い話です。

五

騒乱の年が暮れて新年になると、天応元年と改元され、四月三日に光仁天皇は皇太子に位を譲りました。改元は瑞祥や凶事があると行われますが、皇位継承の際は必ずあります。既にこの譲位は決定しており、これに伴う改元を先立って正月にしたものでしょう。

元旦の改元の詔勅の中に、

「また、もし百姓、呰麻呂らが為にあざむかれて、能く賊を棄てて来る者有らば復三年を給へ。その軍に従ひて陸奥・出羽に入る諸国の百姓、久しく兵役にうみて、多く家の産を破れり当戸の今年の田租を免ずべし。」

正月の除目で小黒麻呂は右衛士督・常陸守はそのままで、兼陸奥按察使に任ぜられました。二月三十日に

「穀一十万斛を相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸等の国に仰せて、陸奥の軍所に漕ぎ送らしむ」

とあります。今年こそ、呰麻呂を捕え、乱を終息させようという意気込みが伝わります。桓武天皇は四四歳、皇太子時代から既に政務は見ていたと思われます。是まで見てきた詔勅なども、実際は山部親王から出されたとみて良いと考えます。

四月、皇太子山部親王は即位して桓武天皇となりました。桓武天皇は若い頃から、皇族の官吏として仕えていました。当時は自分の即位など夢想もしていなかったでしょう。称徳天皇崩御の時従五位上・大学頭。光仁天皇即位後、従四位下・侍従、宝亀二年、中務卿。官吏の仕事内容とか、官僚の心理、形を取り繕うやり口など全て知り尽くしていました。熟年の行政官であり、官僚たちにとっては、大変怖い、やり難い君主だったことでしょう。

五月には継縄を兵部卿から中務卿に、小黒麻呂を兵部卿に移す、という記事があります。征東大使小黒麻呂の上に兵部卿継縄がいる、というのは具合が悪い、軍と政の

一致を図ろうということでしょうか。

六月一日、小黒麻呂らに桓武天皇から詔勅が出されました。

「去る五月二四日の奏状を得て、つぶさに消息を知りぬ。但し、彼の夷俘の性と為ること、蜂のごとくにむらがり、蟻のごとくにあつまりて、もととして乱階を為す。攻むれば即ち山藪にはしりしりぞき、放せば即ち城塞を侵し掠む。而して伊佐世古・諸紋・八十嶋・乙代等は賊の中のかしらにして、一以て千に当る。迹を山野にかくし、機を窺ひ隙を伺へども、我が軍威を畏れて、未だ敢へて毒をほしいままにせず。今、将軍ら、未だ一つのくびをも斬らずして、先ず軍士を解く。事已に行ひおはりて、これを如何にともすること無し。但し先後の奏状を見るに、賊衆四千余人にして、その斬れるくびは僅かに七十余人なれば、のこれる衆猶多し。何ぞ先ず凱旋を献らむと、すみやかに京に向ふことを請ふべけむ。たとへ旧例有りとも、朕取らず。副使内蔵忌寸全成・多朝臣犬養等の一人、はゆまに乗りて京に入り、先ず軍の中の委曲を申し、その余は後の処分を待つべし。」

何と、小黒麻呂は天皇に無断で軍を解散してしまった、というのです。桓武天皇が激怒して、副官を至急説明に上京させよ、と命じたのは尤もな話です。

この勅語に蝦夷の頭領たちの名前が挙げられていますが、呰麻呂の名がありません。呰麻呂はその前に討伐されていたのでしょうか。しかし、乱の主犯である呰麻呂が死んだら、続紀に記録されないはずがありません。そして、これ以降、彼の名前は続紀には一切出てきません。いかにも尻切れトンボといった幕切れではありませんか？

続紀はこのあと、七月一〇日、小黒麻呂が五月に任ぜられた兵部卿を免ぜられ、民部卿に転じたという記事があり、八月二五日に突然

陸奥按察使正四位下藤原朝臣小黒麻呂、征伐の事おはりて入朝す。特に正三位を授く。

という文章があらわれ、それきりです。六月の天皇の指示は副官上京を命じたのに、総司令官が凱旋と称して上京しました。無断解軍の罪も問われず、しかも三階級特進

という褒賞に預かったのです。同八日には内蔵忌寸全成は陸奥守になり、二二日の除目で正五位上勲五等。その他、俊哲、多犬養、多治比宇美ら幹部連中はみな昇格しました。

哀れをとどめたのは益立です。全ての責任を負わされ、逆に降格されました。（彼は五六年後、子の野継が、あれは讒言によるものだとして訴え続けた結果、もとの従四位下を追贈されました。）

六

呰麻呂は討伐されたのでしょうか。本当に戦死したのでしょうか。

はっきりしたことはわかりません。しかし、今までみてきた続紀の記事からはどう見ても朝廷軍が不利でとても征伐されたとは思えません。

栗原市鳥矢ヶ崎というところに、蝦夷系の人を葬ったとみられる墓群があります。鳥矢ヶ崎古墳群と呼ばれ、保存状態も良好です。最近、東北学院大学の辻教授らによって発掘調査が進められました。その副葬品として、蝦夷特有の蕨手刀と、奈良朝廷の官人が帯びるベルトにつける金具（銙帯金具）が出土しました。蝦夷であって大領であった呰麻呂の墓の可能性は高い、と思われます。もし、そうであるならば、呰麻

呂は天寿を全うして一族の墓所に丁重に葬られたというべきでしょう。
仮に、そうだとすれば、なぜ、小黒麻呂は三階級も特進したのでしょう？

ここから先は、全く私の推量です。四つの理由が考えられます。
まず第一は桓武天皇と藤原小黒麻呂との人間関係です。これは、極めて近いものがあったろうと私は考えます。
光仁天皇も桓武天皇も、藤原一族の意志と陰謀のおかげで天皇になれたのです。桓武天皇の母は高野新笠、百済王一族の出身です。母の里、交野に育ち、藤原氏の若者たちと親しく付き合っていたと思われます。
一方小黒麻呂は藤原房前の孫、鳥養の子ですが、妻は秦氏の一族、その間の子は葛野麻呂、最後の遣唐使として史上に名を残していますが、葛野は後に平安京が営まれた土地で秦氏の根拠地ですから、名前からして葛野麻呂は秦一族の中で育ったと考えられます。小黒麻呂は延暦のはじめころ、平安京造営に関わっていますが、秦氏の土地収用と関係あると思います。年齢的にも小黒麻呂が五才くらい桓武天皇より年上ということで、遊び仲間であったかもしれません。

天応元年六月の勅語を受け取った小黒麻呂は、指示通り副官を上京させても駄目だ、自分が直接天皇に説明するしかない、そうすれば、天皇は解ってくれると思ったのです。違勅の罪に問われても良い、ここは自分が行こう、と。そしてそれは成功したのです。

第二の理由は二人の意見の一致です。

六月の詔勅を見ると、対蝦夷の戦いとは、ゲリラ戦であったことが明らかです。米軍とベトコンの戦争のようなものです。正規軍は勝利を収めるのは難しいのです。蜂や蟻のようで、追えば逃げ、放っておくと攻めてくる、生産力の乏しい時代に大軍をいつまでも滞在させれば、食糧のみ徒に費やして、戦果は上がらない、ということを、小黒麻呂は現地で実感し、聡明な天皇は、彼の説明を聞いて納得した、と思います。その後の対蝦夷戦は、この経験を踏まえて、様相が変わったのではないでしょうか。坂上田村麻呂のころになると、かなり住民との親交を図るようになっていく、だから彼はアテルイを共に上京させたが、殺すつもりは全くなかった、公卿を説得しきれなかったのは、痛恨の極みであったはずです。胆沢城や紫波城でも、交易を大いに進め、住民と国府との融和に努めています。こうした戦術転換をもたらしたのは小黒麻呂で

あって、桓武天皇はそれを多としたのでありましょう。
第三には、決定的勝利はなくとも、負けたとは言えない、という朝廷の事情です。ゲリラ戦の状況は分かった、しかし、あれだけ多くの国々から兵、食糧、衣料を動員したのです。朝廷としては、諸国に対する面目上、勝った、大勝利だと喧伝する必要性があった。それが、小黒麻呂の三階級特進という滅多にない表彰となったのではないでしょうか。何しろ、六歳も年上で前任者でもある継縄が長年従三位なのに、これを飛び越えて正三位になったのですから、世間も驚いたに違いありません。討伐戦は大成功だったに違いないのだろうと思ったでしょう。翌月継縄も臨時の除目で正三位にして貰いましたが。
第四の理由として、継縄と小黒麻呂の間の不仲が続紀の書き方にも反映しているのではないかということを、私は感じます。
二人とも桓武天皇の寵臣です。前者は藤原武智麻呂（南家）の孫、豊成の子、後者は房前（北家）の孫、鳥養の子、十才位年は離れますが、同世代のライバル同志です。独裁者の臣下というものは、洋の東西を問わずお互いに競い合っています。
そして継縄は続紀の後半二十巻の編纂責任者、執筆者です。ライバル小黒麻呂の事

績を盛大に書くはずがありません。私は当初、小黒麻呂が呰麻呂を殺したのに、敢て書かなかったのかと思いました。今はここに書いたように討伐は失敗だったと認識していますが、それでも、継縄の筆を全面的に信用することはできない、と考えるのです。小黒麻呂を叱る勅は詳しく書き、功績は何も載せない、自分が食糧や軍衣を調達したことは、しっかり書くなどというところに対抗意識むき出しという感じを禁じえません。

（２０１４・７，２０１６・６改稿）

桓武天皇と続日本紀

（講演要旨）

「続日本紀」という歴史書があります。

朝廷が編纂した「正史」は、日本書紀をはじめとして六つ（六國史）ありますが、その二番目が「続日本紀」です。文武天皇即位から桓武天皇の延暦十年まで九十五年間を扱った歴史書です。

普通、正史というのは天皇が崩御されたあと編纂されます。六國史の他の五つはすべて先帝崩御までを記述、編纂されています。

ところが、この「続日本紀」だけは、桓武天皇在世中の、延暦十年（七九一）までを記述し同一五年、桓武天皇に奉呈されました。桓武天皇崩御は大同元年（八〇六）です。

これは、なぜでしょうか。何故桓武天皇は自分の治世まで書かせたのでしょうか。私はこれまで、納得性ある答を文献からは見出せませんでした。そこで自分なりの推

量を独断と偏見を恐れずにお話してみたいと思います。

ー

まず、桓武天皇はどういう天皇だったのでしょうか？即位前から考えてみましょう。神護景雲四年、称徳天皇は五三歳、死期近くして法王道鏡に皇位を継承させたいと本気で思い詰めていました。法王任命、法王宮職設置、由義宮を弓削里に造営、河内国を河内職へと変更、いずれも道鏡の登位を前提としていた、と考える方が自然です。彼に対する愛着がそれほど深かったこと、恵美押勝と淳仁天皇の例で皇族の誰一人として信頼出来なくなっていた事によると思います。

しかし、朝廷内の空気は、圧倒的に道鏡即位に反対でした。天皇は道鏡を皇太子とすることも出来ず、憤悶と　焦燥の内に同年八月崩御された、と思われます。道鏡は天智系の皇子だったという説があるそうですが、信じられません。むしろ称徳天皇は現代の我々が思うほど、天皇家を「万世一系」と考えていなかったのではないか、という気がします。当時の日本に万世一系などという言葉がなかった、と思います。称徳・道鏡は宇佐八幡宮の「神勅」という作り話に激怒しました。

この時の宮廷の勢力分布はまず皇族として天武天皇の孫やひ孫達、臣籍降下してい

た者も含めれば七，八人はいたでしょうか。天智天皇係累も少ないながら居ました。臣下では、大伴・物部・蘇我といった古代からの貴族は退潮し、藤原氏が恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱の影響有りとはいっても、南家・北家・式家・京家と圧倒的に数が多かったのです。他には百済王・秦・坂上・菅野ら渡来系か、地方豪族出身者でした。

それらの中で藤原氏は、宮子妃・光明皇后という一族出の妃の影響力と相まって、結束出来さえすれば最強の勢力でした。そしてこの時、藤原氏は団結したのです。右大臣吉備真備は長皇子の子文室浄三、次いでその弟文室太市を押しましたが、左大臣藤原永手（北家）、内大臣同良継（式家）らが結束して白壁王を押したため、引き下がりました。この時裏面工作で活躍したのが式家の百川（ももかわ）（良継の弟）でした。

さて、藤原氏は、なぜ白壁王を担ぎ出したのでしょう？

表立った理由は、白壁王は六二歳、諸皇子の中で最年長者であること、そして称徳天皇の妹、井上内親王を妃とし、二人の間に他戸（おさべ）皇子という十代の男子があること、であったでしょう。先帝と最も近い親族というわけです。

二

しかし、私は本当の理由は違うと思います。

藤原氏の本心は、白壁王ではなくその子、山部王だったと思います。他の廷臣を黙らせる大儀名分として父の白壁王を担いだだけで、年令を考えても白壁王は六二歳、平均寿命からみて非常な高齢です。担ぐ方としても、当然、その次に思いを巡らしていたはずです。遠からず山部王に承継させようと企んでいたでしょう。

なぜ、藤原氏は山部王を買っていたのか。おそらく永手や百川は個人的に山部王と深い繋がりがあったと私は考えています。そしてその能力を高く評価していたのでしょう。

白壁王は正三位大納言、山部王は従五位上大学頭、中級の官吏で山部王は三三才。天智系である事から皇位など想像もできず、藤原一門の公達と同等かむしろ下位で、野山を共に駆け回って遊び歩いていたに違いありません。母は井上内親王ではなく、百済王一族の和新笠（やまと）（後に高野新笠）であります。山部王は勇壮闊達、百済から伝わった鷹狩を好んだといいます。また、後に述べるように中国の歴史に明るかったと思われます。大学頭でしたから、漢籍なども最も早く読む機会があったこともあるでしょう。とにかく周囲の人をしてこの方なら、と思わせる実力のある人でした。

更に百川と山部王の間には地域的な繋がりがあったのでは、という説があります。

高橋徹という方が桓武天皇について深く研究され、「道教と日本の宮都」（人文書院）ほか多数の論考を発表されています。この方の「桓武天皇の生誕・成育地」という論文によれば、京都の交野の地は百済王一族が多く居住し、山部王は母の関係で交野で成長した、というのです。そして百川は奈良の都と交野を結ぶ古代からの官道沿いに住んでいた、或いはこの付近に何らかの縁があった、というのです。近所付き合いの心やすさでしょうか。

さて白壁王は即位して光仁天皇となりますが、即位の大義名分である井上内親王、他戸皇子は、同時に皇后、皇太子に冊立されます。この二人が居る限り山部王が即位することは不可能です。藤原百川らはどうしたでしょうか？

三

続日本紀「宝亀三年三月癸未、皇后井上内親王巫蠱（ふこ）に坐して廃せらる。」とあります。即位後三年目です。天皇の発した「宣命」によれば、自首してきた者がいて、皇后が天皇を呪詛したことが明らかになった、というのです。しかし、常識的に考えて、誰が六十歳をすぎた老天皇に早く死んでほしいと呪うでしょうか？しかも皇太子は十二歳とも十四歳とも言われる子供です。待っていれば、自然に成長した我が子に皇

位は転がり込んでくるのです。ですから、これは無実であったと思います。自首者は昇格し、刑死者はいません。

同年六月丁未、「皇太子他戸王を廃して庶人とす。」宣命では皇太子の位には謀反大逆の人の子を置いておけない、と言っています。そして宝亀四年母子は大和国内に幽閉され、六年五月二十七日、「井上内親王・他戸王並卒」という文字が突然現れます。並ということはふたり同時にということで、いかにも不自然な死に方です。殺されたことは疑いなく、このさりげない十文字の簡単な記述には、当局としてはあまり触れてほしくないという意志と執筆者の苦心が感ぜられます。

この事件について、全て藤原氏の陰謀であったことを疑う研究者は一人もいないといって良いでしょう。光仁天皇の即位と山部王の立太子と二度にわたり藤原氏は陰謀を逞しくしたわけで、桓武天皇がいかに百川らに感謝していたか明らかです。後年、百川がいなければ自分は天皇になれなかった、と桓武天皇が百川の子、緒嗣を史上最年少で参議に抜擢した際に述懐したという逸話が記録されています。（続日本後紀・承和十年七月）

山部王自身は、この陰謀を知っていたかですが、私は承知していたと考えています。

既に光仁天皇即位の時から、実質的な天皇は山部王であったと言ってよいでしょう。そして廃后や廃太子が臣下の独断で出来るはずがありません。

加えて、「巫蠱（ふこ）の罪」について連想することがあります。

実は、桓武天皇は、中国の歴史に詳しいと言いましたが、とりわけ漢の武帝の心酔者であったふしがあります。そして、武帝はこの「巫蠱の罪」という名目で自身の皇后と皇太子を死に追いやっています。（漢書・元光五年七月陳皇后、征和二年七月衛皇后）文字も全く同じ巫蠱という字を使っていますが、呪う相手の人型をつくり、地中に埋めるというやり方のようです。

四

ここで、桓武天皇と武帝の共通点を挙げてみましょう。

第一に、双方とも長く皇帝や天皇の位にあったこと。即ち、独裁的な権能を振るうに十分な在位期間がありました。丞相とか大臣とかの操り人形ではない君主というのは、実は意外と少ないのです。武帝は治世五十年の間に、丞相の半分くらいを問責し獄に下し、或いは誅殺しています。公孫賀という人は、丞相に任命された時、殺されることを恐れて泣いて辞退したということです。

桓武天皇は二十五年の在位中、太政大臣を置きませんでした。太政大臣は職掌なく、則闕（そっけつ）の官（その人無くば即ち闕く）ですが、太政官統率の任務を負う左大臣も登位直後一年間の藤原魚名を除いて、誰も任命しなかったのです。右大臣が臣下筆頭でした。それも、二十五年間で藤原是公、継縄、神王（みわおう・桓武天皇の従弟）の三人のみです。

親政で独裁的となると、後世に残る仕事がしたくなります。第二の共通点は外征です。武帝は衛青、霍去病らを使い西域へ攻め込み匈奴討伐に明け暮れます。桓武天皇は坂上田村麻呂らを駆使して、東北・蝦夷の土地に勢力拡大を図りました。

第三の共通点は「徳政」です。天皇が平安京造営と外征に苦しむ民衆に、君主の慈悲を示した、という点でも武帝と共通しています。

武帝の死ぬ二年前、征和四年（ＢＣ八九）、「輪臺（りんたい）の詔」が発せられました。これは西域トルファンの東、輪臺という所へ出兵を奏請された武帝がこれを却下し、外征と重税で民を苦しめたことを悔いたというのです。

上乃下詔、深陳既往之悔、曰（主上はそこで詔を下し深く既往の悔いを陳べて言った。）

「前有司奏、欲益民賦三十助邊用、是重困老弱孤獨也。而今又請遣卒田輪臺。（さきに有司が、民の賦課を毎口三十銭まして辺境の費用を助けたいと奏言したが、これは老人や弱いもの、孤児やたよりのないものを二重に苦しめるものであった。しかるに今また兵を輪臺に屯田させるようにと請うてきた。）　中略　當今務在禁苛暴、止擅賦、力本農、修馬復令、以補缺、毋乏武備而已。（今、務めなければならぬことは、ただ苛酷暴悪を禁じ、ほしいままの賦税をやめ、農を国の本としてつとめ、馬復の令を修めて馬の欠乏を補い、武備を乏しくしないようにするのみである。）」　後略

「漢書・西域傳六十六下」

後世、「輪臺の一詔なかりせば、漢、ほとんど秦たるを免れず」と言われました。（十八史略・曾先之）あの詔が出されなかったなら、秦同様、漢も早々に滅びたというのです。

桓武天皇には「徳政相論」という話があります。

延暦二十四年（八〇五）、天皇臨御の御前会議で参議菅野真道と同藤原緒嗣が論争し、

緒嗣が「方今、天下の苦しむ所は、軍事と造作なり」として、蝦夷征伐と京都造営工事の中止を主張し、桓武天皇がこれを支持した、というものです。独裁者の前で公然と、その畢生の事業を非難するなど、いかに寵臣といえども出来るはずがなく、これは「輪臺の詔」を知るもの、即ち桓武天皇か真道が書いたシナリオ通りの、「やらせ」でしょう。政策変更は勅語や宣命を以て、トップダウンで指示するか、下からの奏請を裁可するかのどちらかですが、前者は独裁者としてもさすがにやりにくく、後者を取り、君主の徳を強調するためにこの一幕が演じられた、と私は考えます。

第四の共通点は道教です。

武帝は道教の信者であったといいます。道教に基づく「泰山封禅」（泰山の頂きで皇帝が天に祈る）という行事を盛大に行ったことでも有名です。桓武天皇は郊天祭祀（叉は郊祀祭天）という行事を二度行っています。泰山封禅の真似です。先にご紹介した高橋徹氏によれば、交野はその聖地であり、平安京自体、道教思想で設計された、ということです。

第五の共通点、というより、これこそ桓武天皇が武帝の真似をしたのが、歴史書問題だと私は思うのです。そして冒頭のなぞの答えと思います。

武帝は司馬遷に歴史書（三国時代頃から「史記」と呼ばれる）の編纂を命じました。それは自らの治世にまで及ぶものでした。ところが武帝は自分について司馬遷が書いたものが気に入らず、他の者に書き換えさせたといいます。独裁者というものは歴史すら自分の思うように書かれなければ満足できません。まして太史公曰く、などと自分の治世を評論されるなど、以ての外だったでしょう。そうされない為には、目の黒いうちに自分の治世まで書かせるしかありません。「史記・孝武紀」は無味乾燥、波乱万丈の治世にもかかわらず全く面白くないものです。

桓武天皇は千年近く後の人ですから、その後の中国歴代の史書というものもよく承知していたに違いありません。客観性維持のために、天命革まって王朝が交代してから、初めて先王朝の事を書くのが歴史書であると。

しかし、桓武天皇には、気になることが沢山ありました。後世、自分がどう書かれるか、心配の種がいくらでもあったのです。そこで、自分の治世まで書かせ検閲するという武帝方式で行こうと思ったのでしょう。

五

桓武天皇が後世何と言われるか気にしていたこと、それは、第一に自分の立太子に

からむ陰謀（廃后・廃太子）でしょう。そして二番目には、光仁天皇の意志で皇太子とした同母弟・早良（さわら）親王を斥けて自死せしめ、我が子安殿（あて）親王（後の平城天皇）を皇太子に据えた一件でしょう。

自分が皇太子になれた件は光仁天皇の時ですし、藤原永手・百川の陰謀で済むかもしれませんが、同母弟・早良親王については言い逃れできません。度々怨霊に悩まされ、神社を建て天皇号追贈までしていますが、一生の重荷であったことでしょう。

この事件は延暦四年（七八五）に起きました。

光仁天皇は早良親王を可愛がったのでしょう。桓武天皇に譲位する際、早良を皇太子とするよう命じたと思います。しかし、桓武天皇は皇后とした乙牟漏（おとむろ）（式家・良継の娘・平城、嵯峨天皇の母）、夫人吉子（南家・是公の娘）、夫人旅子（式家・百川の娘・淳和天皇の母）等藤原氏出身の娘を始め、あまたの妃に子を産ませていました。次の天皇が早良親王であれば、この子たちはどうなるかわかりません。ここでも藤原氏と利害一致します。

乙牟漏の従弟、藤原種継は桓武天皇の寵臣で長岡京遷都事業を任されていましたが、ある夜、矢に射られて暗殺されました。犯人探しが行われ、わずか一日の内に数十人

が逮捕され、大伴、佐伯両氏が故大伴家持の指示で動いた結果だということになりました。家持が東宮職の長官を兼ねていたことから皇太子自身の関与が疑われ早良親王は拘束されました。身に覚えのない早良親王は憤悶のあまり食を絶って自殺した、といいます。

この事件も藤原氏の陰謀を疑わない者はいないといっていいでしょう。光仁天皇の早良偏愛は返って仇となったと言えます。桓武天皇が承知のことか否かはわかりません。しかしこの事件はこのあと、長く天皇を苦しめました。

その他にも、軍事と造作で民の負担は著しいものがあったでしょう。遷都反対の守旧派弾圧など恨みを買う種はいくらでもあったのです。

こうなると自分の治世がどう書かれるか、後世に任せて置けない、と考えたと思います。腹心に自分の欲するように書かせる、というよりも、自分の手で「続日本紀」を書きたい、こう思ったでしょう。

六

続日本紀の執筆者は誰でしょうか？

前半二十巻は菅野真道、後半二十巻は藤原継縄ということになっています。真道は渡

来系貴族の学者です。前半部分はどうでもよい、問題は最終巻に近い方です。
藤原継縄は、南家の嫡流で右大臣豊成の子、桓武天皇より十歳ほど年上です。延暦九年、右大臣に任ぜられましたが、彼はまた桓武天皇とは一人の女性を挟んで、極めて近い関係がありました。
継縄の妻は、百済王明信といいます。名前の通り百済からの亡命者の一族、高野新笠とも近く、交野に住んでいました。詳しくは記録されていませんが、天皇は交野にいた山部王時代から、つまりかなり若い時から彼女と関係があったのではないかと思われます。というのは、渡来系にも拘わらず、藤原色濃い後宮で女官として高位にまで昇っているのです。弘仁六年に没した時従二位でした。延暦六年、従三位の時尚侍（ないしのかみ）に任ぜられましたが、この職は「後宮職員令」によれば「常時、奏請、伝宣に供奉」とあり、天皇の政務秘書官或いは官房長官的色彩があったようです。よほど才能ある人でなければならず、また時代によっては天皇の寵愛を受けることもあったそうです。文字通り“腹心”です。
一方、継縄ですが、延暦一五年に七十歳で死んだ時の薨伝によれば「慎み深い態度で自制し、政績ありとの評判はなく、才識もなかったが、世の批判を受けることがな

かった」とあります。臣下筆頭の右大臣としてはさえない評価ではありませんか。この夫婦には乙叡（おとえ）という子がいましたが、その薨伝には「大した男ではなかったが、明信の息子というだけで立身した」とまで書かれています。どうも実質的右大臣は明信のような気がします。

この夫婦の邸は交野にあり、続日本紀には桓武天皇が再々継縄邸に行幸されたことが記載されています。おそらくその一室で、「続日本紀」に宝亀以降の「歴史」をどう記述するか、三人で額を集めて協議していたのではなかろうか、私にはその情景が目に浮かぶような気がします。

（２０１４・７、２０１６・８改稿）

六然（ろくぜん）会のこと

岩沢正二さんという方がおられた。住友銀行副頭取、東洋工業（現マツダ）会長などを勤められた。芯は強いが温厚な紳士で、安岡正篤師に師事し、大変な勉強家であった。

一切の役職を退かれた後、後輩や旧部下たちを相手に、「六然会」という会を開き、月一回、漢籍の講義をされた。全国何箇所かで催されたが、東京は新橋のあるビルの一室で行われていた。例会出席者は、二十人前後であったろうか。私は、採用面接でお会いしたが現役時代は岩沢さんに直接お仕えしたことはなかった。私が銀行から出たあと、誘う人がいてこの会に入れてもらい、約四年間、論語、孫子などの教えを受けた。

六然とは、明の崔銑（さいせん）の六然訓、

自處超然　　處他靄然　　有事斬然
無事澄然　　得意澹然　　失意泰然

を言い、人生かくあるべしという教えである。

岩沢さんは会員皆にこれを色紙に書いて下さったので、私も書斎にかけ毎日眺めてい

る。（自ら処して超然とはいかず、失意悄然とすること多き吾が人生ではあるが。）
ある時、何かの折、聴講者全員がスピーチをする時があって、私は次のような話をした。
「漢字というものは、不思議な力をもっているものだと、私は思います。名は体を現わすとか、正にその名の如く、とか言いますが、そうしたことは事実ある、と思います。
私は双子の息子を持ちました。双子とは判っていましたが、男女は判りませんでした。只でさえ名前を決めるというのは重たいものですが、四通りの名前をあらかじめ考えるのは面倒で、生まれたら、つまり男女が判ったら考えようと放っておいたのですが、いざ生まれて男だとわかっても名前が浮かんでこないのであります。お七夜は迫る、家人はせっつく、四苦八苦です。双子だから、対になっていた方がよかろう、と文学作品、尊敬する人の言葉、漢詩等、あれこれ考えました。
しまいには、栄介、敏介（Ａスケ、Ｂスケ）というのはどうだと言ったら家人は大反対。（子供も長じて、そんな名前にされなくて良かった、危なかった、と言いましたが、私としては名案と思ったものです。）
義母が『善之という二文字を一字ずつあげては如何』と言いますので、これを採用し、あと二字は、論語からでも引っ張ってこよう、ということに致しました。
「論語」の陽貨第十七及び堯曰第二十に

寛則得衆、　信則人任焉　（寛なれば衆を得る、信あれば人任ず）

という句があります。（堯曰篇は「信則民任」）

寛なれば衆を得る、とは寛大な心でいれば大勢の人がついてきてくれるの意、信あれば人任ず、とはまことがあれば人がたよりにし、何事も任せてくれる、今日の信任という語の起こりでしょう。この寛と、信を使って、善信、寛之と名付けたのです。

愚息は二人とも遊びと運動に熱中して、本など見向きもせず成長し、大学卒業後、善信は銀行員に、寛之は中・高の教員になりました。全く私に相談なく、自分の考えで決めてきました。

銀行員は人に信頼され、大切な財産を任されなければなりません。信（まこと）が重要です。先生は生徒や父兄がついてきてくれなければ困る、寛が大事です。

私は子供が銀行員や教師になると思ってつけたのではないのですが、結局、私がつけた名前は、子供らの将来を予言したような結果になったわけで、冒頭申しあげたような、漢字の魔力というものをしみじみと感じたわけであります。」

岩沢さんは温顔を綻ばせ、深く肯いて賛意を表して下さったが、幽明境を異にしてはや七年の歳月が流れた。

（２０１４・９）

大老堀田正俊の死

N君　お元気ですか。

貴君は佐倉市甚大寺に堀田正俊の墓があるのをご覧になりましたか？ 五代将軍綱吉の大老で、貞享元年（一六八四）江戸城中で若年寄稲葉正休によって刺殺された人物です。

昨年四月、「儒学殺人事件」と題する本が講談社から出版されました。著者は小川和也氏、日本思想史を専攻する文学博士、中大教授。この本は、ミステリー小説ではなく、むしろ学術書に近いものですが、出版社が販売政策上こういった題を付けたようです。

綱吉は、正俊亡き後、独裁的となり、生類憐れみの令とよばれた一連の悪法や浅野事件の不当な判決等で暗君の代表格となりましたが、正俊暗殺は綱吉が大老を忌避し、引退を求めたが応じないので殺させた、という趣旨です。実行犯・正休はそ

の場で周囲が斬殺したため、真相は不明ですが、小川教授は綱吉、正俊ふたりの儒学への取り組み方や人柄を丹念に考証することによって推定しています。

勿論、作家ではなく学者ですから、断定的な物言いはしませんが、広範な資料、様々な証言から、大変説得性があり、私も賛成です。

殿中の刃傷事件としては、後の浅野長矩と吉良上野介事件より遥かに大きな影響を幕政上に及ぼしました。最近、綱吉を名君だったなどと見直す論者もあるそうですが、それは間違いです。正俊があたかも綱吉が名君であると思わせる「颺言録（ようげんろく）」という書物を書き残したので誤解したのでしょう。正俊は自分が擁立した綱吉に、名君になって欲しい、と希求するあまりこの文書を残したようです。

正俊は、家光に殉死した佐倉藩主堀田正盛の三男に生まれました。父正盛殉死、兄正信改易などの逆境にも拘らず、正俊は順調に出世して、上州安中城主となり、やがて老中、古河城主となります。四代家綱が他界後、宮将軍を迎えんとした大老酒井忠清に抗して綱吉を推戴し、その大老となりました。春日局の養子であり、江戸城大奥で家綱と一緒に成長した縁もあったでしょうが、彼自身の領地経営の実績や人柄について残されている資料からみると、立派な人物であったようです。父の

遺訓「不矜」（ほこるなかれ）や、母の教え「又新」（日々またあらたに）を座右の銘とし自省怠りなかったといいます。（正俊の戒名は「不矜院殿又新叢翁大居士」）

刃傷事件後、「権勢に驕っていたから殺された」などいう人がいたそうですが、誤りでしょう。不矜と驕りは正反対です。又、儒学を学ぶこと深く、林羅山の子鵞峰などに親炙したそうですが、必ずしも朱子学に溺れず、陽明学なども学び、政治上に活かしたそうです。一方、綱吉も儒学を好み、自ら四書五経の類を大名・近臣らに講義をした、といいます。

小川教授は、正俊、綱吉ふたりの儒学の中味を様々な角度や当時の資料から詳細に論じ、その違いを「誰の為の儒学か」にある、とします。正俊の儒学は民のため、即ち治政に活用する為のものであったが、綱吉のそれは「儒学の権威をみずから握り、独占することで将軍権力を強化しようと」したものであったというわけです。

正俊は冷徹ではなかったが剛直の面があり再々綱吉に諫言することが有った、と言われます。正に良臣と言えましょう。しかし、いつか両者の間は冷えていったのでしょう。自分を擁立してくれた功臣ですから無碍には退けられず、将軍の鬱々たる気分はやがて人を使嗾してこれを刺させた。正休は命による事だからでしょう、

刺したあと何ら抵抗しなかったそうです。しかし、生きていられたのでは秘密が護れぬから、その場で惨殺された。この辺は、ミステリーじみていますが、ありうる話です。諌言を怠らぬ正俊は、独裁を欲する綱吉には邪魔だったことは確かです。

堀田家はその後山形、福島へと移され幕政から遠ざけられました。正俊は一旦は寛永寺に葬られたが将軍の忌憚にふれ、直ぐに浅草の金蔵寺へ移され、その後堀田家の菩提寺である甚大寺に改葬されました。正俊の孫、正亮の代に老中に復帰し佐倉へ移封され、以後、佐倉藩主として明治に至ったためです。

元佐倉市長堀田正久氏は正俊から八代目の子孫で、家に伝わる古文書や口伝をもとに「堀田三代記」（昭和六十年新潮社）を書かれました。将軍の命により暗殺された、とは堀田家としては言えなかったが、家中では秘かに伝えられていた、と書いています。子息正典氏も今回、小川氏に家伝来の文書など開示し、協力されたそうです。

長くなりました。また書きます。

（２０１５・４）

三たび激戦した臼井城

N君、

佐倉の秋祭りが終ると、日ごとに寒さが増してきます。お元気ですか。

千葉氏は一四五七年から一五九〇年まで、本佐倉城を本拠地とし、前半は古河公方に、後半は小田原北条氏に臣従しました。本佐倉城は、佐倉市と酒々井町にまたがって郭の跡を鮮明に見ることができますが、眼下の印旛沼に湊を有し、沼の周辺各地に数箇所支城を備えました。今日はその一つ、臼井城の話をしましょう。

臼井城は沼の西端にあり、三度、名のある武将を迎え撃ったことで有名です。今、印旛沼を見下ろす高台の城跡は公園として整備されていますから一度ご覧下さい。沼の対岸に向い城として師戸城跡があり、こちらも千葉県立公園として空堀や土塁が見られます。

最初の戦いは文明十一年(一四七九)、守将は千葉孝胤(のりたね)、攻め手は太田道灌です。孝胤の祖父馬加(まくはり)康胤は、享徳四年(一四五五)千葉本家胤直を殺し本家を簒奪したのですが、胤直の甥、實胤・自胤が武蔵に逃れ上杉家の重臣太田道灌を頼りました。この

頃、関東は古河公方と上杉が争いを繰り返していましたが、胤直は上杉派、康胤は公方派でしたから、道灌も放っておけなかったのでしょう。文明十年、両者は松戸で衝突、孝胤は負けて臼井に逃れました。道灌は臼井を六ヶ月囲み、最後は落としたのですが、弟、太田図書資忠を戦死させたほどの激戦でした。しかし、何故か道灌も實胤・自胤も、守将を置いて武蔵へ引き上げたので、一旦落ち延びた孝胤は臼井城を奪い返すことが出来ました。

二度目は永禄四年（一五六一）、守るは千葉の一族臼井久胤、寄せ手は里見の一族正木大膳亮時堯。里見氏は新田源氏、百年ほど前安房にきて勢力を得てこの頃越後の長尾景虎と同盟して小田原北条氏に対抗していました。この前年、景虎の陣触れで里見も行動を起こし、北条方であった千葉一族の諸城に襲い掛かります。臼井城も前回と異なりあっけなく落城し臼井氏も断絶してしまいました。しかしこの年、小田原城を囲んだ景虎は城を落とせず、鎌倉八幡宮の社前で上杉の名と管領職を継ぎ政虎と名乗ることを宣言して、越後へ帰ってしまいます。北条方はまた勢いを盛り返し、臼井も千葉一族が取り返し、一族の原氏が城主となりました。

三度目は永禄九年（一五六六）守るは原胤貞、攻め手は上杉政虎、即ち謙信が自ら襲来しました。この二年前、小田原北条と里見義弘は第二次国府台合戦を戦い、里見

は敗れて安房に逃れ、北条の勢力は益々増大しました。見かねた謙信は何度目かの関東出兵を試み、臼井城を囲みます。謙信は臼井城の向かいに一夜城まで築いて攻撃したが、前二回と違って、此の時は落ちなかったのです。謙信にも長期帯陣できぬ事情があったのでしょう、囲みをといて去ります。永禄十二年上杉と北条は越相同盟を結び、北条の関東の覇権は確立し、戦国の世も漸く終末に向います。

本佐倉城の千葉本家ですがこの頃城主が二人も家臣に殺されるという乱脈ぶりであったため、小田原の介入を招き、北条氏は兵を派して直轄統治したと伝えられます。天正十八年（一五九〇）、秀吉の小田原攻めの時、千葉介重胤は十五才、小田原城中にありましたが開城後、江戸の陋巷に住んだといいます。関東一円家康のものとなり、本佐倉城は久野宗能が一万三千石で、臼井城は酒井家次が二万石で入りました。翌々年、家康の五男武田信吉、次いで六男忠輝が本佐倉城主になりますがいずれも短く、土井利勝が一六一四年鹿島台に新城を築くと廃城になりました。臼井城も慶長九年（一六〇四）家次が高崎へ転封となるや廃城となり、江戸期を通じ臼井は成田街道の宿場町でありました。

長くなりました。またお便りします。

（２０１５・１１）

称徳天皇と嶋足

牡鹿連嶋足（おじかのむらじしまたり）という男がいた。奈良時代の末のころである。この男、陸奥国牡鹿郡の出身で丸子氏と名乗る一族に属した。丸子氏は、蝦夷と考えられてきたが、近年の研究では上総国から牡鹿に移住して来たというのが通説である。

丸子氏は牡鹿郡きっての実力者で、郡の大領即ち郡長であった。天平勝宝五（七五三）年、牡鹿連という姓を授かる。

当時、このクラスの子弟は成人すると都へ上り、官人として勤務し、帰郷後地方官吏につくならわしがあった。嶋足も天平の末頃奈良へ上り授刀舎人に任じられたと推定される。位は大初位（そい）下、三十ある位階の内二十八番目であった。

この男は、延暦二（七八三）年正月に死んだが年齢は定かではない。五十代半ばと推定される。死んだ時は正四位上道嶋宿祢（すくね）嶋足と言った。三十階の七番目だから、三〇年間で二一階級上がったことになる。続日本紀の卒伝によると、

「乙酉、正四位上道嶋宿祢嶋足卒しぬ。嶋足は、本の姓牡鹿連にして、陸奥国牡鹿郡の人なり。体貌雄壮、驍武にして馳射を善くす。宝子中に授刀将曹に任ぜらる。八年、恵美訓儒麻呂が勅使をおびやかせしとき、嶋足と将監坂上苅田麻呂と詔を奉けたまわりて疾く馳せ、射てこれを殺す。功を以て擢でて従四位下勲二等を授け、姓宿祢を賜い、授刀少将兼相模守に補す。中将に転りて、本の姓を改めて道嶋宿祢と賜う。尋ぎて正四位上を加えられ、内厩頭、下総・播磨等の守を歴たり。」

仲麻呂の乱（恵美押勝の乱）の時、孝謙上皇は嶋足、苅田麻呂の活躍でこれを鎮圧し、称徳天皇として位に復した。嶋足の功がよほど嬉しかったのであろう、異例の昇格をさせる。従七位上授刀将曹を従四位下授刀少将にしたのだから若手将校がいきなり師団長になったようなものである。姓も連から宿祢に昇格、苗字も牡鹿という郡名から、道嶋という国名（道奥）に因んだものに格上げされた。

この異例の扱いが意味するところはなにか？　単に功績を賞したわけではない。

称徳天皇は本気で道鏡に天皇位を譲るつもりであった。彼を溺愛していたからか、

他の天武系諸皇子にウンザリしていた為か、多分両方だったのではないか。
称徳天皇は道鏡を法王に任じ（（七六六・一〇）「法王宮職」を新設し（七六七・三）大臣以下を法王に拝賀せしめ（七六九・一）、弓削里に由義宮を造営して西京と称し、河内国を河内職に変更した（七六九・一〇）。
いずれも道鏡が皇位を嗣ぐことを前提としている。しかし、宮中の空気は圧倒的に反道鏡である。そこで、称徳天皇は武力が必要と思ったであろう。武力とは、既存勢力と何のしがらみの無い、まして藤原氏など在京貴族一門出身ではない、そして強い武人を味方に持つことだ。坂上苅田麻呂か牡鹿連嶋足か？苅田麻呂は渡来系ではあるが、既存勢力……。こう考え来った時、称徳天皇には、嶋足こそ自分の懐刀として役立つ唯一の臣と思えたのではないか。自分より一回り年下の、地方出身の男は自分を裏切ることはあるまい。称徳天皇は嶋足の位階を破格に引き上げた。
しかし、その意を果たせず五三歳で病没してしまう。或いは藤原永手辺りが一服盛ったかもしれない。この時嶋足は近衛中将であったが折から陸奥国で起きた蝦夷の反乱調査を名目に陸奥国に追い払われていた。後継は藤原一門が一致して推した白壁王が光仁天皇として即位した。白壁王は六二歳の高齢、藤原氏の狙いはその子山部王（後

に桓武天皇）であった。平安時代以降の藤原一門の繁栄はその帰結である。

余談ながら、称徳天皇が道鏡に譲位しようとしたことは今から見ると奇異な感じがするが、私は当時は天皇位というものが確立したものではなかった、万世一系などとは誰も考えていなかったことを示しているように思われる。天武天皇以前は伝説・神話の部分が多いし、継体天皇が北陸方面からやって来て大和の大王位を簒奪したことは記憶にも新しかったに違いない。

（２０１６・７）

異　端

日本では、秀吉の時代から明治初年に至るまで、キリスト教が禁教とされ、弾圧を受けたことはよく知られている。だが、仏教の一派が、同様に禁教とされ、発見されしだい死罪・島流し・入牢等の咎めを受けた、という事実はあまり知られていない。

それは、日蓮宗の「不受不施派」といわれる宗派で、ある研究者によれば、江戸期に処刑されたものは、磔刑、斬刑、牢死、自害、断食等、人命を失ったもの百五十六人、島流し百八十一人が数えられるという。（影山堯雄「日蓮宗不受不施派の研究」）入牢者の数はこれに数倍するであろう。その苛烈さは、キリシタンのケースとさほど変わらない。

キリスト教が為政者の政策上の理由で弾圧されたのは、わからなくもない。日本の従来からの神仏という多神教と全く異質の一神教でもあった。島原の乱も起こしている。

しかし、長年日本人に親しまれてきた仏教の一派が、いかなる理由で禁教とされた

のか、誰がそう決めたのか、興味のある問題である。この問題について、考えてみたい。

一

宗教というものは、すべて自分たちの教義が唯一正しい、他宗はインチキだ、というものである。

古今東西の宗教をみるに、一神教は排他性が強い。ユダヤ教、キリスト教、マホメット教などは古代から現代に至るまで激しい抗争を繰り返してきた。同じ宗教の中の派閥争いとなると更に激しく、キリスト教の新旧両派の争いは近代に至って漸く終息したが、マホメット教のシーア派・スンニ派の争いは現在も毎日のニュースに登場する。

多神教はギリシャ、ローマに見る如く寛容である。また、仏教も、他の宗教に比べれば、最も寛容な宗教といえよう。

しかし、仏教といえども中には、他派に対して攻撃的な宗派もある。日蓮宗は、仏教の中では排他性が最も強いのではなかろうか。日蓮宗には「四箇格言」という言葉がある。

「念仏無間　禅天魔　真言亡国　律国賊」　（諌暁八幡抄）

念仏は無間地獄に堕ちる業因である、禅は天魔の行為である、真言は亡国の原因である、律は国の賊である、として浄土宗や他宗派を攻撃した。

日蓮は鎌倉時代に比叡山で修行後、法華宗という新しい宗派を興した。先行する浄土宗、禅宗、真言宗、律宗、などとの差別化のために、それらがいかに間違っているかを強調せざるを得ず、勢い激しい言葉を用いたものであろう。また教義面からみても、先行各派が自己一身の魂の安楽を願う、来世指向型であるのに対し、日蓮宗はこの世をよくするためにどうしたらいいかという現世指向型という違いがあるように思う。折柄の元寇の危難に「ひたすら南無妙法蓮華経を唱え、国家あげて法華宗に帰すれば救われる」と辻説法をした。

日蓮宗はどうしても政治性がつよくなる。日蓮の「立正安国論」は時の政権に、かくあるべし、ということを説いている。諌暁（かんぎょう）と言って、常に為政者に説教してきたのが、この宗派の特徴である。（今日、創価学会が公明党という別働隊を使って政治に関与しているのは、この伝統によるのであろう。）

この為、他派との争いは、格段に多い。為政者も何度も手を焼いて、双方を呼び出

して宗教論争をやらせて、黒白の判定をくだしてきた。とりわけ浄土宗との喧嘩は度々で有名なものでは信長の「安土争論」（一五七九）、家康の「江戸城争論」（一六〇八）がある。いずれも日蓮宗が負けているのは、判定者も日蓮宗の強引さを面憎く思ったのであろう。

二

こうした攻撃性の強い姿勢は、同じ日蓮宗の内部の対立抗争の場合も、他宗にない苛烈な様相を呈する。そして、日蓮宗という宗派は、他宗以上に内部抗争の火種が多かった。

日蓮は武蔵の池上で没する直前、六人の高弟に後事を託した。六人は「不次第」すなわち順不同、上下なしとした。六老僧或いは本弟子という。この六人は各人が各地で弟子を養成したから、自然に派閥をなしていった。これをそれぞれの「門流」という。

また、教義上も、法華経の解釈や読経の仕方をめぐって相違が生じて対立する。「一致勝劣」の争いという。

更には、東西の反目もあった。日蓮没後、孫弟子日像が京都にはいり、説教に努め

て以降、特に室町時代に入ってから爆発的に教勢が伸張した。京都では町衆と呼ばれる商工業者階級、芸術家、芸能者が社会的地位を高め、大きな勢力となったが、彼らが日蓮宗の現世指向型の教義に共鳴したためであろう、下京区を中心に日蓮宗だけで二十四もの本山を擁するほどになった。これは、関東にいる信徒からみるとあまり快い話ではなかったであろう。日蓮は上総の出身、六老僧は皆関東で活動して死んだが関係寺院も多い。東西の対抗意識なども潜在したと思う。

そして、これらの対立をバックに「不受不施問題」が大きくなってくる。

三

四箇格言を標榜する日蓮宗は、他宗派の者からの施しは受けない、他宗派への施しはしない、としてきた。これが「不受不施」ということである。

日蓮宗がまだ広がらず、教団が小さな頃はそれも良かった。しかし、次第に大きくなり、付き合いが広がると不都合がでてきた。上流階級、貴顕と交わるようになる、京都の本山寺院の主には藤原家や足利家の出自の僧侶もでてくる。天皇の勅願寺になったりすると、当然、信徒ではない貴人から供養（接待や施し）がある。これを受けるか、受けないか。将軍家の法事のように、宗派の掟だから、出られませんと言い切

れない場合が出てくる。室町時代、将軍家の祖先供養に招かれた際に、宗派の掟を理由に辞退し、聞き届けられた例もある。

弱い権力者であればそれも出来た。しかし、強い将軍が、「幕命にそむくか」と言い出したら、教団が潰されるおそれがある。そこで、王侯除外制という理論が生じてきた。一般的には駄目だが、国主から言って来たら、その時は受ける、というご都合主義、長いものには巻かれろ、というものだ。当然、内部から反対が生じた。「国主も一般庶民も仏法の前には同列で特例を認めるべきではない。」という不受貫徹主義である。そして、自分たちが日蓮の教えを正しく伝える正統派であると主張する。

文禄四年（一五九五）九月、豊臣秀吉は京都東山妙法院（方広寺）大仏の千僧供養を営むにあたり、日蓮宗にも各宗と共に出仕するよう命じた。京都の日蓮宗諸寺は大騒ぎになったが、結局大勢は王侯除外を楯に、受けた。ひとり反対したのが妙覚寺の日奥であった。

後に日奥は大坂城へよびだされ、受不施派の日重らと対論をした。これが、公式の場における受・不受の対決の始めである。大坂城対論（一五九九）という。これは秀吉の死の翌年である。大老徳川家康は、日奥を説得し妥協案までだしたが従わなかっ

たので「公儀の命に背いた」として日奥を対馬へ流罪に処した。
日奥は、十三年後赦されて京都に帰り、引き続き「不受不施」を唱え、従う者も多かった。

四

徳川幕府の宗教政策は、仏教各派に、総本山を置き、総本山をして派内を統率せしめる、というものであった。この支配体系は浄土真宗のように宗祖親鸞の血統を引く者が統率している宗派はいいが、日蓮宗のような集団指導型宗派は激しい総本山争いとなり、その中で幕府が総本山と認めたのが身延山久遠寺である。
久遠寺はそれまでは関東諸本山の一つに過ぎなかったが、この結果日蓮宗全ての触れ頭となり、諸寺はその統率に服することになった。池上本門寺、中山法華経寺、小湊誕生寺などにしてみれば甚だ面白くない。この頃身延山久遠寺の法主、二十一世日乾、二十二世日遠は京都本満寺出身であったから、東西の対抗意識も働いたのではなかろうか。
本満寺は大坂城対論の日重の寺、受不施派の首魁である。しかし、江戸や関東の諸寺・信徒は不受不施を信奉するものが多かった。大体、田舎のほうが純粋なものであ

る。

総本山として宗派内を統率していく為に、身延山としては、不受不施派をなんとか退治しなければならない、関東の大きな寺を自派のもので掌握しなければならないという焦燥感にかられてきた。統率がうまくいかなければ総本山失格としてその地位を失う。

理論から言えば不受不施のほうが日蓮宗の正統といえるし、民衆にもわかりやすい。身延山久遠寺の取った策は、幕府を動かし、公権力を以て、押さえつけようというものであった。かつて、家康が日奥を流罪にした事実をあげ、「大権現様の決定されたこと」として不受不施派は異端、邪教であるというのである。そこで幕府要路に猛烈な運動を始める。

幕府当局としては、「不受不施問題」などという教義に関することには関与したくない、という気分であったことは容易に察せられる。大名や幕閣にも法華の信徒は沢山いるし、不受不施を是とする者も多い。家康とて教義の理非を判定したわけではない。命に従わないから罰したまでである。

慶長七年（一六〇二）伝通院（家康の母）の葬儀に日蓮宗の関東諸寺は小石川の壽

経寺で諷経、供養は受けなかった。

元和二年（一六一六）家康の葬儀に日蓮宗関東諸寺は武州仙波喜多院で諷経したが、供養は受けなかった。

元和九年（一六二三）十月、将軍秀忠は、永代、不受不施公許の御教書（折紙）を、京都所司代板倉伊賀守勝重を通じて下した。

寛永三年（一六二六）崇徳院（家光の母）の葬儀に日蓮宗の関東諸寺は増上寺で諷経し、池上本門寺、中山法華経寺らは供養は受けなかった。身延山久遠寺は受けた。

これらの例は幕府当局の空気をよく表している。しかし、慶安四年（一六五一）家光の葬儀になると、従前のように、供養は受けないが諷経したいという願いは許可されなかった。おそらく受派側が懸命に運動して阻止したものらしい。

五

身延山の幕府への働きかけは猛烈であった。

寛永元年、身延山二十一世日乾は秀忠の御教書破棄の訴訟を起こしている。翌二年本満寺の日暹（にっせん）が不受不施派を訴えたというが、寛永五年になると、この日暹が身延山二十六世となった。同六年二月、日暹は池上本門寺の日樹を寺社奉行に訴えてでた。

日乾・日遠・日暹と三人の新旧身延山法主（いずれも本満寺出身）は江戸に滞在したまま三年、本門寺攻撃、不受不施禁制訴訟を続けたらしい。（「身延山史」）この頃、身延山といえども、不受不施は一般的には守る、王侯だけ例外を認める、というものであったから大差はないのである。従って、「身延対反身延」の抗争といった趣があり、関東の庶民は反身延派が圧倒的だったらしい。身延としては、これを何とか「公権力対不受不施派」という構図に持っていきたいわけである。錦の御旗は「権現様のお裁き（大坂城対論）」である。

幕府も放って置けなくなったのであろう、ついに身延・池上両者を呼び、対決させることになった。

寛永七年（一六三〇）二月二十一日、「身池対論」は酒井雅樂頭邸で、酒井以下閣僚と、判者として天海（天台宗）・崇伝（禅宗）他、両派からは池上の日樹・身延の日暹ら各六名出席して行われた。この記録は二本あり池上本では本門寺側が、身延本では久遠寺側がそれぞれ勝ったとしており、真相不明である。後世書かれたらしい徳川家の公式記録では、身延山久遠寺の勝利としているが、これは寛文の禁制以後書かれたらしい。（宮崎英修「禁制不受不施派の研究」）そして、この日、理非の裁定は出され

なかったらしい。双方が勝った、と称していた。
三月四日、小石川伝通院で家光の姉（京極若狭守妻）の葬儀があり、日樹、日暹共に読経したが、布施は受けなかったという。これにも勢いを得て日樹は三月二十一日、寺社奉行に身延処断を訴え出ている。
三月二十六日と二十九日の両日、江戸城西丸で両者の審問があり、四月一日、判決があったがその内容は、日樹は上意違背の罪で伊那へ流罪、中山、小湊以下の諸寺住職も国内各地に流罪というものであった。
この判決は、教義の理非は判定せず、身延の総本山としての指揮権を認め、これに従わない、ということで日樹ら六人の僧を追放処分にしたものらしい。追放された寺には身延から後任が送り込まれた。
身延山は形式的には勝利を収めたのである。思うに、不受不施派は対論の勝利を確信し、なんら手を打たなかったのに対し、身延側は懸命の裏面工作をおこなったらしい。
一つには、支援者である。身延にはお万の方（家康の側室。頼宣・頼房の母）の縁で、紀州・水戸の徳川家が身延山の後ろ盾であった。二つには新旧三人の身延山法主

が江戸にはりついていたのだから、それぞれの人脈を駆使して自派の為に働きかけたであろう。第三に、これはまったくの推量であるが、相当のカネも使ったにちがいない。

大体、幕府にとりどちらでもいい問題である。日蓮宗があげて不受不施だといって、葬儀や法事に出てこない、というなら問題だが、日蓮宗としては、出てきて命令に従っているのだから、あとは宗派内の統率の問題として「関与せず」でも良かった。

こういう時、手ぶらで頼みにいくわけにはいかない。身延山は要路のあちこちに相当の賄賂をばら撒いたであろう。

ところが、関東では、末寺に至るまで圧倒的に正統不受不施派がつよく、身延のいう「王侯除外論」を受け付けない。身池対論の結果は身延が勝ったとしても身延としては、終わらない。池上本門寺などは、身延山に誓紙を出して服従したが、今度はその末寺が従わない。強行すれば僧は寺を出て庵を結び、檀家はみなそちらへついていく。不受不施派を禁止して、末寺を受不施に転向させなければ、第一、本山の経営が立ち行かないのだ。その禁止を公権力に頼らざるを得ない。

同年六月七日、身延の三人（日乾・日遠・日暹）は揃って将軍家光に会い、不受不

施派の全面禁止を訴える。しかし、望む結果はえられなかった。
身延は引き続き禁止発令を求め、幕府の要路に運動を続けた。

六

身延山が目的を果たすのは、二十八世日奠に至ってからである。
二十六世日暹は慶安元年（一六四八）没し、二十七世日境が後を継いだ。承応元年（一六五二）日境はなお身延に従わない中山法華経寺ら不受不施派の五寺の住職を訴え出ているが、以後毎年のように、多い時は年に数度、訴えを起こしている。日境が訴訟中に江戸で客死すると、跡を継いだ日伝（後に日奠）が訴訟をくりかえした。日奠は寛文七年に没するまで八年間在位したが、そのうち三年は江戸に詰めていたという。日奠の頃になると、身延山は他宗派の一般人からの不受も変更し、「貰うものは貰う」という完全な「受不施」論を取るようになったらしい。
寛文五年（一六六五）、身延山の日奠が躍り上がって喜ぶ事態が起きた。
幕府は全国の寺社に「朱印状改め」を下令する。この頃、俗界でも領地争い、境界紛争が多発していたためか、寺や神社の所領についてもこれを調べ直し、改めて朱印状を発行する、というのである。

大名や幕府が寺領を寄進するのは、供養である、という論理に基づけば不受不施派はこれを受けられないはずだ。朱印状を受ける時、請書を出させ、その中に、「供養として頂戴します」という文言を入れるようにすれば良い。身延山は請書の文案まで作成したというから、朱印状改め自体が身延の考案かもしれない。

老中久世大和守から、「朱印状下賜は供養である」との申渡しを受け不受不施派は割れた。

「受け取らない」という純粋派と、「いや、寺領は仁恩として下されるものとして、受け取る」という妥協派である。後者を悲田不受不施派という。

これで「身延対反身延」の抗争は、明確に「公権力対不受不施派」という構図に代わった。朱印状を貰わずに寺を続ければ「お上に楯突く不届きもの」となる。

七

更に決定的な打撃は「寺請禁止」であろう。

寛文九年（一六六九）四月三日、幕府は新たな禁令をだした。

「公儀え書物を致さざる不受不施派之日蓮宗寺請に取るべからず。町中五人組切に立相、これを改め、借屋たなかり、借地者は其地主よりこれを改め紛れな

き様に檀那寺と引合せ吟味仕り寺請状を取申べき事　以上」

書き物致さざるとは、悲田派のこと。寺請とは、檀那寺が発行する身分証明書で、今後不受不施派の寺の寺請状は認めないというものである。寺は行政組織の末端として機能していたが、不受不施派の寺からはその機能を取り上げたのである。これも、身延山から、再三、執拗な働きかけの結果であろう。

寛文五年以降、急転直下に幕府が関与したについて、この年、加賀爪甲斐守直澄という旗本が寺社奉行に就任、身延山に賄賂で篭絡された結果だと見る人が当時から多かったそうである。

甲斐爪に吹きたおさるる不受不施は流るる水のあわとこそなれ
加賀爪にかきやぶられし法華宗いたやかいやといふは不受不施

などという落首が江戸市内に出されたという。（「禁制不受不施派の研究」宮崎英修）

加賀爪甲斐守は寛文五年から十年まで寺社奉行の職にあったが、十年十二月免職になり閉門となっている。（「柳営補任」という江戸幕府の任命記録によれば、幕府の寺

社奉行に任命されたものは一九四人、うち、四人が召放閉門の処分をうけている。）

ともあれ、これらの措置をもって、不受不施派禁止という成文法はないものの事実上禁制されたのである。これを不受不施派では「寛文の惣滅」という。

思うに、不受不施派を禁制としたのは、何代にもわたる訴訟の結果ではあるが、身延山二十八世法主日奠と寺社奉行加賀爪直澄の二人に帰せられるであろう。

この後も、毎年のように身延山から幕府に不受不施派摘発の訴訟がだされているところをみると、地下へ潜った形で、隠れ切支丹のように不受不施の信仰を守る人々がいたことをものがたっている。一般信徒は表面受派の寺の檀家を装い、暮夜ひそかに集まり、不受不施派の僧を囲んで信仰活動を行ったのである。

そうした活動に対する告発が度々出ているということは、切支丹ほどは、幕府も取り締まりに熱は入らなかったことを窺わせる。しかし、訴人があれば逮捕せざるを得ず、明治九年に「不受不施派おかまいなし」と新政府が布告するまで、遠島、入牢などは続いた。

解禁された時、この派の信者は数万人であったという。

私の父の実家もその内の一人である。父の家は、千葉県香取郡多古町に戦国時代か

ら居住していたらしいが、この界隈は岡山県と並んで不受不施派の多いところである。寛政六年、多古法難と呼ばれる取締まりがあり、僧侶一二名が捕縛されて一人流罪、十一名牢死、在家も七人が牢死している。

祖母の実家は嶋村（現在多古町島）で一村挙げて不受不施派であった。捕吏が踏み込んで来たとき、僧侶を逃がしたり匿う時間稼ぎのために、村内は道が迷路のようになっており、「行商人泣かせ」と言われたそうである。また、屋敷内に隠し部屋を設けてあった家もあった。（私はそれを見せてもらったことがある。）天保九年（一八三八）、村で三二名が捕えられ、五人は江戸送りとなっている。

島に正覚寺という寺があり、禁教時代は受派で解禁後不受不施派に復した。現在、無住で私の従兄など在家信徒が役員として寺を維持している。

（参考文献）

「身延山史」　身延山久遠寺
「不受不施派の源流と展開」　宮崎英修
「禁制不受不施派の研究」　同

「日蓮宗不受不施派の研究」　影山堯雄編
「日蓮宗不受不施派読史年表」　長光徳和・妻鹿淳子
「不受不施派殉教の歴史」　相葉　伸
「不受不施派農民の抵抗」　安藤精一
「日蓮教団全史　上」　立正大学編
「法華宗と町衆」　藤井　学
「忘れられた殉教者」　奈良本辰也・高野　澄

（２０１６・７）

熊野神社と道興准后

私が住む東京都国分寺市内で最も古い神社は熊野神社であろう。

古くは東山道武蔵路、下っては鎌倉街道と呼ばれた、府中から狭山・高麗川方面へ北上する街道に面している。ＪＲ西国分寺駅から徒歩五分ほど、今は住宅に囲まれている。

いつ頃勧請されたのかは定かではない。しかし、元弘の頃、新田義貞と鎌倉幕府の戦争の時焼失したそうであるから、鎌倉時代以前であることは間違いない。また、熊野信仰が全国的に広がったのは平安時代であるから、おそらく創建は平安中期と思われる。

この神社の境内に人の背丈ほどの石碑が建っており、万葉仮名で和歌が刻まれている。

朽はてぬ名のみ残れる恋ヶ窪

今はたとふもちぎりならずや

由緒書きに、「聖護院門跡道興准后が文明十八年（一四八六）五月御東行の折御歌御奉額有、」とある。道興が都を立ったのは文明十八年六月上旬の頃、と彼は「廻国雑記」の冒頭書いているから、当社に来たのは翌文明十九年（七月に長享と改元）五月のことか、あるいは月相違であろう。碑の文字は有栖川宮幟仁（たかひと）親王、明治七年の書とある。有栖川宮家は歴代書道と歌道の家で（幟仁親王は明治天皇の書道師範）、代々次男以下を門跡寺院に入れてきた家でもあったから聖護院とも縁が深かったと見られる。

☆

道興は、関白を勤めた近衛房嗣の子で幼少から仏門に入り、聖護院門跡となり、寛正六年（一四六五）三五才の時准后宣下を受けた。三后に准ずるという関白クラスに授けられる称号である。

文明十八年六月から約十か月、東国を巡行して歩き、「廻国雑記」という紀行文を残した。彼が詠んだ和歌や漢詩が多数のこされている。先述の和歌もそのなかの一つである。歌は、「遠い昔、畠山重忠との実らぬ恋に身を投げた娘に因むという恋ヶ窪を今

訪ねたが、これも何かの縁であろうか」というものだろうか。
彼がこの地を訪れたのはたまたまではない。
聖護院というのは、熊野と深いつながりがある。園城寺の僧・増誉が山岳修行を積み、白河上皇の熊野参詣に際しその先達をつとめた。その功により、「熊野三山検校」に任じられ、役の行者が創建したとされる常光寺を下賜されたのが始まりとされる。聖体護持の意味を込めて聖護院とした。隣にある熊野神社は京都三熊野の一つである。聖護院の代々の住職は皇族か摂関家出身者で門跡寺院と言う。
聖護院は、修験宗の総本山で、山伏の統括役だが、熊野とのこうした繋がりを現代の各地にある熊野神社の人々がどのくらい承知しているか疑わしい。私は恋ヶ窪の熊野神社の宮司に「聖護院とは今でも行き来があるのですか?」と尋ねたことがある。「いや、ありません。」とのみで「聖護院とは何?」という感じだった。
道興は「廻国雑記」には書いていないが、どうやら熊野検校として、関東、陸奥の熊野神社を訪ね歩くというのが目的であったらしい。従ってこの恋ヶ窪だけでなく、上総、下総、安房、(房総半島は平成の現在も熊野神社の数は全国で最も多い)、相模、上野、下野、常陸、甲斐、陸奥と各地の熊野神社を歩いたはずであるが、表立って神

社のことは書いていない。僅かに「佐西（笹井）の観音寺といへる山伏の坊に到りて」とか、「河越といへる所に到り、寂勝院といふ山伏の所に一両夜やどりて」とか出てくるのみにて熊野という字は全く出てこない。専ら、地元の武士たちと、詩歌のやりとりをした、という記事のみで、どうやら、本当の目的は公に出来ない事情があったのではなかろうか。

☆

この文明という年代は、応仁の乱が十一年にわたり続き、京都を焼亡させた年代である。応仁元年（一四六七）五月勃発した戦乱は、文明五年（一四七三）細川勝元・山名持豊という東西両軍の主将が死んだ後もだらだらと続き同九年、漸く終息した。

京都は焼け野原になり、将軍義政の祐筆であった飯尾常房が「汝やしる　都は野辺の夕雲雀　上るを見ても　落つる涙は」と詠んだほどの惨状となった。公家たちも多くは地方の縁辺を頼って、都を去らざるをえなかった。

しかし、道興のように、老齢といってよい五十六才にもなった身で各地を巡った例は、西行の如く世捨て人ならいざ知らず、准后という高貴な身ではその例を聞かない。やはりこの巡行は何か目的があったように思うのだがそれが何であったのか、いまだ

わからない。

聖護院、熊野三山という修験僧・山伏集団は、鍛えられた武装集団としてある種の戦闘能力を備えていたように思う。それが、全国に出先を持っていたのだから、政治的動きも為し得たのではなかろうか。そして、道興は、なお存命中であった父・房嗣太閤の密命をおびて東下したのではないか、などと私は空想するのである。

（２０１６・１０）

上総と下総のさかい

千葉県成田市の南に香取郡多古町と、山武郡芝山町という二つの町がある。この二つの町の境界線は、昔は上総国と下総国の境界をなしていた。多古は下総、芝山は上総である。上総はこの辺では下総国内へ突き出たような形をしている。

二つの町の間に小原子台という南北に細長い台地がある。空中から見れば水田地帯に浮かぶ島のような、低い台地である。この台地の上を、一筋の細い道が南北に貫いている。

この道が両町の境界線、すなわち両国の国境なのである。今は一つの県内のことであり、上総とか下総とか言う人も殆どいないが、江戸時代までおよそ千年の間は今より強く意識されていたことであろう。

小原子台（土地の人は《おばらくでえ》という）の北端芝山町側に冨里ゴルフクラブがある。このゴルフ場は、昔は成田空港の敷地内にあって、空港建設に際し、移転させられたのである。移転工事中に遺跡が発見された。六世紀後半から十世紀、奈良・

平安時代の集落の跡である。小字名を取って「庄作遺跡」という。集落の住民は、いつの頃か台地の上から下へ、つまり稲作のやり易い方へ住まいを移したのであろう。かなり大規模な遺跡だそうだが、今、見ることはできない。発掘調査が行われた後、埋め戻されて、今はその上でゴルファーが白球を打っている。

南端の多古町側に東京国際空港ゴルフクラブというゴルフ場がある。（成田空港は、当初、東京国際空港といった。）台地の東側斜面を香取郡林村、西側斜面を山武郡小原子村と言ったが、前述の如く、現在は多古町林、芝山町小原子である。そしてこの台地の上、ゴルフ場にされなかったところは、双方が畑として耕作している。近年、多古工業団地も形成されたが、今はこの一角を圏央道が通ろうとしている。

さて、二つの町の境をなす道のことである。

畑の中を通るこの道は私が子供の頃は舗装もされておらず、農道であった。幅六メートルほど、大型車両のすれ違いが難しい。今は舗装こそされているが、国道でもなく、県道でもない。ふたつの町の町道である。境界をなす町道は、共同管理か、或いは道の真中で分けるのか、町役場で聞いてみた。境界線は道の真中であるが、道の管理はある地点から南北にわけて、北を多古町、南は芝山町が管理しているそうである。

道の東側、つまり多古町側の畑の中に小さな墓地がある。聞くと、小原子、芝山町の住民の墓地だという。

農道が境界線だということは、江戸時代などは境目争いが頻繁にあったらしい。小原子の年寄りに聞いた話では、「多古のほうが強くて、小原子は負けてばかりいた。墓まで取られてしまった。」という。真偽は定かではないが、その口調には先祖代々の墓が、道一本とはいえ、他国にあるという苦々しさが感じられておかしかった。

江戸時代、多古は久松松平家一万石余の大名領、山武郡側は旗本領、即ち天領であった。私の推測であるが、久松といえば、家康の生母、お大が再婚した先で、本家は四国松山で徳川の家門に列する大名であり、多古はその分家である。いわば権現様の異父弟の流れとあって、天領の代官といえども争い事になると歩が悪かったのではあるまいか。

江戸時代よりはるか昔、まだ「総の国」が生まれる前、この地方は「海上国造」が支配していた。海上とは「海のほとり」の意である。あまりに広いので上海上、下海上とわけられ、先代旧事本紀によれば、どちらも国造は出雲系であったという。出雲

人が武蔵を経てこの地にやってきたのであろう。

そこへ大和系の人々が黒潮に乗ってやってきた。彼らは武射(むさ)国や、印波(いにわ)国を立て国造となった。律令国家が成立するや、この地方は総の国と呼ばれるようになり、国郡制が敷かれるようになると上総国、下総国と命名された。東海道は三浦半島から海を渡っていたから、大和に近い南側が上になった。

国造たちの「国」は評（後に郡）に格下げになった。下総の多古地域は、香取神宮の神郡として建てられた香取郡に編入された。上総の芝山地域は武射郡（後に南隣の山辺郡と合体して山武郡）に編入された。下総の海上郡は銚子界隈の小さな郡として名残をとどめた。この郡は平成の合併後、郡内が皆、市になったため消滅した。

（２０１６・１１）

あとがき

私は歴史とならんで旅が好きです。よく妻と、或いはグループで、また一人であちこち旅をしますが、多くは景色を眺めるというよりは歴史にからんだ場所に行きます。歴史の舞台に登場したときと、すっかり状況は様変わりしていますが、その現場に立って、その風に吹かれながら往時に思いを馳せるのは、歴史上の出来事を考える際に必須のように思っています。

本書は、脈絡もなく、一貫したテーマを追求したわけでもなく、とりとめのない歴史随想ですが、登場させた地名のところは、すべて歩きました。桃生城跡、伊治城跡などは今何かが残っているわけではありません。或いは、土塁や空堀がわずかに残る、とか、古墳のかたちが残るだけという場所もあります。しかし、その場に立っていると、甲冑姿の武人や、首長を葬る古代人が隣に立ち並んでいるような気がするのです。

私が属する「古代の東国探訪学習会」（歴博友の会自主勉強会）や、「えみし学会」は双方とも、年一度フィールド・ワークと称して一泊で史跡めぐり旅行をしています。

そして、各地の有識者の方からお話を伺っています。

現地の風に吹かれることともう一つ大事なことは、専門家の方のお話をお聞きすることだと思います。幸い、今日様々な講演会や研究発表会が頻繁に開催されています。私は努めて拝聴に伺っています。また、今回、「異端」を書くにあたっては、一年間、立正大学に通い、宗教学部長寺尾英智教授の「宗史論」を聴講しました。日蓮宗の歴史を勉強する最高の場で、第一人者の講義をお聞きできたことは大変幸運でした。

本書を発行するにあたり、編集・デザイン・校正等にご尽力頂いた史遊会サロン主人・新井宏様、身に余る序文をお寄せ頂いた柴田弘武様　美しい表紙を描いて下さった佐藤ひさよ様、ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

著者略歴

平山善之（ひらやま よしゆき）
昭和 17 年 5 月生。千葉県出身。
昭和 41 年　東北大学法学部卒業、㈱住友銀行入行。
平成　9 年　同行定年退職
平成 16 年　佐倉市商工会議所専務理事退任

国立歴史民俗博物館友の会会員
えみし学会副会長

歴史のさんぽみち

平成 28 年 12 月 10 日発行
著者　平山善之（ひらやま よしゆき）
〒185-0034　東京都国分寺市光町 1-30-7-109

出版協賛 史遊会サロン